
性悪魔術師と白銀の歌い手

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性悪魔術師と白銀の歌い手

【Nコード】

N6578V

【作者名】

まあ

【あらすじ】

自己犠牲と言う悲しい言葉が当り前になった国に自分達の息子すら見捨て国を捨てた両親を持つ少年『フィル・ユークリッド』。彼は幼い頃から両親の行いにより卑怯者のレッテルを張られて生きてきました。その中で少年の心は歪み、少年はいつしか戦場で先陣に立ち自らの死によりそのレッテルを取り除こうと考えるようになります。しかし、彼には戦場を駆ける才能は持ち合わせていませんでした。彼が持つ才能は新たな魔法を生み出し、戦場から最も遠いところで戦う才能。望まない才能に恵まれたフィルは何を思い生きる

のでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』、
『光と影』にもリンクしています。

プロローグ（前書き）

今までは二次創作をメインに書いていましたがオリジナルファンタジーを書いてみたくなり投稿しました。

感想や評価、アドバイスをいただければ幸いです。

プロローグ

昔々の物語。小さな国が点在し、争いが絶えなかった時代。

父王を戦争で失い小さく幼い王子が小さな国を受け継ぎました。

民は幼き王を立て国を1つにまとめようとする一派と幼き王を傀儡とし、国を我がものとしようとした一派に別れて幼き王の知らないところで大きな争いが起きようとした時、幼き王は全ての民の前で言いました。

「国を守るのは兵士ではない。国民1人1人である。私は小さく何も知らない王である。だから、私のために国のために命をかけて戦って欲しいとは言わぬ。ただ、我が国が他国からの侵略を受け、窮地に陥った時は、国のためではなく、大切な家族、恋人、友人を守るために力を貸して欲しい。私はこの国に生きる全ての民が生きる力を守る力を持てる国を作りたい」

その言葉は今までの国の考えを破壊する言葉であり、多くの民はその言葉を鼻で笑うとこの小さな国の結末を決めつけ、この国を後にして行きました。

しかし、幼き王は諦めずに今までの王達が民から集めながらも使う事のなかった血税おつのかしを投げ出して国に住む全ての民が生きるための守るための学園を建設し、指導する者として近隣から奇人変人と呼ばれる魔術師や荒くれ者と呼ばれる傭兵達を招きいれました。王宮にあった血税は直ぐにそこを付きましたが幼き王は自ら招きいれた者達より多くのものを学び、自分の力とし、他国や魔物から国が襲われた時には常に先陣に立ち民を守り戦い続けました。その幼き王の姿は民に力と勇気を与え、民は幼き王とともにこの小さな国を守

る事を誓いました。

小さくも1つになつた国の姿に国を見捨てた者達も幼き王の決意に心を動かされ、多くの民が小さな国に戻り、幼き王が守ろうとした小さな国は大きな国や魔物の攻撃にも耐えうる小さくても強く誇り高き国になりました。

この国の根源は大切な人達を守るのは自分達の力であり、大切な人達を守るためには自分の命ですら簡単に投げ出す事のできると言う『自己犠牲』と言う悲しい言葉。

そして時代は、そんな悲しい言葉が当り前になつた時代に移り変わり、物語は紡がれて行く。

第1話

「聞いたか？ あの卑怯者の息子。また、やったらしいぜ」

「聞いたよ。魔術式の新しい構築式だつてよ。流石は卑怯者の息子、戦場の後ろ側で安全に戦う方法は簡単に思いつくんだよな。先陣で戦うのは逃げていくくせによ」

「才能すら両親に似て卑怯なんだから嫌になるぜ」

王立であり、全ての民が平等に知識や武術を学ぶ学園の廊下を不機嫌そうな表情で歩く目つきの鋭い少年を見た数名の生徒がその少年に聞こえるような大きな声で言うが少年はその不機嫌そうな表情を変える事なく廊下を進んで行く。

「おい。聞こえているのかよ。卑怯者のフィル」ユークリッド様。

俺達が命を賭けて戦場に立つ術を学んでいるなか、卑怯者の魔術師様は安全なところで研究かよ。良い御身分だな」

「……」

少年『フィル」ユークリッド』の態度が気に入らないのか数名の生徒達はフィルを囲み因縁をつけ始めるが少年はそんな生徒の様子を見て反応もせずに、

「……我が前に立ちふさがる者を焼き払え。フレイムロード」

表情を変える事なく、小さな声で魔法の詠唱を始めるとフィルの周りには炎の道が現れ、彼に因縁をつけた生徒達はその炎から飛び退くと、

「……人に因縁をつける前にやるべき事があるんじゃないのか？ それともなんだ？ 国を守る魔法を作る俺の実験台になってくれるのか？」

フィルは無表情でありながら見た者全てがその異様にも感じる冷たい視線を向けるとフィルの持つ他者の事など塵芥程度にしか思っていないさそうな視線にケンカを売る相手を間違えた生徒達は腰を抜き、廊下に座りこんでしまう。

「……逃げないって事は実験台になる事を了承したと受け止めさせて貰って問題ないな」

フィルは小さく口元を緩めると腰を抜かしている生徒達を見下しながら言い、彼の右手には魔法の詠唱を始めていないにも関わらず、大きな魔法球が形成されて行き、

「……喜べ。次に発表される予定の新たな魔法だ」

「フィ、フィルさん、待つてください。1人で行かないでください」無情にも生徒達にその魔法球が放たれようとした時、1人の少女が息を切らしながらフィルの名前を呼ぶ。

「……知るか。俺はお前の面倒を見る義務はない」

「で、ですけど、学園長がフィルさんに学園を案内して貰えって、そ、それに私、フィルさんくらいしかこの国で知り合いがいないんですからお願いします」

「……ちつ。他人に案内を頼むなら、せめて遅れるな。俺はお前の相手をしているほどヒマじゃないんだ」

「は、はい！？ す、すみません。フィルさん」

フィルは駆け寄ってきた少女『ティアナ』サークル』を突き放すように言うが彼女はある事件がきっかけにこの学園に招き入れられた特殊な生徒であり、学園に知り合いがいないため俯きながら不安そうな表情をするとフィルは彼女の表情に舌打ちをした後、魔法球を霧散させると先ほどまで見下していた生徒の事など目に映らなくなったかのように歩きだし、ティアナは慌ててフィルの後を追いかけて行き、

「……あ、あの娘、誰だ？」

「し、知るかよ。それより、もう止めようぜ。いくら卑怯者で気に入らなくなつてあいつの力は危険だ。俺達の事なんてゴミクズくらいにしか思つてないよ」

「そうだ。卑怯者のあいつにこの国の教えなんか関係ない。きつと、何かあつたらあいつは後ろから俺達を狙い打つに決っている」

その場に残された負け犬達はフィルへ恨みや嫉妬を混ぜた視線を

送るがそれ以上に彼らの瞳の奥にはフィルムに植えつけられた恐怖が
刻まれている。

第2話

「……あ、あの。フィルさん」

「……何だ？」

「さ、さっきのはやり過ぎじゃないでしょうか」

フィルは不機嫌そうな表情のまま、それでもティアナに学園の施設の説明をしていると不意にティアナがフィルの名前を呼び、先ほどの彼の行動を少しだけ責めるように言うが、

「……そう思うのは勝手だが、お前もそのうち、同じ事を言われる事になる。あいつらにとつて戦場は前線であり、剣や槍で敵と戦う事なんだ。俺やお前の能力はあいつらにとつては飾りであり、卑怯者でしかない。そう……昔からな」

「で、ですけど、フィルさんの魔法は素晴らしいものじゃないですか。それにそれが無ければ私や私の村の人達は」

「全滅していたな。自分達の勝手なプライドで助けを請う事もなく策もなく魔物に突っ込むだけの剣士達。それを援護し、魔法により魔物を退けた魔術師達のが多くいたが、手柄は全部、村人の前で命を賭けて戦った奴らのものだ。別に感謝をされたいとも思わないがな。たいした役にも立っていないバカどもにでかい面をされるのは気に入らない。あのバカどもは自分達が盾になったおかげで俺達魔術師が魔法を唱えられたとも言いたげだったがな。俺達から見れば目の前を飛びまわる羽虫でしかない」

「そんな事はありません。フィルさん達も前で戦ってくれた人達がいたから私は生きていられるんですから」

「……違うな。お前に關しては俺もあいつらも何もしていない。くだらない事を言っていないで先に進むぞ。少なくとも今日中にお前が所属する学部を決めなければいけないんだからな」

フィルはティアナの言葉に自分やティアナの能力は疎まれるものだと言うと少しだけ寂しそうに笑うがティアナはフィルの表情の変

化に気づく事はなく、フィルの力が自分の命を含めた多くの村人の命を救ったと言うが世間はそうは見えないと言うと村人の感謝の声を受け、英雄気取りのバカどもが気に入らないと言い切るとティアナがこの学園でティアナが所属する学部を決めないと行けないと言うと、

「魔法学科ではないんですか？ 私はこの力でこの学園に特待生として呼ばれたはずじゃ」

「……お前は誰かを守りたいんだろ。それなら、選ぶべきは魔法学科ではない」

「一緒です。どこの学科でも私はフィルさんのように守る力を手に入りたいです。私の力は守るための力じゃないですから、フィルさん達に守られてこそ使える力。フィルさんのように強くあるうとする人とともにある事で使える力ですから、私は剣を持つ力も弓を引く力もありません。自慢じゃないですけど私、運動神経はないんです」

「……胸を張るな」

ティアナは自分の能力から魔法学科に進むものだと思っていたように首を傾げるとフィルは自分達魔法学科生の置かれている立場から選択するべきではないと言うとティアナはフィルの顔を見てにっこりと笑うと自分には先陣を駆ける才能はないと胸を張り、そんな彼女の様子にフィルは眉間にしわを寄せてため息を吐いた後、自分と同じく才能のないにも関わらず、笑顔を見せる姿に小さく口元を緩ませ、

「そう言うなら、後は勝手にしろ。俺は忙しいからな。せいぜい、守ってくれる仲間でも探せ」

「な、何でそうなるんですか！？ 待ってください。同じ魔法学科になるんですから、アドバイスをしてください」

「悪いな。魔法学科と言っても俺にはすでに学園で学ぶ事はない。俺は自分の研究室に戻る」

「け、研究室？ って、ひよ、ひよっとして、フィルさんはすでに

先生なんですか？」

「……何だ？ 知らなかったのか」

「そ、それなら、私をその研究室に置いてください。知らない人
しかいないところに1人ではいるのは不安です！！」

「悪いな。俺の研究室は人を受け入れてない。邪魔でしかないから
な」

「そ、そんな事を言わずにお願いします」

ティアナに向かい、付き合うのはここまでだと言うと自分の研究
室に戻ると言い歩きだすとティアナはこの学園に知り合いがない
ため、唯一の知り合いであるフィルに泣きつき、フィルはティアナ
を引きずりながら研究室に向かい歩き出す。

第3話

「……開いている？ また、あいつらか？」

「フィルさん、どうかしたんですか？」

フィルはティアナを引きずったまま自分の研究室のドアのカギを開けようとするがドアのカギはあけられており、フィルは中に入り込んでいる人間に心当たりがあるようでドアを開けるとそこには少年と少女があり、少年は難しそうな表情でフィルの研究書を眺め、少女は部屋のソファ―に腰掛けています。

「……お前らは何をしている？」

「やつと帰ってきた……誰？」

フィルは勝手に研究室に入り込んでいる2人を見て眉間にしわを寄せると少女はフィルの腕にティアナがひつついているのを見てフィルをからかおうとしているのかニヤニヤと笑うが、

「ん？ ティアナさん、フィル、今日からだったか？」

「ああ」

「ジオさん、お久しぶりです。今日からよろしくお願いします」

少年は研究所からフィルとティアナに視線を移してティアナを見ると彼女が今日から学園に通う事を知っていたようで苦笑いを浮かべ、ティアナは少年『ジオ』ブリッツ』に頭を下げる。

「ちょっと、ジオも知り合いなの？ ……三角関係？」

「……おかしい事を言うな」

「フィア、お前には説明しただろ」

「あ、あの。フィルさん、ジオさん、この方は？」

少女はフィルとジオの顔を交互に見た後、首を傾げると2人は肩を落としてため息を吐くがフィルは少女の事を紹介して欲しいとフィルの腕を引っ張り、

「……こいつはフィリアライン。まあ、ジオと同じく幼なじみだ」
「フィアで良いわ。よろしくね。ティアナ」

「は、はい。よろしくお願いします」

フィルはティアナに少女『フィリア・ライン』がジオと同じく自分の幼なじみだと言うと2人はお互いに挨拶を交わす。

「それで、お前ら2人は勝手に人の研究室に上がりこんで何をしているんだ？」

「いや、この間の研究が上手く行ったみたいだから一応な」

「……そうか。それなら、もう用は終わったな。邪魔だから、そいつを連れて出て行ってくれ。俺は忙しいからな」

フィルは不機嫌そうな表情でジオとフィリアが研究室で何をしているかと聞くとジオはフィリアと一緒にフィルが新しく作った魔法の構築式の事を祝いに来たと言うがフィルは興味無さそうに1人にして欲しいと言いたげにジオに向かいティアナとフィリアを連れて出て行くように言うと、

「ちよつと、フィル。何よ。その態度、せつかく、かわいい幼なじみが祝ってあげようって言うのにその態度は何よ？」

「……かわいい？　ずいぶんと笑いない冗談を言うな。このバカ力女」

「バカ力女？　よわっちいモヤシ男に言われたくないわよ！！」

「あ、あの。2人とも止めてください。ジオさんも止めてください」
「気にするな。いつもの事だ」

フィルの態度の悪さにフィリアが彼を怒鳴りつけて2人は睨みあいを始め出し、ティアナはジオに2人を止めて欲しいと言うがジオはこの状況になれているようでやらせておけと言うが、

「モヤシだと！！　脳みそまで筋肉のバカ力女！！」

「モヤシにモヤシって言うて何が悪いのよ！！　女に1撃も与えられない運動神経皆無のくせに」

「何だと？　バカ力女、てめえ、表出るや。ぶっ飛ばしてやる」

「あ？　返討ちよ」

状況はさらに悪くなって行き、フィルとフィリアは睨みあいが続けたまま研究室を出て行き、

「あ、あの。フィルさんって冷静な人じゃ」

「逆、冷静なふりをしてるだけ、あっちが素だ。それより、俺は追いかけるけど、どうする？」

「わ、私も行きます」

ティアナはフィルが声を張り上げている姿が信じられないように目を白黒させるがジオはあれがフィルの本性だと笑うと2人でフィルとフィリアの後を追いかけて行く。

第4話

練習場に移動するとフィルは練習用に作られた刃が潰された1対の双剣を持ち、フィリアは同じように刃が潰れた彼女と身長と大差ない大剣を構えており、

「あの。フィルさん、フィアさん、本当にやるんですか？」

「当然だ。この脳みそまで筋肉なバカ女を倒さないと俺の腹の虫が治まらない」

「は？ あんたみたいな貧弱モヤシ男、直ぐに返討ちよ。だいたい、学園に入学してからあたしに一太刀も当てた事がない奴が偉そうに言うんじゃないわよ」

フィルもフィリアもティアナの仲裁などで治まる様子もなく、

「ジ、ジオさん」

「大丈夫。大丈夫。すぐにフィルがぶっ飛ばされて決着が付くから」
「ジオ、てめえ、見てろよ。このバカ力女をぶっ飛ばしたら次はお前だ！！」

ティアナは傍観に入っているジオに2人を止めるように言うがジオはこの状況にすでになれているようでフィルが負けて決着が付くと言い、フィルはジオを怒鳴りつけるが、

「私を前によそ見をするなんてずいぶんと余裕ね」

「ごふっ！？」

「フィ、フィルさん！？」

「な。決まっただろ」

「結構、飛んだね」

「な、何で、2人ともそんなに冷静なんですか！？」

フィルの視線がジオに向かった瞬間にフィリアは駆け出し、躊躇することなく大剣でフィアを薙ぎ払うとフィルは勢いよく吹っ飛ばされて行き、フィルを吹っ飛ばしたフィリアとジオは冷静に吹っ飛んで行った先を眺めており、2人とは対照的にティアナは驚きの声

を上げてフィルに駆け寄って行く。

「フィ、フィルさん、死んじゃダメです!？」

「いや、ティアナ、首が絞まっているからね」

「へ？ フィ、フィルさん!？」

「慌てると……こうなると」

地面に横たわっているフィルの上半身をつかむと身体を大きく揺すり、フィルを起こそうとするがティアナのその行為は彼女の考えとは真逆にフィルの首を絞めており、フィルの顔色は酸素が回って行っていないのか赤黒くなって行き、フィリアはティアナに落ち着くように言つとその言葉にティアナはフィルの顔色を見て慌てて手を放し、フィルの頭は勢いよく地面に打ち付けられて白目を向き、ジオはコントのような流れに苦笑いを浮かべると、

「とりあえずは研究室に運ぶか？」

「そうしよつか。しかし、相変わらず、こっちは才能ないわね」

「言うな。フィルが1番、気にしてるんだから」

ジオはフィルを背中に担ぐと研究所に戻ろうと言い、フィリアはジオの背中の上で目を回しているフィルの顔を覗き込みながらフィルには才能がないと言い切り、ジオはその言葉にため息を吐き、

「えっ？ えっ？ ま、待つてください。ど、どうして、そんな反

応なんですか？ この間のフィルさんはもつと強くて、私を守ってくれて、あれ？」

「フィルが強い？ ティアナ、それはない。勘違い。あり得ない。

あいつは貧弱、虚弱、懦弱」

「……フィア、お前は言い過ぎだけだな。ティアナさん、あれにはいろいろとわけがあるんだ。それは本人から聞いた方が速いと思うし……と言つか、俺じゃ、説明しきれないから」

ティアナは目の前で運ばれて行くフィルの様子に意味がわからないように目を白黒させているとフィリアはフィルが強いのはあり得ないと言つとジオは苦笑いを浮かべながらティアナとフィルの出会いの時には難しい条件がそろっていたと言い、

「そうなんですか？」

「ああ。あいつの研究の結果と言つか、何と言つか。まあ、ここに居てもなんだし、戻ろう」

「は、はい」

ティアナは首を傾げるとジオはとりあえず、フィルを背負って歩き出し、その後をティアナとフィリアが付いて歩いて行く。

第5話

「おい。聞いたか？ この間の魔物の襲撃でユークリッドの2人が仲間を見捨てて逃げたんだったよ」

「ホントかよ。情けねえな。この国の恥だぜ」

「知ってるか？ 仲間どころか、自分達のガキも見捨てたんだったよ」

「そりゃあ、どうしようもねえな。卑怯者の両親を持つガキか？

そのガキも卑怯者に育つに違いねえ」

フィルの頭の中には昔から言われ続けている言葉が響く、自分や仲間を見捨てて魔物の襲撃から逃げ出した両親を罵倒する言葉が、

(うるさい……俺は卑怯者なんかじゃない)

この国でなければ兵士でもない両親は自分達の命を優先してもここまでの事は言われなかったであろう。

しかし、この国では自分の大切な人達のために自分の命を投げ出すのが『当たり前』の国、フィルの両親は周囲の人間や今までは友好的に過ごしていた人間達からも冷たい目で見られ、耐えきれなくなったようでこの国からフィルを置いて逃げ出してしまった。魔物の襲撃からも受けるべき罰からも逃げだした卑怯者。それがフィルの両親への評価であり、その息子であるフィルへの評価は卑怯者の息子と言う枷である。

「聞いたか？ 卑怯者の息子が学園に入学したらしいぜ」

「マジかよ。学園で学んだって両親と一緒に仲間を見捨てただけだろ。税金の無駄使いはやめてくれよ」

(……)

他人を見下す時の周囲の視線と言うのは本人がいかなる努力をしても変わらない。フィルが学園に入学すると更にフィルへの罵倒や嫌がらせは拡大していく。そんな中、

(……お前らがそう言うなら戦ってやる。誰よりも前で誰よりも早

く先陣に立ち、そして)

幼いフィルの心は壊れ始め、彼は戦場での死を望むようになる。だが、彼の命をかけた名誉を挽回する機会を与えられる事はなかった。フィルには剣を使う才能も先陣を駆けるだけの走力や体力ですら存在していなかったのだから、

(何で? どうして? 俺はどうして)

フィルは絶望に叩き落とされる一緒に学園に入った者達は剣を振るい、槍を構え、国を守るために戦場に赴いて行く。それなのにフィルにはその機会すら与えられる事はなく、

「聞いたか? あの卑怯者の息子、戦場が怖いからって、単位をわざと取らないらしいぜ」

「おいおい。止めてくれよな。あんな恥知らずはこの国から出て行って欲しいぜ」

戦場に出る事ができない彼を罵倒する声はさらに激しさを増して行き、

(……黙れよ。そう言うなら、俺を戦場に連れて行けよ。望み通り、死んでやるよ。だから)

フィルの心は周囲からの悪意により蝕まれて行く。暗い漆黒の闇の中に沈んで行くが、彼はそこで歩みを止める事はなかった。誰も自分を戦場に連れて行かないのであればそれを叶えるのは『自分しかない』と思った。それからのフィルは学園の書庫にある過去の変人奇人と言われた魔術師達が残した魔法書や軍師、軍吏を学ぶために過去の戦史を読み漁った。それだけでは飽き足らず過去に失われてしまった魔法文明の遺産をも調べ上げ、彼の中に眠っていた才能を開花させて行く。

「おい。聞いたか? 卑怯者の息子は戦場で戦う事から完全に逃げたんだってよ」

「聞いた。魔法学科だってよ。俺達が命を賭けて戦っているなか、あいつは安全な場所ってな」

しかし、フィルがどれだけの結果を出しても周囲の態度は変わる

事はなかった。彼はどこまで言っても『卑怯者の息子』でしかなかった。

第6話

（ん？ 何だ？ これって、ああ、ティアナか）

フィルは意識が朦朧とする中、透き通るような歌声が聞こえ徐々に意識が覚醒し始めると、

「へえ、これがティアナの能力なの？」

「ああ、彼女の歌には治癒や様々な支援の力があるんだ。まあ、フィルが言っていた事だけだな」

歌声の主はティアナであり、彼女の歌声を聞いてフィリアが驚きの声を上げるとジオは目の前でフィルの傷が癒されている姿に感心したように言うが仕組みは理解していないようでフィルが彼女の能力に気づいたと話す。

「……ああ。歌の種類によって支援の能力も違うんだがその識別も本人はできてないようだけどな」

「フィ、フィルさん、大丈夫ですか！？」

フィルはまだ意識は覚醒しきつてないためか頭を押さえながら寝かされていたソファアから上半身を起こすとティアナがフィルに気づき、歌を中断して彼に駆け寄り、

「ああ……しかし、フィアには1撃を喰らったところとは違ってなぜか妙に頭が痛いんだが」

「キ、キノセイデスヨ。キット、フィアさんにぶつ飛ばされた時に頭をぶつけたんですよ」

「まあ、気にするな。無事だったんだし、それより、ティアナさん、フィルの傷はまだ癒えてないみたいだから、続きを頼めるかい？」

「は、はい……」

「いや、必要ない……すべての生きとし生けるものの神の祝福を傷を癒す奇跡を与えたまえ。ヒール」

フィルは頭が痛むようで頭をさすりながら言うとティアナはフィルから視線を逸らし、フィルはティアナが気絶した時に行った事を

知らないため首を傾げるとジオは苦笑いを浮かべながらティアナにフィルの治療の続きを頼むとティアナは目を閉じて治癒の歌を再開させようとするがフィルは彼女の歌を静止すると魔法の詠唱を始めると彼の身体を温かい光が包み込んで行くが、

「ストップ、せつかくのティアナの歌なんだから、あんたのつまりない治癒魔法より、ティアナの歌の方が良いわよ」

「……邪魔をするな」

フィリアはティアナの歌声が気に入ったようでフィルの治癒魔法で一気に傷を治すよりはティアナの歌を聞いていたいと言ってフィルの治癒魔法を邪魔するがすでに詠唱は終わっているため、フィルの傷は塞がって行く。

「もう。何してるのよ。もったいないわね」

「……もったいないじゃないだろ。ティアナの歌は確かに特殊な力なんだが……」

「何かあるのか？」

「まだ、何もはつきりしていません。能力の意味やその代償も」
フィルの身体の傷が完全に癒え、光が消えて行く様子にフィリアは不満げな表情をするとフィルは先ほどまで痛んでいた個所の状況を確認しながらティアナの歌声には何かあるのか、何かを説明しようとする。簡単にティアナにフィルの治療を頼んだためかジオは眉間にしわを寄せフィルに聞き返すとティアナは苦笑いを浮かべながら自分の能力については何もわかっていないと言つと、

「何もわかってないって事？」

「ああ……以前、読んだ魔法書に『呪歌^{じゅか}』についての記述を読んだ事はあるんだがその中には支援に関する呪歌は数多く存在していたが治癒に関するものは何一つとして記載されていなかったんだ」

「それは、ティアナの歌声が特殊って事？」

「だから、学園が特待生としてティアナを受け入れたんだ」

フィリアは首を傾げながら聞き返すとフィルはティアナの歌は呪歌に分類されると思うが自分の持っている知識の中でも彼女の能

力は異質であると言い、その治癒の呪歌が国の人間でもないティアナを学園に招き入れた理由になっていると言う。

第7話

「特待生？ 待つて、ウチの学園ってお金かかからないでしょ？

王立で全員に学ぶ資格が」

「……ティアナはこの国の人間ではないからな。他の国の人間が学ぶにはそれなりに金がかかる」

フィリアはティアナが特待生だと言う事に首を傾げるとフィルはそれくらいは察しろと言いたげに皮肉交じりのため息を吐くが、

「そうなんだ。それなら、知らないところに1人でいるのは不安よね？」

「はい。学科は魔法学科を専攻しようと思うんですけど、知らない人ばかりの研究室はやっぱ怖いですし……」

「そうよね。それなら、ここに所属でいいわね」

「……おい」

フィリアはフィルの皮肉交じりのため息など気にする事なく、ティアナと話を続けて事もあろうかティアナの所属の研究室をフィルの研究室にしようとする。

「何？ 文句あるの？」

「当たり前だ。何で、お前が勝手に決めるんだ？ ここははつきり言えば俺の私設の研究室だ。ティアナに合っているわけがないだろせつかく、学ぶ機会が与えられたんだ。それを選ぶ事から……」

「……フィル、無駄みたいだぞ」

「……」

フィリアは文句がありそうなフィルの態度にフィルを睨みつけるとフィルはこの研究室ではティアナが学ぶ事はないと言い、彼女に適した研究室を探すように言うがすでにティアナとフィリアは2人で話を完全に決めているようでジオはため息を吐きながらフィルの肩を叩くとフィルの眉間にはくつきりとしたしわが浮かび上がり、

「何で、わざわざ、面倒な場所を選ぶんだ？」

「面倒な場所？」

「こいつが勝手に言ってるだけよ。自分は嫌われものだから、ここに入り浸ればティアナにも変な噂が立つからね」

「……わかってはいるなら、ここを薦めるな。それに俺はティアナの研究を手伝うほど暇じゃないんだが」

フィルはこの研究室はティアナが学ぶのにふさわしい場所ではないと言い、ティアナはフィルの言葉の意味を理解できないように首を傾げるとフィリアはフィルが女々しいと言いたげにフィルの歪んだ性格が原因であると言い切るとフィルはティアナの研究に付き合う暇はないと言うが、

「ティアナ、そう言えば、特待生って事は学費は私達と一緒に免除でしょ。住む場所や生活費ってどうなってるの？」

「えーとですね。住む場所は寮の一室を借りられるようになってるんですけど、生活費は自分でどうにかしないといけないんですね。しばらくは学園が用意してくれた編入の準備金でどうにかかりますけど」

「そうなの？ 特待生って割には学園も気が利かないわね」

「……」

「……フィル、だから、諦めろってフィアが言いだしたら聞かないのはわかってるだろ」

フィリアは気にする事なく、ティアナの今後の生活に付いて確認するように言っているとティアナは生活費を稼がないといけない事が不安なように心配そうな表情をするとフィリアが学園側の配慮が足りないと聞いたげであり、フィルは自分の話を聞こうともしない2人の態度にこめかみにはくつきりとした青筋が浮かぶがジオはフィリアの性格くらいわかってはいるだろと言うと、

「しかし、そうなると研究室はやっぱりここが良いんじゃないのか？ フィル、お前は国から研究費や何だと言ってかなりの金額を貰ってるんだろ。この荒れた研究室の掃除や整理を頼んでティアナの給料に払えば良いだろ」

「あのな。これは俺にしかわからないがしつかりとまとめて置いてあるんだ。他人が触るとどこに何があるかわからなくなるだろ」

「片付けのできない人間の言い訳でしかないわよ」

「……えーと、でも、確かに自分の部屋には自分でしかわからない何かがありますし」

ジオは机や本棚に乱雑に置かれている研究書などを給金を払ってティアナに片付けて貰うように言うと言ったのはこの研究室は片付いていると言うがフリーアはフィルの言葉は片付けのできない人間の言い訳でしかないと言い切り、ティアナは苦笑いを浮かべる。

第8話

「ここに人手は必要ない。だいたい、ここに居座っていれば依頼も受けられなくなるだろ」

「依頼ですか？ 何かあるんですか？」

「……あれ？ フィル、ティアナさんに依頼の説明してないのか？ フィルはティアナを自分の研究室に置く気はないと言うがティアナはフィルの口から出た『依頼』の意味が理解できないように首を傾げるとジオはフィルに必要な事だろと言いたげに聞き返すと、

「……それは学園の不備だろ。俺は学園施設を案内しろとしか言われてない」

「言われた事しかできないのを棚に上げるわけ？ 情けない男よね」

「あ？ どう言う意味だ？」

「そのままよ」

「あ、あの。2人ともケンカはやめましょうよ」

フィルは自分が説明すべき事ではないと言い切るがフィリアはフィルにティアナを受け入れないフィルに文句があるようでケンカ腰に言うと2人は睨みあいを始め出し、ティアナは苦笑いを浮かべながら2人の仲裁に動き、

「まあ、説明しないことには始まらないし、フィル、説明してやれよ」

「何で、俺だよ？」

「お前の説明次第ではティアナさんも納得するかも知れないだろ」
ジオはすでにフィルとフィリアの間で板挟みになっているのがティアナの定位置になったように感じているようで苦笑いを浮かべるとフィルに説明をしてやるように言う。

「……そうだな。確かにジオの言う通りか？ 良いか。俺達、学園に所属している生徒達は義務として学園及び国からいくつかの依頼を受けるんだ」

「俺とフィルがティアナさんと会ったのもその依頼の途中だよ。あの時の依頼は何だった？ 俺はお前の護衛みたいな形で付いて行っただけだから、依頼の内容を聞いてないんだよ」

「地質調査、最近は近隣の村で山の木が異常な枯れかたをしていると言っ話が出ててな。その被害が拡大すると他の植物や農作物にも影響が出る可能性があるかも知れないからだ」

「地質調査ですか？ …… あ、あの。フィルさん、それに付いてはわかった事ってあるんですか？」

フィルはジオの言う事にも一理あると考えたようで学園や国から引き渡される仕事があると言っ事を説明し始めるとジオは自分とフィルがティアナと出会った時は依頼の途中だったと言っティアナは2人の依頼の内容に興味があるのかフィルにその時の依頼に付いて教えて欲しいと言っが、

「…… 依頼状況は教えられない。一応は国からの依頼でもあるからな。誰が聞いてるかはわからないからな」

「そうなんですか？」

「フィル、あんた、もったいぶってないで教えてあげなさいよ」

フィルはティアナに教える事はできないと言っティアナは肩を落とし、ティアナの様子にフィリアはフィルを責めるように言っ。

「…… あのな。情報ってのは大事なんだ。簡単に教えられるわけじゃないだろ」

「でも、ティアナを見た感じ、その被害はティアナの村にも出てるんでしょ。それもその問題は終結してないわけよね？ ティアナが聞きたいのも無理はないでしょ」

「…… そうだな。だとしても教えるわけにはいかない」

「何でよー!!」

しかし、フィルは教える事はできないと首を横に振るとフィリアはフィルを怒鳴りつけるがフィルの考えは変わる事はなく、

「まあ、フィアも落ち着け。フィルが動いているんだ。悪いようにはならないだろ。性格はひねくれてるが魔法の腕は確かだしな。お

前が余計な事を言つてフィルのへそを曲げるほうが問題あるしな。それにフィア、そろそろ、俺達は戻らないといけない時間だ」

「だけど」

「話は終わりだ。さつさで行け。単位を落とすと余計な事を言われるぞ」

ジオはフィルの様子に何かを察したようでフィリアに向かいフィルに任せておけと言うとフィルは納得がいかないようでフィルを睨みつけているがフィルはフィリアを追い払うように手を振ると、
「とりあえず、依頼の説明まではしてやるから、それが終わったら追い出すからな」

「は、はい。お願いします」

「それじゃあ、フィル、そっちは任せるからな」

「ああ。さつさで行け」

フィルはティアナに説明の続きをしてやると言い、ジオはそんなフィルの様子を見て苦笑いを浮かべるとフィリアを引きずって研究室を出て行く。

第9話

「それじゃあ、とりあえず、そこに座っている……おい。コーヒーで良いか？」

「は、はい」

「砂糖とミルクは？」

「い、いただきます」

フィルは説明がある程度時間がかかると思ったように頭をかきながら立ち上がるとティアナにソファに腰をかけるように言い、部屋の隅に取り付けてある簡易キッチンに向かって歩き出し、2人分のコーヒーを準備するために水を温め始めていると、

「あ、あの。それってなんですか？」

「ん？ それ？」

ティアナはフィルがコーヒーを準備している姿にティアナは不思議に思う事があったようで首を傾げるとフィルはティアナが何に疑問を持っているかわからないようで首を傾げるが、

「ど、どうして、その箱は火が点いているのに燃えないんですか？
と言うか薪を使わなくて良いんですか？ だいたい、どうして、
こんな部屋で火を使ったら火事になりませんか？ 火を使うならそれなりの設備が」

「……ああ。悪い。そこからか」

ティアナは自分が今まで生活してきたなかで見た事のない道具が火を点けている事に驚きの声を上げ、フィルは眉間にしわを寄せ、
「これは古い魔法文明の書物から再現したものだ。火の精霊の力を借りて簡易的な釜戸を作りだすんだ。他にもいくつか魔法を使った仕組みがあつてな。火事にはならないから安心しろ」

「そうなんですか？」

「まあ、扱える人間は限られているから一般向けではないけど……
…どうした？」

「い、いえ、こう言うのがどの家にもあれば便利だと思って、村のお年寄りには薪を運ぶのも大変なんで」

自分が使っている道具に関して簡単な説明をするとティアナはその興味があるようでフィルの隣に移動しており、自分が住んでいた村のお年寄りの事を考えたように苦笑いを浮かべる。

「そうだな。一般的に出回れば便利ではあるな……まあ、量産は無理だから、そんな事を心配しても仕方ない」

「どうしてですか？」

「発動するのにある程度の魔法の心得がないといけない。魔法の心得のない人間には扱う事ができない上に、これを作っている部品は古代の魔法文明の遺跡から発掘した物がほとんどだ。同じ物を今の時代に作るのとは不可能に近い」

「不可能ではないんですね？ それもフィルさんならどうにかできるんじゃないですか？」

フィルはティアナの考えも理解はできるが簡単にできる事でもないうとうとティアナは若くしてすでに魔法学園の教師資格をも取得しているフィルにならうにかけるのではないかとしようと、

「何度も言わせるな。現状では不可能だ。できるかわからない事ができると言っただけ俺は愚かではない」

「できないことをできるって、フィルさん、フィアさんに敵わないのに向かって行きますよね？」

「……」

「あ、あの。フィルさん、大丈夫ですか？」

フィルはこの話は終わりだと言うがティアナは首を傾げながらフィルの心の傷を思いつきりえぐり、フィルはティアナの言葉にかなりの心的ダメージを受けるとフィルの様子にティアナは苦笑いを浮かべながらフィルに聞き返し、

「当然だ。ダメージなどない。それにあのバカ力女を倒す方法ならいくらでもある。ただ、直接、ぶっ飛ばさないと俺の気が治まらないだけだ」

「そ、そうなんですか？」

フィルはフィリアになど負けてないと拳を握り締めて言つとティアナはフィルの様子に苦笑いを浮かべる。

第10話

「ああ、実際は無詠唱の魔法を使えばあいつのスキくらいはいくらでも付ける。それで倒しても俺の気が治まらない」

「た、確かにそうですね」

「ん？ 沸いたな。ほら、戻れ」

「は、はい」

フィルは魔法を使えばフィリアを倒す事など簡単だと言い切るとティアナは話を合わせようとしたようで大きく頷いた時、火にかけていた水が湯気を出し始め、フィルは2人分のコーヒーを淹れてカップの1つを渡すと2人はソファアに戻り、

「それで、依頼の話の続きだな？」

「はい。お願いします」

「ああ。さっきも言ったが俺達学園に所属する生徒は学園が国から依頼を受ける事がある。内容としてはこの国が近隣の村や町、他国からの要請を受けた事、調査や山賊、魔物討伐を言った感じの依頼がほとんどだ。それを受けるのは学生課に顔を出せば良いんだがここは省く。依頼を終わらせると依頼の内容に応じたポイントと賞金を与えられる」

「ポイント？」

フィルはティアナに依頼の説明を続けて行くとティアナは依頼を終了させた時に貰えると言うポイントの意味がわからないように首を傾げる。

「そのままだ。そのポイントを単位に変換する事もできる。実践は何よりの勉強だと言う人間もいるからな。それとそのポイントは単位に変換しても累積されて行き、この学園を卒業した時に城の兵士や宮廷魔術師を狙うに当たっては重要になって行く」

「あ、あの。それじゃあ。兵士とかになりたくなければ依頼は受けなくても良いんじゃないですか？」

「ポイントとそれは別だ。ここは王立だからな。税金で成り立っているがさすがに全国民を賄えるほどに国の財政は落ち着いていない。他の国からの人間でも希望すれば入学を許しているのは収入のため、調査や山賊、魔物討伐に正規兵を出すよりは出費を抑えられるし、他国や近隣の村や町からの信頼や報奨金を得られる。それを学生が受けてくれれば収入につながる。この学園を維持するために学生には依頼と言う形で仕事を受けて貰う。それを義務化するのが依頼だ」

「あ、あの。確かにそれはわかりますけど、学生が仕事を受けて失敗したら、依頼を受けた学生が死んでしまう事だって」

フィルは学園を維持するために必要な義務であると言うとティアナは依頼が学生の手にも負えない事であり、学生が死んでしまった時の事を考えたようにティアナは顔を真っ青にすると、

「……その時は正規兵を出せば良い。依頼を受けて学生が死んでも国や仲間を守ったんだ。名誉な事なんだろ」

「そ、そんなのって、まっ!？」

「……そこから先を言うな。お前はこの国の人間ではないが、この国の人間にとってそれは当然の事なんだ。それをできない人間は『卑怯者』でありこの国にとっては『恥』でしかない」

「……で、でも、フィルさんも納得ができてないんじゃないですか?」

フィルはティアナが何を言いたいかわかっているようで感情を殺したかのように淡々とした口調で学生が命を落とすのはこの国にとっては当たり前だと言うがティアナは納得ができないように声を張り上げようとするがフィルは彼女の口を手で塞ぐとその当たり前の事が出来なかった両親への恨みを吐き出すかのように言い、ティアナはフィルの表情に彼の中にある『闇』を感じ取ったようで不安そうな表情で聞き返すが、

「……納得する。納得しないじゃない。それがこの国なんだ。だからこそ、お前をこの国に招き入れた。特待生の準備金やその他モロ

モロ、直ぐに準備金が底をつく訳がないだろ。お前は準備金を何に使った？ お前はその上でここにいるんだ。文句を言える立場ではないだろ？」

「ど、どうして、それを？」

フィルはティアナが特待生を受け入れる経緯に至ったのかを理解しているようであり、ティアナはフィルの言葉に視線を逸らして口どもってしまふ。

第11話

「……お前の村の近くで起きている植物の異常な枯れかた。それに魔物の襲撃。俺とジオ達が村に立ち寄った時は村はかなりひどい状況だった。今年の収穫など期待できないだろ。そこにお前の地質調査への食いつきを見れば誰だって予測できる。村が一冬を越すためにお前は準備金を置いてきたんだろ。それくらいの額は出てるはずだしな」

「……はい。村のみんなが村の状況に絶望していた時に特待生の話を持ってきてくれた担当の方がそうすれば良いって」

「……お前は村のために犠牲になった。ウチの国のバカどもが好きな話だ」

フィルは自分とジオが受けた依頼と立ち寄ったティアナの村での状況から簡単に推測できると言うティアナはうつむき、仕方ない事だったと言うがフィルは吐き捨てるように言う、

「……依頼を受けるためには仲間になってくれる人間。一緒に依頼を受けてくれる人間を探さないといけない。しかし、ここは研究室の外れであり、『卑怯者』の研究室だ。俺に関わればともに依頼を受けてくれるような人間は出てこない。まあ、依頼によっては指定人数に達しないといけない依頼もあるからな。それを狙えば依頼を受ける事はできるが連携やできないと生き残る確率は減る。それに考え方が過激な奴らなら、後衛の重要さがわかる前衛がいるならまだしも、前衛しか信じないと言うような奴らの中に入ってしまったら魔術師は使えないから『捨て駒』になれと平気な顔をして言う」

「そ、そんな」

「この国はそう言うところだ」

フィルは仲間探しをするのは依頼を受けて生き残る上で必要な事だと言うティアナの顔は自分が考えていたよりこの学園は『死』と言うものに近い場所であった事に顔を真っ青にするがフィルは冷

静な口調で言い、

「……お前はこの国の人間ではないんだ。当たり前になっっているものに従う必要はないはずだ。なら、生き残る確率が最も高くなるようにするべきだ。ここにいてはそれができない」

「で、でも……私が特待生になったのは私を推薦した人がいるんですよね？ それって、フィルさんじゃないんですか？」

「……お前は勘違いしている。俺やジオはお前を特待生に推薦した事はない。俺達の話を立ち聞きしていた奴がいるんだろ。わざわざ死ぬかも知れないところに何もできない人間を招き入れるなんてするわけがないだろ」

フィルはティアナにはこの国の『自己犠牲』には従う義務はないと言うとティアナはフィルが自分を特待生として推薦してくれていたと思っていたようだがフィルは自分達ではないと言う。

「そ、それじゃあ、誰が？」

「さあな。考えられるのは俺達以外に村にいた魔物からの襲撃に対処していた奴らか、他には……」

「フィルさん？」

「いや、何でもない」

ティアナは自分を推薦したのはフィルではないと知り、誰が推薦したのかとフィルに聞き返すとフィルは少し考えるとティアナにとって良くない答えも導き出したよう言葉で濁すと、

「俺の説明はここまでだ。俺が他の研究室を探せと言った意味も理解できただろ」

「そ、そうなんですけど」

「別に他の研究所を探す理由なんかないでしょ。あんたか私達と依頼を受ければ良いんだし」

「……フィア、お前は どうしてわざわざ面倒な道を薦めるんだ？」

フィルはティアナにもう1度、研究室の事は考え直すように言うがティアナは不安そうな表情をしてうつむいた時、長い間、話をしていたようで授業を終えたジオとフィリアが戻ってきてフィルがテ

イアナのフォローしてやれば問題ないと言い始め、フィルはフィリアの言葉にため息を吐く。

第12話

「どうしてよ。認めたくないけどこの学園と言うかこの国最強の魔術師のあんたがいればティアナの生存率は確実に上がる。あんたと依頼を受けてくれる前衛は私やジオ、他は変わりものや能力主義者のあんたを卑怯者扱いしない人間達。普通に考えてベストの回答でしょ」

「この件に関してはフィアに賛成だな」

「……あのなあ。それこそ、俺に言うのは筋違いだろ。こいつの面倒がみたいならお前らが勝手にやれ」

フィリアはフィルがわずかながら持つ人間関係の中にティアナを組み込む方が良策だと言うとジオも同意見のようであり、2人の様子にフィルは頭を抑えるが、

「あ、あの。フィルさん、この研究室で、フィルさんは何を研究しているんですか？」

「あ？ 別に決まった事はしてない。気が向いた時に気が向いたものをする。在学中に居座れるだけのものは残してあるからな」

「そ、それじゃあ、こう言うものを研究している研究室はありますか？」

ティアナは何か考えがあるのかフィルに研究室で行っている研究内容を聞き、フィルは彼女の質問の意味が理解できずに首を傾げるとティアナは先ほどフィルがお湯を沸かすのに使った道具を指差す。

「……それを聞いてどうする？」

「魔法学科で研究室に所属しないといけないなら、私は自分が学びたいものを学びたいです。ここにきて依頼とかいろいろと聞かせて貰いましたが、攻撃魔法の研究とかより、誰かの生活の支えになるような研究がしたいです」

「……あのなあ。こんなものを研究したって他の奴らから言われる事は『役立たず』と言われるだけだぞ。この学園は戦う術を学ぶと

ころなんだからな」

「き、きちんと他の講義を受けます。ご、ご迷惑にならないようにします」

フィルはティアナの指の先を見て眉間にしわを寄せるとティアナはフィルが作った道具の事を研究したいと告げるとフィルは研究しても何も役に立たないと言い切るがティアナはすでに決意を固めたようにフィルに向かい深々と頭を下げ、

「決まりだな」

「決まりね」

「……おい」

ジオとフィリアはフィルの両肩を叩きながらフィルにティアナの出した答えに應えるべきだと言うとフィルは頭が痛いように眉間を指で押さえ、

「良いじゃない。人には向き不向きがあるんだし、ティアナには攻撃魔法とかは似合わないし、こう言うのを研究しても」

「確かに。あまり、歌の事もわからないけど『癒しの歌』を歌えるティアナには攻撃魔法の適性があるとは思わない」

「そ、そうですね。私は攻撃魔法とか似合わないですね」

「……おい。それを自分で言うのはどうなんだ？ だいたい、似合う、似合わないではなく、魔法学科では必須項目だ」

ジオとフィリアはフィルの様子に苦笑いを浮かべて、ティアナは攻撃魔法を似合わないと言うと言われたティアナは大きく頷くがそれは決して誉められている事ではないため、フィルは大きく肩を落とすと、

「……勝手にしろ。けどな。ジオ、フィア、お前らがこいつを丸めこんだんだ。お前から責任を持てよ。俺は知らんぞ」

「大丈夫だ。魔法関係は全部、フィルに丸投げするから」

「まあ、適材適所だな」

「……」

フィルは面倒になったのか勝手にしろと言うとジオとフィリアは

フィルの言い分など聞く気はなく、フィルは納得をしないままティアナの所属研究室はフィルの研究室に決まる。

第13話

「あの。フィルさん？」

「……」

「どうしよう？ フィアさんかジオさんに……」

「神聖魔法の基礎？ 無理、私もジオも神聖魔法は相性が悪い」

ティアナがフィルの研究室に居座り始めて1週間が過ぎた頃、ティアナは神々の力を借りて治癒や支援を行う神聖魔法の講義でわからないところがあるようで教本を片手にフィルの名前を呼ぶがフィルは何かの研究結果なのかいくつかの書類に目を通しながら険しい表情をしており、ティアナの言葉に反応する事はなく、彼女はどうして良いのかわからないように肩を落とした時、フィリアが研究室のドアを開けてティアナの手の教本を見て苦笑いを浮かべると、

「そうなんですか？」

「うーん。神聖魔法は前衛でも使える人間は多いんだけど、私もジオも向かない。やっぱり、適性があるのよ。それでフィルは何をしているの？」

「えーと、私もわかりません。私が研究室に戻ってきてから1時間くらい経つんですけど、ずっと、あのままなんです」

ティアナは首を傾げるとフィリアはため息を吐いた後、険しい表情をしているフィルの事を聞くがティアナはフィルがずっと何かを考えていると言う。

「1時間？」

「もしかしたら、もっと前ですね」

「フィル、何を見てるのよ？」

「……返せ。俺は忙しいんだ」

フィリアはティアナからフィルの状態を聞いてため息を吐くとフィルが読んでいる書類を抜き取るとフィルは険しい表情のまま、フィリアから書類を取り返そうとするが、

「なら、1時間以上もぴくりとも動かないってのはどうなのよ」

「……うるせえな。こっちは遊んでられるほどヒマじゃないんだよ」

「何々……」

「フィアさん、何の資料なんですか？……」

フィリアはフィルの手を交わすと書類に目を通し、ティアナもフィリアの後ろから書類を覗き込むが2人は何が書かれているか理解ができないようで2人で顔を見合わせた後、

「確かに大変な問題よね。あんたが悩むのも仕方ないわ」

「そ、そうですね」

「……バカ2人が見栄をはるな。時間の無駄でしかない」

理解したふりをしながらフィルに書類を返すがフィルには2人が理解できるわけがないと思っっているため、くだらない事で手間を取らせるなど言うと、

「な、何よ。あんただって理解できないから、1時間以上も考えて込んでいるんでしょ？」

「……そんなわけがあるか。だいたい、自分で調べたデータを理解しないわけがないだろ。このデータから考えられる事を抜粋していただけた」

「あ、あの。フィルさん、それなら、これは何のデータ何ですか？」

フィリアはフィルだって考え込んでいたのは書類に書かれている事をフィルだって理解してないんだろと言うがフィルは呆れたようなため息を吐き、ティアナはフィルに書類の内容を聞く。

「あ？ これはこの間の地質調査の結果だ」

「何かわかったんですか！！ お、教えてください」

「ティ、ティアナ？」

フィルは先日、ジオとともに受けた依頼の調査結果だと言うとティアナは自分の出身の村にも関係ある事のため、フィルに詳しい話を教えて欲しいと言うとフィリアはティアナの食いつきように驚きの表情をする。

第14話

「……断る」

「お願いします。フィルさん!!」

「……お前は自分のやるべき事をやってろ」

「フィル、話してあげなさいよ」

フィルはティアナに話す必要はないと言い書類に目を戻そうとするとフィリアがティアナの味方をするが、

「……データを見ても何も理解できないバカ相手に話したって理解できないだろ」

「……」

フィルは説明するだけ無駄だと言い切ると2人は流石に何も言えない状況のため、2人は気まずそうに顔を合わせると、

「ティアナさんもフィアも少し声を抑える。廊下まで響いていたぞ」

「……ジオ」

「す、すいません」

ジオが苦笑いを浮かべながら研究室に入ってきて廊下までティアナとフィリアの声が響いていたと言うとティアナの慌ててジオに頭を下げる。

「それで、何の騒ぎだったんだ?」

「ジオからもこの分からず屋に言っただけだよ。この間の地質調査の結果。出てるのにティアナに教えないって言うのよ」

「ああ。それか、フィル、教えてやれば良いだろ。俺とお前はしばらく、ここを開ける事になるわけだし」

「……下手な事を言っただけで付いてくると言い出したら、足手まといが増えるわけだからな」

ジオが3人が何を騒いでいるのかと聞くとフィリアはジオを味方に引き入れようとし、ジオはフィリアの言葉に苦笑いを浮かべたまま、フィルに教えてやれば良いと言うとフィルは何かあるのかこれ

以上の厄介事はゴメンだと言いたげにため息を吐くと、

「足手まとい？ …… ジオ、フィル、あんた達、どこかに行ってくるの？」

「フィル、言ってないのかよ」

「…… 何で、俺がわざわざ、そんな説明をしないといけない。だいたい、ティアナがここにいる事を勝手に決めたのはお前らだろ。俺には関係のない事だ」

「…… まったく」

フィリアはフィルとジオの話から2人が何かするつもりだと思っただよんで聞き返すとジオはフィルに2人に話をしていないのかと聞くがフィルはティアナとフィリアに話をする筋合いはないと言い切り、ジオは大きく肩を落とす。

「細かい事は俺もよくわからないんだけど、この間の地質調査でフィルが持ち帰った土を分析した結果。得におかしなものは出てこなかったんだ」

「ちよつと待つてよ。それなら、何で、植物や農作物が枯れるのよ？ そんな風に違う結果が出るのよ。おかしいでしょ」

「…… それを調べ直しに行くんだろ。あの現象が一時的なもので収束しているかも知れない。もしくは悪化しているかも知れない。その確認。それと土以外に植物を枯れさせる原因はないか？ 虫類が何かをしている可能性だってあるだろ」

「フィルさん、何をするつもりなんですか？」

「それにデータには出てない違いがあるんだ。それから推測できるものがある。今度はそれを調べるために行ってくるんだよ」

ジオはフィルの調べた物からはあまり違いはなかったと言うとフィリアは結局は何もわかってないのだと思ったようであり、文句があるようでフィルに言うがフィルはジオが余計な事を言うなど言いたげに立ち上がると2つの土が入った透明なガラスケースを取り出し、ティアナはフィルが何をしようとしているのがわからないように首を傾げると、

「たぶん、これが1番の原因だ……」

「何？ 何で、この土、光っているの？」

「この土に何かあるんですか？」

フィルは魔法を使用しているのか小さな声でつぶやくとガラスケ
ースに入っている土の片方だけが鈍い光をあげて輝きだし、ティ
アナとフィリアは光り出した土に何かあると思ったように真剣な表
情をしてフィルに聞き返す。

第15話

「……逆だ。問題があるのはこっちだ」

「へ？ そうなの？」

「そうなんですか！？」

フィルは鈍い光を上げている土を見て、疑問の声を上げているティアナとフィリアの様子に眉間にしわを寄せると注意すべきは何も変化のない方だと言うと2人は驚きの声を上げるが、

「……ここまで、基礎知識のない。バカの相手をするのは無駄だな」
「た、確かにな」

「ちょ、ちよつと、ジオまで何なのよ！？」

フィルは説明をするのが無駄かどうかを確認したようで2人には説明するレベルでもないと言うと流石にジオも同じ意見のようで苦笑いを浮かべ、フィリアは声を上げてバカにするなと言うと、

「……これは精霊魔法の基礎の基礎だ。ティアナはもしかしてフィア、お前は講義を受けているはずだろ」

「そ、そうだったかな？ ……あれ？ ちよつと待ちなさいよ。これが精霊魔法の基礎中の基礎で起きてる事なら、何で、あんたが調べてるのよ。その依頼って確かあんた以外にも調べに行って何もわからないって言った連中は多いよね？」

「……バカが基礎をおろそかにするからだ。異常な事象だからと言って自分の名声を上げるために自分の持つ最高技術で調べて、当たり前前のことを疎かにする。だから、目の前の事実を見つける事ができない。仮に見つけていたとしても他の調査員に自分達は何もできなかったと言う事実だけしか評価されないと思っているから、調査結果を譲渡する事はない。まったく、これが最初に渡されていればわざわざ何度も出かける必要はなかったのに」

「そう言うな。それがなければティアナさんの村は全滅だったわけだし」

フィルは精霊魔法の基礎の1つだと言い、フィリアの反応に呆れているのか大きく肩を落とすとフィリアは今までその事実にも気付かなかったのかと声を上げるとフィルは自分より先に依頼を受けた学生達のレベルの低さに不機嫌そうな表情で言うとジオは地質調査に出た事は無駄ではなかったと言う。

「えーと、全ての物には精霊が宿っており、その精霊達の力を借りる事により、植物の成長や大地の浄化。様々な奇跡を起こす事ができる?」

「ん? それなら、この土には精霊がいないって事?」

「ああ。簡単に言えばそうだ」

ティアナは精霊魔法の基礎だと聞いて教本の最初のページを読み上げるとフィリアは光る事のない土を覗き込みながら、この土には精霊達がいなくなっているのではないかと言うとフィルは小さく頷き、

「それなら、別にまた、調査に行く必要がないでしょ? 精霊の力を戻せば良いわけだし」

「……フィア、簡単に言うな。精霊がいなくなるなんて事が普通に考えてあると思っているのか? それに戻せと言うがお前は戻す方法に心当たりがあるのか?」

「それはないけど、それを考えるのがあんたの仕事でしょ」

「……また、丸投げか? だから、脳みそまで筋肉だって言われるんだ」

フィリアは簡単に依頼は解決したようなものだと言うがフィルは植物が枯れる原因がわかっただけであり、それまでの過程もこの後の対処もわかっていないと言うがフィリアはそれを考えるのがフィルの仕事だと言い切り、彼女の無責任な言葉にフィルはフィリアをバカにするようにため息を吐く。

第16話

「何？ フィル、私にケンカを売ってるわけ？」

「ケンカを売る？ 勘違いするな。ケンカを売ってきてるのはお前だろ。関係ない人間が人の依頼に首を突っ込んで、俺の貴重な考察時間を潰しているんだからな。邪魔をするなら出て行け」

フィリアはフィルの言葉が自分への挑発だと思ったようでフィルを睨みつけるがフィルは彼女の相手をする時間はないようでフィリアに研究室を出て行くように言々と再び、書類に目を通し始め、

「フィア、今回はフィルの言う事が正しいぞ。精霊魔法は講義を受けているはずだ。キチンと復習をしていないからこんな事になるんだ」

「だ、だけど、こいつの言い方にも問題があるでしょ。この依頼はティアナの故郷の村にも関係ある事なの。ティアナにはそれを聞く権利があるわ！！」

「……そんな物はないし、余計な事は考えるなよ。少なくとも精霊魔法の基礎も理解できないようなバカが思いつきで付いてきたりしても邪魔でしかないからな。フィア、間違っても後を付けてくるような事はするなよ。場を荒されると調べ事もできなくなるからな」

ジオは苦笑いを浮かべながらフィリアに言うがフィリアはフィルの態度に腹を立てているようで今回の依頼に関してはティアナには真実を知る権利があると言うとフィルは表情を変える事なくフィリアの言葉を斬り捨て、フィリアに余計な事をするなと言うと、

「余計な事？ 余計な事ってどう言う事よ？ さっきも言ったけどティアナの故郷にも関係ある事なの！！ それを余計な事って言うのはどう言う事よ！！」

「フィ、フィアさん、落ち着いて下さい」

「……お前らが勝手な事をして止めを刺すつもりか？ 魔物との戦闘になるかも知れない、その時は調査対象を守りながら戦闘をする

事になる。状況を理解できない脳みそまで筋肉のバカ力女と戦闘の基礎も学んでいない人間を連れて行けると思うか？　ただ、バカみために目の前の敵だけ倒してれば良いと言う単純な依頼じゃないんだ」

フィリアは感情に任せてフィルを怒鳴りつけるとフィルに殴りかかるような勢いで彼との距離を縮めて行くがティアナがフィリアの腰に抱きつき彼女を止めようとするなか、フィルは淡々とした口調でフィリアやティアナは邪魔だと言い切り、

「これ以上は言うだけ無駄だ。出て行け。俺はお前らの相手をして
いるほど、ヒマじゃない」

「あ、あんた、何様よ！！」

「……フィア、いい加減にしろ。この依頼はフィルと俺の依頼だ。
少なくとも依頼を完遂させるためには邪魔はするな」

フィルはティアナとフィリアにもう1度、研究室から出て行くように言い、フィリアはフィルの傲慢な態度に感情に任せてフィルの胸倉をつかむと彼の顔を殴り飛ばそうとするがジオがフィリアの腕をつかみ、フィルの邪魔をする事は許さないと言う。

「ジ、ジオ、あんたまで言うの？」

「言葉の通りだ。出発までの時間でやるべき事、必要な事を探す時間があるんだ。フィア、ティアナさんも出る。あいつの邪魔をする
と後々に影響が出てくるからね」

フィリアは先ほどまで味方をしてくれていたはずのジオが自分を止めた事に驚きの表情を隠せないようだ。ジオはフィルなら今ある情報から有効な手段を見つけた事が出来ると信じているようで苦笑
いを浮かべるとフィリアを引きずって研究室を出て行き、

「あ、あの。フィルさん、邪魔をしてすいませんでした。あ、あの」

「……やれる事はやるから、講義にでも出てる。俺は忙しいんだ」

「は、はい。お願いします」

ティアナはフィルに頭を下げながらもやはり気になるようであり、
なかなか研究室を出て行く事はなく、フィルはそんな彼女の様子に

ため息混じりだがしっかりと依頼は終わらせてやると言つとティア
ナはファイルに深々と頭を下げて研究室を出て行く。

第17話

「……お前らはこの間の話を聞いていなかったのか？」

「えーと」

「うるさいわね。さつさと準備しなさいよ」

フィルが地質調査を行うための、道具を馬車のなかに積んでいると当然のようにティアナとフィリアが立っている。

「……ジオ」

「まあ、フィアの性格上、仕方ないだろ。それに調査中に襲われたら、道具とお前、同時に俺は守れないぞ。フィアがいるのは戦力になる」

「……戦力？ お荷物が2つ増えただけだろ」

「お荷物？ 誰の事？」

フィルはこの原因を作ったであろうジオを睨みつけると彼は申し訳なさそうに苦笑いを浮かべながらも、フィリアの戦力の高さは認めるべきだと言うがフィルは2人をお荷物と言い切り、その言葉に不機嫌そうな表情でフィルを睨みつけると、

「フィアさん、お、落ち付いてください。フィルさんも」

「……勘違いするな。俺は落ち付いている。ジオ、この2人が付いてくるのは仕方ない。フィアはまだしもティアナには試してもらいたい事もある」

「試してもらいたい事ですか？」

「ああ……それより、付いてくるなら付いてくるでかまわんが手続きはどうした？」

「は？ 何を言ってるのよ。そんな面倒な事をしてるわけないでしょ」

ティアナはまたケンカを始めると思ったようで慌てて2人の間に割って入るがフィルはフィリアの相手をする時間などないため息を吐くとティアナの『呪歌』には何か使える事もあると思っ

ようであり、2人の同行を許可すると2人に依頼を受ける手続きをどうしているかと聞くとフィリアはくだらない事を言うなど言いたげにため息を吐く。

「そうか。ティアナ、行くぞ。バカ女はそのままでも良いらしいがせつかくくるなら手続きはしておけ。行くぞ」

「あ、あの。良いんですか？ 私のわがままなのに」

「……依頼外で勝手にやって事故でも起きると面倒なんだ。特に前は特待生としての立場があるからな」

「そ、そうなんですか？」

「ああ。ジオが噛んでるから、済ませてあると思ったがな」

フィルはフィリアの相手をするのは面倒だと言うとティアナに依頼の手続きをするように言う。と地質調査依頼の代表としてティアナの手続きを済ませてくると言うがティアナは依頼を受けるのが初めてのため、どうしたら良いかわからないようであり、フィルはジオに依頼の手続きくらいを終わらせていない事を非難するような視線を向けると、

「説明とか面倒な事は任せるよ。相棒」

「……まったく、行くぞ」

「あ、あの。依頼の手続きと言うなら、フィアさんののは？」

「面倒だと言ったのはあいつだ。あいつが付いてきて、バカな事をしても俺もジオもしらん」

ジオは悪気などないようでくすりと笑うとジオの表情にフィルは呆れたようなため息を吐き、改めて、ティアナに付けてくるように言う。とティアナはフィリアの手続きはしなくて良いのかと聞くがフィルは依頼時に起きた事でフィリアに何があっても見捨てると言い切り、

「ちよつと、フィル、どう言う事よ」

「そのままだ。ティアナ、構うな。行くぞ」

「えーと」

「ちよつと待ちなさい!!」

「フィア、馬車に乗る気なら積み込みを手伝え」

フィリアは声を上げるがフィルは歩みを止める事なく、フィリアはフィルの態度に声を上げて追いかけてようとするがジオは彼女の首をつかむ。

第18話（前書き）

総合評価が100ポイントになりました。ありがとうございます。

第18話

「あ、あの。フィルさん、ジオさん」

「……なんだ？」

「地質調査つて、私の村の近くじゃないんですか？」

馬車を走らせて半日ほど経った時、ティアナはフィルとジオと初めて会ったのは2人が自分の村の近くで調査をしていたため、今回も自分の村の周辺だと思っていたのだが馬車は途中からティアナの村とは別の方向に向かいだし、ティアナは2人に場所の確認をする
と、

「……誰もそうだとは言ってないだろ」

「そ、そうですね」

「ちょ、ちよつと、先に言いなさいよ！！」

フィルは書類でデータを再確認しており、書類から視線をそらす事なく返事をし、フィリアは何で説明をしなかったんだと声を張り上げるが、

「……確認もしないで勝手に付いてくるとか言いだしたのは誰だ？
文句があるなら、止まってやるから、1人で帰れ」

「ぐぐぐ」

フィルは自分とジオには非がないと言い切り、フィリアはフィルの言うように確認もしなかったため、ここで文句を言うとなフィルの性格から本気で馬車から下ろされると理解出来るためこれ以上の文句は言えないように拳を握り締めて唸り声を上げている。

「あ、あの。フィルさん、それなら、今回はどこに行くんですか？」

「……グラン大平原」

「となるともう少しで着くわね」

ティアナはフィルに目的の場所を確認するとフィルは王国の領土である平原の名前を出すとフィリアは目的地はすぐそこだと言い、
「そうなんですか？」

「ああ……この周辺では1番、被害が酷くてな。単純には言えないが被害が大きいと言う事はこの現象の原因がここにある可能性が高い。後は原因はなくても拡大しやすい何かがあるからだ」

「この平原は薬草類も多く有って、被害も大きいんだよ。薬草類がダメになると国益にも関係してくるからね」

ティアナは場所がわかっていないようで首を傾げるとフィルは調べる価値がある場所だと言うとジオは苦笑いを浮かべる。

「国益ですか？」

「……ああ。ウチの国も特産品は人材だからな。王立の学園で学んだ人間が国に戻り、その国を助ける。方法は様々だけどな。その中でも医療従事者は多い。精霊魔法、神聖魔法を覚えて治癒魔法での医療を行う人間。薬草類や外科的技術を学んだ人間。後者の人間は薬草類がなくなると治療はできん」

「時期で取れるものも違うからね。この時期で取れるものがなくなるとストックがあるとしてもきついからね」

「そ、そうですね」

ティアナは国益と言われ、そんなものよりは先に優先して貰いたいものがありそうだがフィルとジオは国からの依頼のため仕方ないと言うとティアナは頷きはするが納得はいかなさそうであり、

「取れない薬草類が増えたとその薬草を売り買ひするレートが上がる。そうなると必然的に医療を行っている人間も治療費を上げざるを得ない。食料品も同じだが地質調査を行いデータを取り、それを正すために実験等もしないといけない。それにより、悪化する可能性も考えられるのに村の近辺でできるわけがないだろ。被害拡大もあるかも知れないものの有効な手を探すのに犠牲も出る可能性があるなら、村の農産物よりは魔法で補えるものを実験台に使う。それだけだ」

「……」

フィルはティアナの言い分などは知らないと言い切るが彼にも彼なりに考えている事もあり、ティアナはフィルが考えなしにしてい

る事ではない事が理解できたがやはり感情が付いてこないように口を閉ざしてしまう。

第19話

「……予想以上だな」

「ああ。これは酷いな」

4人がグラン大平原の入口に着き、辺りを見渡すと平原の4割くらいは植物が枯れているようで平原は茶色く変わってきている。

「……」

「フィル、一先ず、俺はこっちの準備をするからな」

「ああ。任せる」

「ちょ、ちよつと、泊まりなの？」

ティアナはこの平原と村の様子を重ねあわせているようで平原をジツと見つめており、ジオは馬車から荷物を引つ張り出すとフィリアは泊まりになると思っていなかったように声を上げると、

「……イヤなら、帰れ。何度も同じ事を言わせるな」

「フィア、遊んでないで手伝え」

フィルはフィリアに帰れと言い、ジオが馬車から下ろした荷物を手に1番近くのすでに植物が完全に枯れている場所に向かって歩き出し、ジオはフィリアに手伝うように言い、

「わかったわよ。その代わり、言っておくわよ。おかしな事を考えたらぶつ飛ばすからね」

「……誰が好き好んでお前みたいな奴を襲うか」

「俺も遠慮する」

フィリアは男2人におかしな事を考えるなと言うが2人はそんな事はありませんと言い切り、

「それはそれでムカつくわね」

「良いから手伝えよ。時間は限られているんだからな」

ティアナは2人の反応に眉間にしわを寄せるがジオはフィリアに手伝うように言うと言調査の拠点にするためのテントを張って行く。

「あ、あの。フィルさん、私は何を手伝ったら良いんですか？」

「……今は良い。ジオ達の手伝いでもしている」

「で、ですけど、私は早くこの事件を解決したいんです!!」

ティアナは頭の中によぎっている農作物が枯れ果てている村のイメージを払拭しようと大きく首を振るとフィルに手伝える事はないかと言うとフィルはティアナに今は手伝ってもらう事はないと言うがティアナには引けないものがあるため、食い付くようにフィルとの距離を縮めるが、

「……邪魔だ。調べられないだろ」

「は、はい。すいません、」

「……現状で言えばお前に出来る事はない。試したい事はあっても考える事は多いんだ。それに呪歌は魔力消費は他の魔法よりは少なくとも魔力を使用するんだ。1日で使える回数は限られているんだ。無駄な事するヒマがあるなら、必要な事から始める」

フィルは表情を変える事なくティアナには今はできる事はないと言い切り、調査を続けて行き、

「ティアナさん、こつちを手伝ってくれるかい？ 飯の準備もしないといけないからな。料理に関してはフィアは役立たずだから、料理ができるなら手伝って欲しいんだ」

「あ、あの。だとしても普通は逆じゃないでしょうか？」

「気にする必要はない。ずっと言ってるが脳みそまで筋肉のバカ力女なんだ。料理なんて繊細な事はできん」

「正直、フィアに任せると食いものができるとは思えない」

「フィル、ジオ、あんた達、ぶっ飛ばすわよ!!」

ジオは包丁を片手にテント張りはフィリアに任せて食事の準備をしようと言うとティアナは普通はジオとフィリアの格好が逆だと苦笑いを浮かべるがフィルとジオはフィリアに任せるのは自殺行為だと言い切り、2人の言葉にフィリアは文句があるようで吠える。

第20話

「……」

「フィル、どうだったんだ？」

ティアナとジオの作った夕飯を食べ始めるがフィルは食事をしながらも魔法で灯りを照らしながらも資料を読んでおり、

「フィル、ご飯の時くらいは止めなさいよ。ジオはどうでも良いけどティアナに失礼よ」

「あ、あの。別に私は」

「まあ、いつもの事だしな」

フィリアは先ほどからここに来る前からフィルに口で負けているためかティアナは引き合いにするとティアナとジオは苦笑いを浮かべるが、

「……」

「ちよつと、フィル、聞いてるのー!!」

フィルは食事を終えたようでも何とも言わずに立ち上がり、フィリアはフィルの態度に声を上げる。

「……」

「フィルさん？」

フィルはフィリアの事など気にする事なく、近くの植物が枯れている場所に向かい歩きだすとフィルの資料を照らしていた灯りは2つに分かれ、1つは食事をしていた場所にとどまり、もう1つはフィルの足元を照らして行き、

「えーと、これって凄いですよね？」

「そうじゃないかな？ 少なくとも俺はフィル以外でこんな魔法を使う魔術師とは依頼を受けた事はない。まあ、実際は戦闘時でもなければ魔法で灯りを点けている必要もないんだけどな」

「そうなんですか？」

「ランタン使えば良いからね。魔法に比べれば暗いけどそこまで気

「する必要はないからね」

「確かにそうかもしれないですね」

ティアナはフィルが使っている魔法の事をジオに聞くとジオはフィルだけの魔法ではあるがあまり必要性のない魔法だと言うとティアナはランタンの灯りと魔法の明るさを比較して苦笑いを浮かべた時、

「……始まったか」

「キレイ」

「普通は歌うのは男じゃないとは思っただけだね」

フィルが歌い始めたようでフィルの歌に精霊達が反応し始めたのか、精霊達が残っている個所は淡い光を放ち出し始め、幻想的な光景がティアナはその光景に小さな声を漏らす。ジオは苦笑いを浮かべたまま、歌う人間が間違えていると言うと、

「あ、あの。フィルさんは呪歌を使えたんですか？」

「ん。使えるよ。相性もあるとは言ったけど基本的にあいつは現在使用されている魔法の8割くらいは使えるって言ってたから、まあ、使えないのは血に魔法の特殊なルーンが刻まれているため、特殊な家系の人間にしか使えないと言われる魔法。だけど、許可をくれた人間もいて、それも分析して使えるものもある」

「やっぱり、凄い人ですね」

ティアナはフィルが自分と同じように呪歌を使っている事に気づき、驚きの声を上げるがジオはフィルにとっては簡単な事だと言い、「だけど、ティアナを連れてきたのよ。ティアナに歌って貰えば良いのにあいつの歌なんか聞いても面白くないわよ」

「まあ、それに関しては同じ意見だけど、フィルの事だから何か考えがあるんだろ？ それにフィルはしっかりと飯を食ってから動き出したぞ。飯の途中でいなくなるお前はあいつより失礼だろ？」

「う……そうかも知れない……ごめん」

フィリアは呪歌を使い始めて調査を再開させた邪魔はさすがにできなかつたようでティアナとジオの元に戻ってくると不満そうな表

情をするとジオはフィルの考えがわかるまで大人しくしていると
言い、フィリアはジオの言葉にバツが悪そうな表情でティアナとジオ
の顔を交互に見てから申し訳なさそうに謝る。

第21話

「……」

「何かわかったのか？」

「……ああ。何力所か光が極端に強いところがあった」

「それって精霊さんがいなくなったのはその場所に集まっているって事ですか？」

フィルが呪歌を歌うのを止めるとジオがフィルに声をかけるとフィルは頷き、呪歌に反応した精霊達にも違いがあると言つとティアナはフィルの言葉から1つの答えを導き出したように遠慮がちに言う、

「それも考えられる事だ。それに仮にそうだとしても……」

「何？ 私やティアナを追い出して置いて何も対処法を考えてないの？」

「……これが自然的に起きた精霊達の意味か。誰かの手で作動的に起こされた事かで次の対処も変わってくるって事だ。何も考えていないバカが余計な事を言うな」

フィルがティアナの質問に答えようとした時、フィリアが割って入り、フィルはため息を吐き、

「作為的だと厄介だろうな……フィル、地質調査をしていて襲われたグループって何件あった？」

「何件とか細かい事は忘れたが……10割だったはずだ。俺達も前は襲われてるだろ。まあ、王都の外だからそれが偶然かはわからないが」

「今はそんな状況じゃないでしょ！？ あんた達は何でそんなに落ち着いてるのよ！？」

ジオはため息を吐きながら自分達以外で地質調査をした学生達が戦闘になった件数を聞くとフィルは直ぐに返事をするがフィリアは自分達を狼に良く似た獣が囲んでいる事に気づき、2人のゆっくり

とした会話にツツコミを入れて自分の身長と変わらない大剣を構える。

「ただの野生動物だろ。気にするな」

「あ、あの。気にするなと言っても流石にこの状況じゃ」

しかし、フィルは周囲から聞こえる獣の唸り声などどうでも良さげであり、そんなフィルとは対照的に先日まではただの村娘であったティアナにはかなりの恐怖を与えているようであり、声を震わせながらフィルにどうにかして欲しいと言うと、

「下手に動くな。野生動物への対処なら終わらせてある」

「お、終わらせてあると言ってもこの状況は怖いです」

「お。フィル、役得」

「えっ！？ フィ、フィルさん、すいません!？」

フィルはティアナの様子など気にする事なく精霊の気配が強いところまで歩こうとするがティアナは聞こえてくる唸り声に不安になっ
ているようでフィルの服をつかみ、ジオは2人の様子にニヤニヤと笑うとティアナはそこで自分がフィルの服をつかんでいる事に気づき、慌てて手を放し、

「ジオ、くだらない事を言っているなら、手伝え。ここを掘るぞ。」

力仕事はお前の仕事だろ？」

「わかってるよ。それでも1人はキツイから支援魔法の1つでもくれよ」

「悪いな。呪歌を使うのに結構な魔力を使ったから、しばらくは打ち止めだ」

「マジか」

「…… あんた達、緊張感ないわね」

フィルはティアナの行動に何も言う事なく次の行動に移ると言い、地面に魔法でx印をマーキングして行き、フィルとジオはその場所を掘りだそうとするとフィリアはフィルとジオの言う通りいつまで経っても獣が襲いかかってこないため自分1人だけ警戒している事がバカらしくなってきたようで大きく肩を落とす。

第22話

「あ、あの。フィルさん、対処をしてるって言っていましたけど」

「確かに警戒はしてるけど襲ってくる気配はないわね。気分的には狙われてるみたいで気分悪いし、説明くらいしなさいよ」

フィルとジオがマーキングした位置を掘っているとティアナとフイリアはジオに今の状況を説明して欲しいと言うが、

「……これか？」

「ああ。思っていた場所より、ずいぶんと浅い場所にあつたな」

「あんた達、人の話を聞いているの？」

「説明なら後でしてやる。一先ず、戻るぞ。ここはそろそろ魔法が切れる」

「フイア、突っ立ってるなら、手伝え」

「魔法が切れる？」

「あ、あの。それって……あの、フィルさん、ジオさん、私、今、考えない方が良い事を考えてしまったんですけど」

フィルとジオは何かを見つけたようであり、2人の様子にフイリアはため息を吐くとフィルは掘り出した拳大の石を手にテントに戻ると言い、ジオは直ぐに撤収作業を開始し始め、2人の様子にティアナとフイリアはこの後に起きる事からを理解したようで顔を引きつらせ、

「フィル、ジオ、あんた達は何なのよ！？ 計画性って言葉を知らないの！？」

「そ、そう言う事は先に言ってください！？」

「勘違いするな。お前らがテントから離れて付いてきてるから、魔法範囲を拡大しているんだ。魔力がなくなれば魔法が切れる。当然のことだろ。ほら、遊んでいるヒマがあつたら動け。食われたいなら別だがな」

「草食系の動物はエサ場がなくなつて移動しているからな。あいつ

らも腹をすかせているかもな」

2人そろってフィルとジオに文句を言うがフィルもジオも気にする事はなく、テントに向かい歩き出し、ティアナとフィリアは慌てて2人の後を追いかけて行く。

「……まったく、無事に着いたから良いものの」

「……囲みを横切つてくるとは思いませんでした。すぐそこに狼さんの顔がありました」

「何だ。それなら、蹴散らしてきたら良かったのか？ あいつらの屍を積み上げても精霊達が力を貸してくれないんだ。屍の栄養を土に取り入れられないなら無駄でしかないだろ」

4人はテントに無事に到着するとティアナとフィリアはかなり緊張していたようであり、テントに到着するなり、安心したようで息を漏らす。フィルは無駄な事をするつもりはないと言い切り、

「……フィル、あんたはもう少し女の子の子に気を使いなさい」

「ん？ そうか。ティアナ、悪かった」

「は、はい」

「つて、待ちなさい！！ 何で、ティアナにだけよ！！ 私も『女の子』でしょ！！」

「ジオ、何か戯言が聞こえるんだが」

「まあ、気にするな。それより、この石が原因なのか？ 見た目はそこら辺に転がっている石と変わらない気がするんだが」

「ああ。見てみる……」

フィリアはフィルとジオが図太すぎると言いたいようで自分やティアナは女の子なのだから心配くらいしろと言うがフィルはティアナにしか気を使わずにフィリアはフィルの態度が不満だと声を上げる。2人は気にする事はなく、ジオはフィルが持ってきた拳大の石を手に取り聞くとフィルはジオに石を渡すように手を出し、石を受け取ると研究室で土を光らせた魔法を唱え、その石はフィルの魔法に反応したようで強い光を発する。

第23話

「フィルさん、これだけ、明るく光るって事はこの石には精霊さんがたくさんいるって事ですよね？」

「……簡単に言えばそうだが、もう少し言い方はないのか？」

「す、すみません!？」

ティアナは光輝く石を覗きこんでこの石の中には精霊の力が多く込められているのかフィルに確認するとフィルはティアナの言葉使いにため息を吐き、ティアナは慌てて頭を下げ、

「細かいわね。良いから説明しなさいよ。これが原因なんですよ」

「ああ……この呼び方は魔石、魔法石、精霊石と魔光石と言った、似たような名前と呼ばれている石なんだが、まあ、一先ずは魔光石で統一するか」

「……フィル、そこは重要なのか？」

フィリアはフィルとジオが自分を女の子扱いしない事に不満があるようで不機嫌そうな表情で早く説明をするように言い、フィルは光輝く石を『魔光石』と呼ぶ。

「別に重要でもないがバラバラに言う頭がこんがらがる人間がいるだろ。だいたい、説明をしても理解できるかが疑問なんだからな」

「まあ、あまり難しくするな。正直、俺も付いて行ける自信はない」

フィルは3人の顔を見回した後、説明する意味があるのかと言うとティアナとフィリアはフィルから視線を逸らし、ジオは苦笑いを浮かべると、

「簡単に言えば、魔力や精霊力の結晶体だ。本来なら自然に魔力や精霊達が集まるところで長い年月をかけて生成されるものなんだがな」

「ちよつと待つて。長い年月をかけてって言うけど、いくつか強い光を発してたところがあつたわよね。そこにもこれと同じものが埋まつてるって事よね？ それにこの場所は特に魔力が集まるって場

所じゃないんでしょ？ それじゃあ」

「……さっきも言ったがどこかのバカが作為的にこれを起こしているんだろ」

フィルは魔光石が生成されるには長い年月がかかると言う話をするとフィリアは先ほどのフィルの呪歌でグラン大平原は多くの場所が光輝いていた事を思い出し、この場所で魔光石がある理由は推測する事が出来たようだがはつきりと言う勇氣はなかったようで言葉を濁すがフィルは表情を変える事なく言い切り、

「な、何の意味があつてこんな事をするんですか！！」

「ティアナさん、落ち着いて。フィル」

ティアナは自分の村でも同じように魔光石を作り出している人間がいると知ると村の状況を思い出して怒りがこみ上げてきたのかフィルとの距離を詰めるとジオがティアナを押さえつけてフィルに続きを説明するように言い、

「……意味か？ 推測できる事で良いなら教えても良いが、あまり良い事ではないな」

「だろうな。わざわざ、こんな手にかかる事をしているんだ。頃合いを見て魔光石を回収してしまえばここの辺の精霊達はいなくなってしまう。そうなれば国力は低下するしな」

「ああ。それに魔光石は魔力や精霊力の塊だ。魔術師から見れば自分の魔力を維持したりするのに重要な道具になる。人工的に生成する方法を見つけたらなら、敵にはダメージを与え、自分の戦力は増強できる」

「ちよつと待ちなさいよ。話が大きくなりすぎよ！！ あんたが言うのはこのままだと戦争が起きるって言ってるようなものでしょ」

「せ、戦争ですか？」

フィルは魔光石を人工的に作り出している人間の目的で推測される最悪の物を話すとフィリアは声を上げ、ティアナは現実味はないようではあるが『戦争』と言う言葉に顔を青くする。

第24話

「実際はわからないがな……」

「なら、どうして、そんな風に脅しをかけるのよ？ そんな風に言われると不安になるでしょ？」

フィリアとティアナが戦争が起きてしまつと心配そうな表情をする隣でフィルは興味などなさそうに魔光石を眺めているとフィリアはフィルの様子が不愉快なようで彼を睨みつけるが、

「……最悪の状況を見据えて何が悪い。最悪を見据える事はそれを回避する道を模索する事につながる。勝手に自分の都合の良い答えを選ぶよりはマシだ」

「だとしても、あんたにはその後のフォローってものはないの？」

「……知るか。少なくともそんなものよりは今はこれをどうにかする方が先だ……植物の枯れている場所の土を確認した限りではこの中に精霊達が引き寄せられ、捕えられているはず、なら、その原因の魔法式の分析、解析が先決だな。ティアナ」

「は、はい！？」

フィルはフィリアの言葉をくだらないと切り捨てると事前に立ててきた予想から次の行動に移るようでティアナの名前を呼ぶとティアナは先ほどからほとんどの事をフィルが1人でやっていたためか自分のやる事など何もないと思っていた部分もあったようで声を裏返すと、

「……ティアナ」

「い、いえ、すっかり、自分が付いて来た理由を忘れていたわけじゃないですよ！？ え、えと、大丈夫です。問題ないですよ！？」

「それは忘れたと言っているようなものだよ」

フィルは眉間にしわを寄せ、ティアナは慌てて弁明しようとするが次の言葉が出てこなくジオは苦笑いを浮かべる。

「……とりあえず、役目がある事は思い出したか？」

「は、はい」

「そうか。それなら、呪歌を頼む。治癒の効果のある奴だ」

「そ、それで良いんですか？ もっと凄い事とか」

フィルは呆れているのか眉間にしわを寄せたまま、ティアナに彼女の異質の能力でもある『治癒の呪歌』を使うように言っているとティアナはもつと難問を指示されると思っていたようで少し間の抜けた表情で聞き返し、

「……お前にやれる事などたかが知れてるだろ。だいたい、他の事なら俺1人で事足りる」

「そ、そうですね。それでは……」

フィルはため息を吐くとティアナはフィルの機嫌を損ねるのはいけないと思ったようで緊張した面持ちで大きく深呼吸をすると、

「……あまり気を使うな。呪歌は使用者の精神状態に作用するからな」

「は、はい！？」

「……逆効果つばいぞ」

「そうね」

フィルはティアナの様子に今の状況ではまともな呪歌を使えないと判断したようでフィリアの先ほどの言葉もあるのかティアナに声をかけるがその声にティアナは驚きの声を上げて声を裏返すため、ジオとフィリアは彼女の様子に苦笑いを浮かべ、

「す、すいません。すぐに」

「……まったく、曲はこの間、学園に初めて着た日の曲で良いな」

「あれ？ フィル、あんたも歌う気？」

「仕方ないだろ。魔力の無駄使いではあるがこうでもしないと先に進まない。ティアナ、最初だけだからな。ある程度、したら、1人で歌え」

「は、はい。あれ？ で、でも、フィルさんは治癒の呪歌は使えないはずじゃ」

「……良いから、早くしろ」

「は、はい」

ティアナはジオとフィリアの表情にさらに追い込まれて行くため、フィルはティアナを落ち着かせるために先行して呪歌を歌うと言うとティアナは治癒の呪歌は自分だけの能力だと言う事を思い出すがジオからフィルの魔法の実力も聞かされているため、フィルなら使えると思ったように大きく頷き、陽が落ちたグラン大平原には2人の声がキレイに合わさった呪歌が響く。

第25話

「……で、フィル、あんたは何がしたいの？」

「治癒の呪歌はティアナしか使えないんだろ？」

ティアナが落ち着いたのを見てフィルが歌うのを止めるとフィリアはフィルの考えがわからないようでフィルの腕を指で突くとジオもフィルがティアナと呪歌を合わせた理由を聞くと、

「……前にも言ったが、治癒の呪歌はティアナだけだ。俺には使えない」

「でも、同じ曲でしょ」

「曲はな。だけど、効果が出るまでの過程が違う。俺や一般的に使われる呪歌は曲や音階に魔力を込めるんだ。だから、呪歌はいくつか種類があるんだが、ティアナの場合はそうじゃない。本人は無自覚、曲もバラバラだが呪歌になる」

「それって歌うまで効果がわからないんじゃないの？」

フィルは自分は治癒の魔法を使っていないと言うと現状ではフィリにもティアナの呪歌の原理はわかっていないようであり、フィリアはその中でティアナが治癒の呪歌を使える事に首を傾げる。

「あの曲だけは確立させたただけだ」

「……そんなものなの？」

「今のところ他の呪歌は効果がわからんからな」

「……それはそれで危ないわね」

フィルはティアナがまともに使える呪歌は限られていると言うとフィリアは顔を引きつらせると、

「まあ、基本的に呪歌には攻撃系があるわけじゃないからな。時間をかけてパターンを見つけさせれば良いだろ。それで、あの曲は俺が使う呪歌では精神を落ち着かせる呪歌に近いものがあつたからな。最初に合わせたただけだ」

「ティアナがやけに落ち着いているように見えるのはそのせいかな」

「ああ。あのままだといつまでたつても先に進まないからな」

フィルはティアナの歌に集中するように目を閉じると彼女を落착かせるために自分も呪歌を使ったと言うとジオは苦笑いを浮かべ、フィルは目を閉じたまま頷くと、

「……フィル、あんた、ただ、ティアナの歌が聞きたいだけだった
りしない？」

「そんなわけがあるか……もう少し時間があるか。無駄に魔力を使
ったからな」

「無駄ね？ あんたが最初に説明をしてから動けば、私やティアナ
だって安全な場所にいるわよ」

「まあ、近くに居なければ、狼に斬りかかって魔法の効果を破壊し
ていた可能性も高いけどな」

「……ジオ、余計な事を言わないで」

フィリアはフィルの様子にフィルがティアナの歌を聞きたいだけ
じゃないかと言うとフィルは呆れたようなため息を吐くと自分の中
の魔力の残量を確認しているようで小さな声でつぶやくとフィリア
は原因はフィルにあると言うがジオはフィリアの行動が予測できた
ようで苦笑いを浮かべるとフィリアもジオの言葉に自分でも同意で
きる部分があるようで気まずそうに視線を逸らし、

「それで、フィル、これには何の意味があるんだ？」

「……ティアナの治癒の呪歌は体力だけではなく、魔力も癒す効果
がある。これは他の魔法にもない効果だ。お前らは普段、魔力を使
わないから実感がないだろうけどな」

「ティアナの呪歌ってかなり凄いつて事？」

「……最初からそう言うてるだろ。一先ずはここまで戻れば充分か」
ジオは苦笑いを浮かべたまま、ティアナに呪歌を使わせた理由を
聞くとフィルはティアナの呪歌には体力以外にも魔力を回復する事
が出来ると言うとな必要な魔力が戻ったように目を開く。

第26話

「フィル、何をするつもり？」

「……何度も同じ事を言わせるな。こいつの魔法式の解析、分析をする……」

「……何度もつて、さっき、1回言っただけでしょ」

フィリアは魔石を片手に何か始めようとするフィルに声をかけると彼は不機嫌そうに返事をする、フィルは魔法の詠唱を始め出し、フィリアはフィルの言葉にイラつとしながらも邪魔はできない事を理解しているため額に青筋を浮かべ、

「まあ、フィアも落ち着け。フィルの邪魔をするのは得策じゃないだろ」

「そうだけど、こいつの言い方はいちいち、とげがあつてムカつくのよ」

「フィルの言葉使いが悪いのは今更だろ。こいつの場合は特に」

「わかつてるわよ。だからこそ、ムカつくんでしょ……1人で全部抱えた気になつてるんじゃないわよ。そんなに私やジオは頼りにならないって言うの？」

ジオはフィリアの様子に苦笑いを浮かべて彼女をいさめようとするとフィリアはジオの言いたい事もわかつていると言うがやはり納得はいかないようであり、小さな声で本音を漏らす誰からも返事は戻ってくる事はなく、フィリアは自分が漏らした本音に自分らしくないと頭をかいた時、ティアナが曲を歌いきったようで静寂が訪れ、

「あ、あの。ジオさん、私はいつまで歌っていれば良いんでしょうか？」

「さあ。もう良いんじゃないかな？ フィルも自分の作業を始めたみたいだし……とりあえず、休憩しようか？ 紅茶でも入れるよ」

「は、はい。ありがとうございます」

ティアナはフィルが作業を始めた事に気づいたようで邪魔をしてはいけないと思ったようでジオに呪歌をまだ続けるべきかと聞くとジオはティアナに休むように言う。

「はい……しかし、魔力まで癒す呪歌か？」

「あ、ありがとうございます……えーと？　どうかしましたか？」

「いや、フィルはなんだかんだ言ってもティアナの事をしっかり見ていると思ってね」

「フィルさんが、私を見ている……あ、あの、それってどう言う事ですか？」

ジオはティアナに紅茶を渡すと彼女の呪歌の特異さに感心したように言うがティアナは自分の呪歌の特異さに気づいていないようにできよとした表情で聞き返し、ジオはティアナの表情に苦笑いを浮かべ、無愛想で言葉使いが最悪な幼なじみに視線を向けるとティアナはジオの言葉に頬を赤く染めながらジオに聞くと、

「……ごめん。そっちの意味じゃない。と言うか、あいつは恋愛関係に興味があるかは俺はわからない」

「な、何を言ってるんですか！？　わ、私は別にフィルさんの事をす、好きとかそういうわけじゃ」

「……いや、ティアナ、それは肯定と変わらないわよ」

「まあ、命の恩人に好意を持つのは当たり前だし、そこまで全力で否定しなくても良いよ」

ジオはティアナの期待している事ではないと言うとティアナは顔を真っ赤にしたまま全力で否定するがフィリアはそんな彼女の反応に苦笑いを浮かべ、ジオはフィルとティアナの出会いを考えれば不思議ではないと頷き、

「そ、そんな事はないです。た、確かに村が魔物の襲撃に遭って最悪な状況を考えた時に魔法で魔物達を一掃してくれたフィルさんはカッコ良かったですし、学園に来てからも無愛想で文句を言いながらもしっかりと私にアドバイスしてくれる姿とか本当は優しいんだとか、べ、別にそれだけで」

「……ティアナ」

「……完全に惚れてるじゃない」

ティアナは2人の言葉を否定しようとするがその言葉は誰が聞いてもフィルに好意を寄せているものであり、ジオとフィリアはティアナを生温かい目で見て頷く。

第27話

「だ、だから、違います!!」

「……うるさい。静かにしろ。集中がでкин」

「フィ、フィルさん!？」

「……なんだ？」

ジオとフィリアの様子にティアナは顔を真っ赤にしたまま全力で否定しようとした時、あまりの騒がしさにフィルの集中力が切れたようでフィルは不機嫌そうな表情をして騒がしいと言うとティアナは声を裏返して驚き、ティアナの様子にフィルは怪訝そうな表情をする。

「まあ、フィル、お前は気にするな。それより、何かあったのか？」

「……いくつかわかったが、あまりにうるさくて集中力が切れた」

「え、えーと、ごめんなさい」

ジオはフィルとティアナの様子を見て苦笑いを浮かべると話を変えするために、フィルに魔光石について何かわかったかと聞くとフィルは不機嫌そうな表情でまだ分析の途中だと言い、ティアナは申し訳なさそうに謝り、

「フィル、いくつかわかったって言うなら、それについて教えなさいよ」

「……理解できない事を聞いてどうするんだ？」

「……あんた、いちいちム力つくわね。その言い方、どうにかしなさいよ」

フィリアはティアナが申し訳なさそうにフィルに謝る姿に多少なりの罪悪感を覚えたようでフィルにわかった事だけでも話すように言うがフィルは先ほどの話もほとんど理解できないフィリアに説明する意味があるのかと言うとフィリアは額に青筋を浮かべてフィルの態度が悪いと言うが、

「知るか。だいたい、理解しようとしないう人間に説明するほどヒマじゃないんだ……ここから、今ある情報をまとめて魔法式の構築をしないといけないんだからな」

「魔法式の構築？ あ、あんた、こんなところで何をする気よ？」

「何？ 魔光石を人工的に生成する魔法なんてどこにもないんだ。それを戻す魔法だってあるわけがないだろ」

フィルは気にする事なく次の作業に移ると言うがその作業はフィリアから考えれば常識からかなり外れた事であり、驚きの声をあげるがフィルはくだらない事を言うなと言い切り、

「……長くなるから何もする事がないなら寝ている。俺はたぶん、徹夜作業になる」

「そうだな。フィアもティアナも休むんだ」

「フィ、フィルさん、徹夜って大丈夫なんですか？ ジオさんも当たり前のようにテントに入ろうとしないでください。フィルさんに徹夜なんて止めてくださいって言うてください」

「……知るか。ダメだったら、ぶっ倒れるか死ぬかするだけだろ。だいたい、時間がないんだ。現状ではこれを人為的に引き起こしている奴がいるなら、俺が対策を立てたら次の方法に出てくる事が考えられる。素早く魔光石から精霊達を元に戻す方法を確立して異常が起きている土地に方法を広めないといけないんだ。何より、騒がれると集中ができない」

フィルは徹夜仕事になるから3人に休むように言うがジオはフィルの言葉に頷くがティアナはフィルの身体を心配しているようでジオにフィルを止める手伝いをして欲しいと言うがフィルが余計な心配をする前に静かにしていると、

「で、でも、魔物やそれこそ魔光石を作っている人が攻めてきたら……それこそ、お前が起きてようが関係ないだろ。それにそのくらの対策はしてある。余計な心配をしているヒマがあるなら身体を休ませろ。フィア、さっさと連れて行け」

「はいはい。わかったわよ。ティアナ、休むわよ」

「で、でも」

「良いから、良いから」

ティアナはフィルを1人に行っているのはやはり良くないと言うが
フィルは彼女を邪魔だと言い、フィリアはフィルが言いたい事を理
解したようで素直じゃない幼なじみの姿に苦笑いを浮かべるとティ
アナを引きずってテントの中に移動する。

第28話

「……寝ろと言ったはずだ」

「そうなんですけど、こう言うのは初めてですし、眠れなくて」

フィルが1人になって2時間ほど過ぎたころ、ティアナがテントから顔を出し、フィルは話し相手になるつもりなどないため、不機嫌そうな表情をするとティアナは苦笑いを浮かべるとテントから出て来てフィルのそばに置いてある魔光石を手に取り、

「このなかに精霊さんが捕まっているんですよね？」

「……捕まっていると言うよりは引き寄せられているに近いかな」

「引き寄せられているんですか？」

見た目的には普通の石と変わらない魔光石のなかにいるであろう精霊達の事を心配するように言っているとフィルは精霊達には何の問題もないと言った感じで答え、ティアナはフィルの言葉に首を傾げる。

「……簡単に言えば精霊を引き寄せる魔法式が石の中心部に埋め込まれていると言うか。これ自体も見た目を石に見えるように魔法式を埋め込まれている」

「どう言う事ですか？」

「石に見えるのは幻術の類だ。元々、精霊達を無理やり引き寄せて作ったものだからな。魔法を使う人間から見れば精霊力や魔力が高いと感じるがものと認識ができれば手に取る事もできない。精霊達と言った物質干渉のできないものを手に触れられる魔光石として認識させるほどの強力な魔法式……こいつを一時的に外してやれば」

「え？ フィ、フィルさん、魔光石が消えちゃいましたよ！？ どうするんですか！？」

フィルは魔光石の中には2つの特殊な魔法式で構築されていると言うがティアナにはフィルの説明が理解できないようで首を傾げるとフィルは説明をするより、見せた方が早いと考えたようでティア

ナの手から魔光石を抜き取ると魔法の詠唱を始め出し、魔法の詠唱が終わるとフィルの手にあった魔法石は消えてなくなってしまい、ティアナは驚きの声をあげるが、

「……目に見えなくなっただけだ。目で見るのではなく精霊達の存在を感じる。お前は仮にも魔法学科にいるならそれくらいできるだろう」

「か、感じると言われても」

「……まったく、ここにきた時に俺は呪歌を使って精霊達の力を活性化させた。方法は違うが同じような事がお前にもできるはずだ」

「え、えーと、呪歌？ それなら、私にもできるのかな？」

フィルは魔光石がまだ手の上にあると言うとティアナに魔法使いなら簡単にできるはずだと言うがティアナはフィルの言うようにはできないと言い、フィルはため息を吐くと呪歌の詠唱を始め出し、フィルの手の上は先ほどまで見ていた魔光石と同じくらいの大きさの光が現れ、ティアナはフィルの呪歌に合わせるように歌い始めるとフィルの手の上だけではなくグラン大平原に埋まっている魔光石が輝きだし、

「す、凄い」

「……なるほどな。生命力、魔力だけではなく、精霊達にも影響があるわけか？ それと他の呪歌の影響」

ティアナは自分とフィルの呪歌が合わさる事で輝きだす魔光石の様子に感動したようで声を漏らすと呪歌が途切れた事で魔光石の輝きは失われるがフィルは先ほど起きた状況に何か感じたようで小さくつぶやくと、

「フィルさん、フィルさん、凄いです。キレイです。も、もう1度、お願いします」

「……やるなら1人でやれ。それに今は夜なんだ。それ以外にも見上げれば面白いものも見れるだろ」

「見上げれば？ ……あ、キレイ」

ティアナはもう1度、魔光石の輝きを見たいとフィルに呪歌をお

願いするがフィルは忙しいと言いたげに空を指差すと空には一面の
星空が広がっており、ティアナは星空に感動したように声を漏らす。

第28話（後書き）

お気に入りか50件を超えました。

ありがとうございます。引き続き、楽しんでいただけるようにつながりますのでよろしくお願いします。

後は今更ですが、キャラクター設定っているんですかね？

オリジナルだし、話の中で書いていけば良いのかな？

必要、不必要を教えてくださいませんか？

第29話

「す、凄いですよ。フィルさん」

「……知ってる」

「あ……」

「ん？　どうかしたか？」

「な、何でもないです」

ティアナはこの感動を共感して貰いたいようにフィルに声をかけるが彼は彼女の様子に少しだけ表情を緩めせるとティアナはいつも不機嫌そうなフィルの表情の変化に目を奪われたようで一瞬、動きを止めると彼女の様子にフィルは首を傾げるとティアナは顔を赤くして誤魔化そうと慌て、

「……そうか。それより、慣れないとは言え、寝ておけ。何があるかわからないからな。今日はまだ魔力があるから周囲への警戒の魔法範囲も広いが、長い間かかる依頼だと魔法が安定しない日も出てくる。その時は範囲も狭くなるし……それに魔法を無効化して無理やり入ってくる奴も出てくる」

「フィルさん、どうかしたんで……あ、あの。どちら様ですか？」

「おや。気づきましたか？　気づかないようにしたつもりだったんですけどね」

フィルはそれ以上は詮索する事もなく、ティアナをテントに戻そうとするがその途中で何かに気づいたようでティアナを自分の背後に隠すように移動するとフィルとティアナの目の前の空間は歪みだし、黒いフードを被った男が現れる。

「……こっちのセリフだ。簡単に入って来れないようにしていたはずだが」

「いえいえ、簡単になんて入れませんでしたよ。さすが、天才魔術師とまで称されるフィル＝ユークリッド様です。媒体を介さずに結界を張り、同時に幻術魔法で視界で認識できないようにする視界だ

けでもなく気配さえも認識できないようにするなんてそこら辺の塵芥にはできませんよ」

「……それを破ってくる自分はそれ以上だと言いたげだな」

フィルは男の気配に警戒しながら、男の目的や様子を探りたいように簡単な言葉を交わすと男は淡々とした口調でフィルを誉めるがその言葉からはフィルを明らかに格下に見ている感が見え、フィルは表情を引き締めると、

「フィ、フィルさん、ジオさんとフィアさんを」

「……動くな。あいつらなら、自分の事は自分でどうにかできる。それより、死にたくなかったら、動くなよ」

「は、はい!？」

「おや? 卑怯者のフィル」ユークリッド様らしからぬ。行動ですね。それともその娘が大切なんですか? あなたは卑怯者なんですから、その娘もテントの奥で私に気づく事なく眠りにについている愚か者を見捨てて逃げれば良いじゃないですか? あなた1人なら逃げれると思いますよ? 違いますね。逃がしてあげますよ」

ティアナはフィルと男の様子に不安そうな表情でフィルの服をつかみながら、自分がテントまで移動してジオとフィリアを起こしてくると言うがフィルは男がティアナが自分から離れる瞬間を狙っている事を理解しているように彼女を止めると男はフィルの言葉に本当につまらなさそうに言い、

「……最初に聞いておく。これはお前がやっている事か?」

「これ? ああ、魔光石ですか? 『私』はこんなものに興味はありませんよ。こんな回りくどい事をするよりはもっと簡単に済む方法を取りますよ」

「……そうか。少なくともこれを使ったバカを知っているわけではあるんだな?」

「どうでしょう? そうですね。私が満足するものを見せてくれればヒントくらいは出してあげても良いですよ」

フィルは男が魔光石を回収しにきたのか確認をすると男は魔光石

には関心はなさそうだがその口調からは魔光石を作っている人間に繋がっていきそうであり、フィルは表情を険しくして聞き返すと男はフィルを挑発するように言う。

第29話（後書き）

どうも、作者です。

もう1本、オリジナルファンタジー小説を書き始めました。『勇者の息子と魔王の娘？』と言う作品です。

こちらよりはコメディータッチかな？ と思います。

第30問

「……満足するものか」

「フィ、フィルさん、どうするんですか？」

「そうだな。一先ずは時間でも稼ぐか？」

フィルは男の言葉に挑発される事はないが、ティアナはどうしたか良いかわからないようで不安そうな表情でフィルの服をつかんでいる手に力を込めるとフィルはあまり深く考える事なく『時間を稼ぐ』と言った時、

「ほう。そうきますか？ 面白いですね。流石はジオ『ブリッツ』。

フィル『ユークリッドの相棒と言われるだけありますね』

「いやいや、まさか、こつちも防がれるとは思っていなかったよ。

多少時間がかかっててもフィルに魔法障壁を破壊できる支援魔法を受けとけば良かったよ」

「ジ、ジオさん!？」

男の背後の空間が割れると同時にジオが男に斬りかかるがジオの剣は男には届く事はなく剣は魔法障壁に弾かれ、男はジオの登場にわざとらしく驚いたような声をあげるとジオは自分の剣を弾くほどの魔法障壁を用意していたであろう男の警戒心を誉めるように口元を緩ませるがティアナは何もなかった空間からジオが現れた事に驚きの声をあげるなか、

「フィル、ジオ、いったい何なんのよ!! 人がせつかく良い気持ちで寝てたのに!!」

「……」

この騒ぎのなか気にする事なく眠っていたフィリアがテントの入口を開けて吠えるところの状況にまったく気づいていなかった彼女の様子にフィルとジオだけではなく男まで呆気に取られたようで一瞬、時間が止まり、

「……恐ろしい仲間がいますね」

「……言うな」

男はこのシリアスな空気を完全に破壊したフィリアの登場に苦笑いを浮かべると先ほどまで張りつめていたピリピリとした空気は吹き飛んでしまい、フィルはフィリアの事が恥でしかないと思ったように大きく肩を落とす。

「あ、あの。フィルさん、今はどんな空気なんですか？ さっきまでの張りついたような」

「……気にするな。あっちもやる気がなくなったみたいだからな」

「フィア、お前、天才だよ」

「何、ふざけた事を言ってるのよ？ ……誰？」

ティアナはフィルと男の様子に言いづらそうにフィルに今の状況を聞くとフィルは眉間にしわを寄せて男も自分達もすでに戦う気はないと言うとジオはフィリアを小バカにした時、フィリアは初めてフードを被った見知らぬ男がいる事に気づき、男を指差して首を傾げると、

「通りすがりのフードの男で良いだろ」

「そう？ って、待ちなさいよ！！ めちゃくちゃ、怪しいでしょ！！」

「そ、そうですよ。さっきまで本気でころ……」

フィルは興味がなさそうに答え、フィリアは流れで納得しかけるが直ぐに声を上げ、ティアナはフィリアに同調しようとするが先ほどまで、フィルとジオが男を殺そうとしていた事に気づき、顔を真っ青にすると腰が抜けたようにで地面にへたり込んでしまい、

「可愛いお嬢さんですね。私はこれで失礼しますよ。フィル、ジオ、また『いつか』」

「き、消えた！？ フィ、フィル、ジオ、あいつは何なのよ！！ 説明しなさいよ！！」

「……知るか。それより、ティアナ、立てるか？」

「は、はい……あれ？」

「まったく」

「あ……」

男は最初からフィルとジオへの顔見せ程度に現れたのか2人に向かい、再会を約束するかのように言っていると男の立っていた空間は歪み始め、男の姿は消えて行き、フィリアは何があったかわからないように声をあげるがフィルは答える気はないようでティアナに声をかけるが彼女の腰は抜けたままであり、フィルはティアナの様子にため息を吐くと彼女を抱きかかえてテントの中に運ぶ。

第31話

「あ、あの。フィルさん」

「寝ている。いろいろとあり過ぎたからな…… フィア、付いていてやれ。俺は戻る」

「あ……」

フィルはテントの中にティアナを下ろすとフィリアに彼女を任せて自分は魔光石の分析に戻ろうとするがティアナは不安なのか出て行こうとするフィルの服をつかむと、

「フィル、あんたに付いていて欲しいみたいだよ。私とジオは少し、外を見張ってるからあんたも少し休みなよ」

「……あのなあ。時間がないと言っているだろ」

「そう言うな。時間はないと言ったつてお前以外にこいつの分析をできる人間はいないんだ。無理をしてぶっ倒れられたら何も進まないんだ。ティアナが落ち着くまで一緒にいてやれ」

ジオとフィリアはティアナの様子にニヤニヤと笑い、フィルとティアナを残してテントから出て行き、

「……あいつらは何がしたいんだ？」

「あう……」

フィルは2人の行動の意味がわからないようで眉間にしわを寄せて言うがティアナは少し前にジオとフィリアにからかわれた事を思い出して顔を赤くしてうつむく。

「まあ、ジオの言う事も一理あるが……別に話すような事もないしな」

「そ、そうですね。あ、あの。さっきの人に心当たりはないんですか？ あの人はフィルさんとジオさんの事を知っていましたけど」

「知らんが……今回の件には関係ないだろうな」

フィルはこれと言って話す事もないと言うと目を閉じて自分の疲労度の確認を始め、ティアナはフィルの言葉に少しだけ残念そうに

うつむいた後に先ほど現れたフードの男の事を聞くとフィルは男は魔光石を生成している人間ではないと言い、

「ど、どうしてですか？ あんなフードをかぶって怪しさ全開じゃないですか」

「……だからだ。普通に頭が回る人間なら、あんな目立つ、明らかに不審な格好をするか。どちらかと言えば愉快犯の類だ」

「ま、待ってくださいよ。愉快犯の類って何の目的があるんですか？ あんな風に攻撃……してませんか？」

ティアナは明らかに不審者だと言ってフィルの言葉を否定しようとするが男は口ではフィルを挑発したが攻撃らしい攻撃は何もしていない事に気づき首を傾げると、

「去り際の言葉の通り、顔見せのつもりだったんだろ。魔光石にも興味はないと言っていたしな。それに……」

「それについて他にも何かあったんですか？」

フィルは男の行動にいくつかの疑問があるようで眉間にしわを寄せているとティアナはフィルに聞き返し、

「……ジオの攻撃を防いだ魔法障壁に心当たりがある。少なくともあの魔法障壁を使う人間がわざわざこんなくだらない事をするんだ。厄介な事になる事は確かだ。こんなものよりもっと厄介な事が起きる気がする」

「厄介な事ですか？」

「ああ。敵だろうと味方だろうが……まあ、わざわざ、こんな悪趣味な事をしてくるんだ。持ってくる事は厄介な事以外にないだろ」

フィルの眉間のしわはさらに深くなって行き、面倒な事になりそうだと言うがティアナには見当もつかないため、首を傾げたまま聞くともフィルは面倒だと言いながらも口元は小さく緩んでおり、

「落ち着いたな。俺は戻るぞ」

「え？ で、でも、休憩をしなくても良いんですか？」

「充分に休んだ。ジオ、フィア、何を期待していたか知らんが邪魔だ。後はお前達が付いていてやれ」

目を開くとティアナが話をした事で落ち着いたと判断したよう
でテントの出入り口まで移動すると中の様子をうかがっていた2人
に声をかけた後、外に戻って行き、

「ジ、ジオさん、フィアさん？ な、何をしているんですか！！」

「……まったく、騒がしいな」

ティアナはジオとフィリアの顔を見て顔を真っ赤にして声をあげ
るとテントの中から聞こえるティアナの声にフィルは彼にしては珍
しく優しいな笑みを浮かべる。

第32話

「……どうした？」

「いや、何となくな。お前の結界を超えてくる人間もいるんだ。少しは警戒しようと思つてな」

「ん？ すまん」

フィルが魔光石の分析に戻ってしばらくするとジオがテントから出てきてフィルのために淹れてくれたのか紅茶を渡すとフィルはジオに短い言葉で礼を言い、

「まったく、安心しすぎてな。最近はお前の結界を超えてくる奴もいないから俺の落ち度だ」

「……気にするな。あれほどの魔術師に会える機会なんて滅多にないんだ。実質、こちらには被害もないしな。安い授業料で学んだと思えば良い。それにあまりピリピリしているとあのバカはまだしもなれていないティアナには居づらいだろ」

「そう言つて貰えると助かるんだけど……どうして、そう言つ優しい言葉を本人にかけてやれないかな」

ジオは襲撃が考えられる事なのに警戒を緩めてしまった事を反省しているようで苦笑いを浮かべて頭をかくがフィルはあまり気にしていないのか手を止めて紅茶に口を点けると次に生かせば良いと言い、その言葉の中には急きよ、この場へ連れてくる事になったティアナへの気遣いも含まれており、ジオは口の悪い幼なじみの不器用な優しさに小さくため息を吐くが、

「優しい言葉なんて生きるのになんの役にも立たない。自分の体験から何を学ぶかだろ。それにそう言つのは俺の役割ではない。あいつはこれから多くの事を学ばないといけないんだ。学園で依頼で……戦場だつて例外じゃない。過程はどうであれ、ティアナ自身が選んだ答えだ」

「やれやれ」

フィルはティアナがこれから進むであろう道に彼女が成長して行ける事を願っているようで小さく頬を緩ませて笑うとジオはフィルの表情につられるように苦笑いを浮かべる。

「まあ、なるべく、支えてやれよ。少なくとも呪歌に関してはお前以外にあの子の力になれる人間は学園にはいないんだ」

「……呪歌は発動まで時間がかかる上に詠唱時は無防備になるから効率が悪いからな。わざわざ、学ぶ人間もないものだしな。覚えるのはよっぽどの暇人かモノ好きだ」

「それを覚えたモノ好きが言うなよ」

ジオは学園には呪歌を専攻している人間が少ないと言うとフィルは呪歌は実用的な魔法ではないと言うとジオはそんな呪歌を使えるフィルを見てため息を吐くと、

「あの子の歌には力があるよ。前を向く気にさせてくれる。初めてティアナの村に立ち寄った時の村の状況は最悪だった。何とか魔物との戦域は維持していても逃げ場も無いから戦う力もない人々の心は壊れそうになってしまふ。ティアナの歌はそんな村人の心を最悪の結末に向かわせないように聴く人達に勇気を与えていた」

「……俺達が立ち寄らなければ村人が魔物相手に玉砕していた可能性も高いがな。勇気と無謀は別物だ」

ジオはティアナの呪歌は『治癒の歌』だけではなく、何か特別な力があると思うと言うがフィルの反応は冷たく、

「それでも充分な結果だ。あの子の歌で村を守っていた戦える人間は逃げずに勇気を持って戦えた」

「……それがティアナが売られる理由になったのは皮肉だがな」

「……お前も同じ考えか？ 『自己犠牲』？ 俺も王都の出身だがたまに本当に正しいのかわからなくなるよ。俺は剣士だ。何かあれば1番前で戦う事になる。1番、死の近い場所で……仲間を守るために戦うのは当然だと思うけど、やっぱり、怖いしな」

「……それ以上は言うな。不安は全てを飲み込むぞ」

「そうだな。少なくともそんな日がきた時には逃げるわけにはいか

ないんだ。俺もお前も」

「……ああ」

フィルとジオはいつの日か来るかも知れない戦争そのときの事を思い浮かべるが2人とも確信に触れる事を躊躇したようで言葉を飲み込む。

第33話

「お、おはようございます」

「ああ、おはよう。今、コーヒーの準備をしているから顔を洗ったら、フィルに持って言ってくれるかい？」

「は、はい……あ、あの。フィルさんはあの後」

「1時間くらいは寝てたよ。と言うか寝かせたよ。流石に徹夜をさせるわけにもいかないしね」

ティアナが目を覚ますとジオは既に朝食の準備に取り掛かっており、ティアナに顔を洗った後にフィルにコーヒーを持って行くように頼むとティアナは頷くがフィルの昨日の様子では一睡もしていないのではないかと心配になったようでジオにフィルの事を聞くとジオは苦笑いを浮かべる。

「1時間ですか……」

「まあ、多人数の探索なら人数をかけて警戒もできるけど今回は4人の小規模パーティーだから、仕方がないよ」

「それって、私も起きてられれば良かったんですね？ 何の役にも立てなくてすいません」

ティアナはフィルの健康状態が気になるようで目を伏せるとジオはティアナを気遣うがその言葉でティアナは自分が何をできていない事を申し訳なく思ってしまったようであり、ジオは彼女の様子に困ったように笑うと、

「……仕方ないだろ。初めてなんだから、ジオ、コーヒーをくれ」

「ん。もうちょっと待ってくれ」

「フィ、フィルさん？」

フィルはあまり眠っていないためか眠気が出てきたようでコーヒーを取りに来て、ティアナに声をかけるとジオは1人で落ち込んでいるティアナの相手をするのは大変だったようで助かったと言う表情をしてフィルにティアナを押し付けるようにコーヒーを3人分淹

れ、ティアナはフィルが現れた事に驚きの声をあげるが、

「どうかしたか？」

「い、いえ、おはようございます」

「ああ。おはよう」

フィルはティアナの様子に首を傾げるとティアナは慌てて、フィルに朝の挨拶をするとフィルも挨拶を返し、

「ジオ、ティアナ、あのバカはまだ寝てるのか？ 相変わらず、図太いな」

「まあ、仕方ないだろ。一応はフィアは依頼を受けているわけじゃないからな。依頼のメンバーに追加した事も話してないんだろ？」

「当たり前だ。それくらいも気づけないからバカ女と言われるんだ」

「あ、あの。依頼のメンバーに入れてきているなら教えてあげないから、やる気を出さないんじゃないですか？」

フィルはまだ起きてきてもないフィリアの様子にため息を吐くとジオはフィルの行動に問題があると笑うがフィルはフィリアに問題があると言い切り、フィルの様子にティアナは苦笑いを浮かべる。「知るか。人数が増えると申請できる金が変わるんだ。あのバカの食費くらいは回収しないとイケないだろ。名前を使っただけでポイントが入るんだ。問題はないだろ」

「まあ、確かにフィアは依頼にかかる費用計算とかしないからな。後で請求して文句を言われるよりは楽で良いな」

「そ、そうなんでしょうか？」

フィルは自分の懐は痛くないと言うとジオもフィリアから言われるであろう文句を考えると当然だと同意をするがティアナだけは納得できないように首を傾げており、

「まあ、気にしない方向で、それより、ティアナ、顔を洗ってこなくて良いのかい？」

「へ？ ……し、失礼します！！」

「ん？ ティアナはどうしたんだ？」

「女の子は大変なんだよ」

「……意味がわからんな」

ジオはティアナの様子に苦笑いを浮かべるとティアナに寝起きのままで良いのかと聞くとティアナは顔を真っ赤にして逃げるように行ってしまう、フィルはそんな彼女の様子に首を傾げる。

第34話

「で、フィル、何かわかったわけ？」

「……何時間で終わるなら、誰も苦労はしない」

「……あんたの言い方、1つ1つムカつくのよね」

ティアナとジオが作った朝食を食べているとフィリアが魔光石に付いてわかった事はないかとフィルに聞くがバカじゃないかと言いたげに言うフィリアのこめかみにはピクピクと青筋が浮かんでおり、

「えーと、フィルさん、もう少し、優しくしてあげても良いんじゃないでしょうか？」

「必要がない。だいたい、人に説明をしろと言いながら、聞いていない。理解していない。理解する気もない。そんな奴に時間を割くほど暇ではない」

「確かに、フィルの説明嫌いの半分はフィアのせいな気がするな」

ティアナは2人の様子に苦笑いを浮かべるがフィルはフィリアの理解力に問題があると言うとジオは苦笑いを浮かべながらフィルの言葉に同意すると、

「ちよつと、ジオまで言うの！？ 天才魔術師とか言われているくせに説明1つ、まともにできないこいつが悪いんでしょ！！」

「……フィア、お前、話が難しくなってくると寝るだろ」

「まったく……何で、他の魔法学科の教員からお前に寝るなと話をしておけと言われないといけない」

「えーと」

フィリアは2人の自分の評価に声をあげるがフィルとジオは更なる追い討ちをかけると聞かされたフィリアの授業態度にティアナは顔を引きつらせ、フィリアはそこで初めて自分が悪いと思ったようにフィルとジオから目を逸らす。

「まあ、フィアへの説明は置いて、何かわかった事はあるのか

？」

「……魔光石には関係ない事がわかった」

「……あんた、何を調べてるのよ？」

ジオはフィリアの様子に苦笑いを浮かべるとフィルに何かわかった事はあるのかと聞くとフィルは魔光石に2つの魔法式が組み込まれている事は2人に話しても仕方ないと思っっているようであり、魔光石以外に昨日の夜にわかった事があると言うとフィリアは先ほどの仕返しなのか、フィルに時間を無駄にするなど言いたげな表情をすると、

「あ、あの。フィルさん、2つの魔法式の話はしなくて良いんですか？」

「無駄だ。必要ない」

ティアナは昨日の夜にフィルが話してくれた魔法式の話はしなくて良いのかと聞くがフィルは無駄だと斬り捨て、

「わかったのは、ティアナの呪歌に付いていくつかわかった事があるくらいだ」

「……へ？ ど、どうしてですか？」

「そりゃ、また、突拍子もないところに飛んだな」

フィルはティアナの呪歌に付いてわかった事があると言うとティアナは間の抜けた表情をし、ジオは苦笑いを浮かべると、

「ど、どうしてですか？ な、何があつて、あ、あれ？」

「ティアナ、少し落ち着く」

ティアナは自分が呪歌を使った時にはフィルは特におかしな事をしていなかったため、意味がわからないようで慌てており、フィリアは彼女の様子に苦笑いを浮かべ、

「わかったのは2つ。まずは治癒の呪歌では生命力だけではなく魔力にも効果がある事は言ったが、それ以外にも精霊達にも影響する。後は他の人間の呪歌と合わせる事で何倍もの効果を発揮する。まあ、呪歌を使う人間があまりいないからあまりわかってもし方ない事だけだな」

「……それは別に言わなくても良いだろ」

フィルは昨日の夜にわかったティアナの呪歌の事を話すがあまり
使いようがないと言うとジオはもう少し言葉を選べとため息を吐く。

第35話

「……ティアナ」

「は、はい。あ、あの。それっどう言う事ですか？ 詳しく教えてください」

フィリアはこれ以上、フィルとジオにバカにされたくないよう自分理解できない事をティアナに聞かせようと彼女の名前を小さな声で呼ぶとティアナは慌ててフィルに説明をして欲しいと言うが、

「……フィア、知リたかつたら自分で聞けよ」

「……お前は理解できたんだろ。それなら、どこかへ行つてろ」

「えーと？」

当然、フィルもジオもフィリアの考える事などお見通しのようであり、フィルは聞く気がないならどこかに行けと言うとティアナは3人が改めて、幼なじみだと言う事を実感したようで苦笑いを浮かべると、

「あ、あんた達、私をいじめて楽しいの！！」

「被害妄想は止めろ」

フィリアは自分への態度が悪いと叫ぶがフィルは表情を変える事なく、フィリアの思い過ぎだと言い、

「説明するのはかまわないが、これに関しては言葉の通りでそれ以上もそれ以下もないからな」

「そうなんですか？」

「それに使える呪歌も合さないといけないと考えるとティアナ特有の治癒の呪歌を使える人間は他にいないとなるとあまり、使いようがないしな。小規模パーティーが戦闘時に2人で呪歌を使っていたら」

「……惨劇しか起きないわね」

「確かになあ」

フィルは説明を求められてもこれと言って話す事はないと言うと

あまり使えないと言った理由を話すとジオとフィリアは納得してよ
うで苦笑いを浮かべる。

「まあ、戦闘以外では使える事も出てくるとは思うが現状では何も
言えないな。ティアナの使える呪歌の数が限られているわけだしな」
「そうなんですか？　少しでも役に立てる事ができたかと思っただ
に」

フィルはこれ以上の事は研究室に戻ってからだと言うと朝食を食
べ終えたようでも作業に戻るのか席を立とうとするとティアナは地質
調査と言う依頼に付いてきたものの自分は何も役に立ててないと思
っているようでも肩を落とし、

「気にするな。少なくともお前の呪歌で見えてきているものもある。
それを今は話せる段階ではないだけだ。お前のその力がこれを解決
する手助けになる」

「ほ、本当ですか？　…… フィルさん？」

フィルはティアナの様子に彼女の呪歌がこの事件の手助けになる
と言うとティアナはフィルの言葉に驚きの声をあげるがすでにフィ
ルは歩き始めており、

「…… あいつは返事を待つと言う事はできないの？　珍しく、優し
い言葉をかけたのにどうして自分で台無しにするのよ？」

「まあ、慣れてないってのもあるかも知れないけど、本当にティア
ナの呪歌が事件を解決する力ギを持っているのかも知れないな。何
もないなら、ティアナの呪歌に付いて何かわかって何も言わない
だろうし」

「…… それも否定できないわね。それより、ジオ、あいつが調べ物
をしている間、私達は何をしてれば良いの？　まさか、ただ時間を
潰しているだけとか言わないわよね？」

「何もやることがないなら寝てたら良い」

「…… 本当にフィル頼みの依頼なのね」

フィリアはフィルの背中を見て大きなため息を吐くとジオは苦笑
いを浮かべて、照れ隠しかも知れないと言うがそれよりは本当にテ

イアナの呪歌に何かあるのかも知れないと言い、フィリアはジオに何かやっておく事はないかと聞くがジオはやる事は自分で決めるように言々と自分とフィルの食器を持って行き、フィリアは顔を引きつらせる。

第36話

「ティアナ、何してるの？」

「えーと、特にやる事もないのでどうしようかと、ただ、植物が枯れていないところには食べられる植物はあるのでそれを集めようと思ってます。夕食も朝食も買い物をしてきたのがジオさんとフィルさんだったからか……がつつりお肉でしたし」

「……まあ、男共だし、仕方ないわよね」

「美味しかったですよ。凄く。で、でも、お野菜を取らないという問題が現状ではいつ帰れるかわからないですし」

フィリアは朝食の後片づけを終えると周りをきょろきょろと見ているティアナに声をかけるとティアナはジオがメインで作った料理に少し不満なように苦笑いを浮かべるとフィリアも同じ事は思っていたようだが彼女は料理ができないため、強く言えないように苦笑いを浮かべる。

「それで、少しこの辺を探索してこようと思うんですけど」

「……1人で行かない。いくらなんでも1人で歩きまわると危ないでしょ」

ティアナは平原を探索しに行こうとするがフィリアは戦術を持っていないティアナを1人にするわけにはいかないとため息を吐くと、

「フィル、ジオ、私とティアナはちょっとこの辺を見てくるわ」

「ん。フィア、あまり遠くに行くなよ」

「わかってるって」

フィリアはフィルとジオに声をかけるとジオはフィリアの実力なら、この辺にいる肉食の野生動物くらいならどうにかなると思っているようであり深く考える事なく返事をするが、

「……ティアナ、これを持って行け」

「これ、何ですか？」

「……お守り見たいなものか？」

「……フィル、あんた、自分で渡して置いてなんで疑問形なのよ？」

フィルはティアナに魔法のアイテムなのか小さな首飾りを渡すと彼女は首をかしげて聞き返すとフィルは研究が忙しいようで彼女の言葉は耳には残らなかったようであり、フィリアはフィルの言葉にため息を吐くと、

「ん？ まあ、ティアナの安全を守るために使えるだろう。効果は安定しなくてな。何もないよりはマシだろ」

「……逆に不安になるようなものを渡さないでよ」

「ま、まあ。実際に私は戦えないので身を守るものは嬉しいです。ありがとうございます」

フィルは作業の手を休める事なく、首飾りについて簡単な説明をするがその説明は曖昧であり、フィリアは大きく肩を落とすがティアナはフィルが渡してくれたものだから何か意味があると思ったように笑顔でフィルに頭を下げ、

「えーと、フィルさん、似合いますかね？」

「ん？ 似合うんじゃないのか？」

「……そうですか」

首飾りを首に付けてフィルに似合うかと聞くがフィルの反応は鈍く、ティアナはフィルの反応の薄さがさびしいようで肩を落とし、

「……鈍いわ。この男はどうしようもないわね」

「ま、まあ、仕方ないだろ。それより、フィア、それなりに準備はして行けよ。フィルがそれなりに結界魔法は使っているけどな。昼間は視界がはつきりしている分、魔力消費の関係で範囲は狭くなっているからな。遠くに行くなよ」

「わかってるわよ。1人ならまだしもティアナがいるのに無茶はしないわ」

「はい」

フィリアはお世辞の1つも言えない鈍い幼なじみにため息を吐くとジオは苦笑いを浮かべながらティアナとフィリアにあまり遠くに

行かないように言い、2人は返事をする^と並んで歩きだす。

第37話

「えーと、この葉と……この植物の根は食べられるし、後、この実も甘くて美味しいから一手間加えればデザートになるよね。フィルさんは考え事して疲れてるだろうから、甘いデザートでも食べれば考えもまとまるかも知れないし」

「ティアナ、詳しいのね」

食料になる植物を採取しているティアナの姿は楽しそうであり、フィリアは出会ってから初めて見る彼女の生き生きとした様子に苦笑いを浮かべると、

「す、すいません！？ 私1人ではしゃいでしまつて」

「いや、別にかまわないわよ。ティアナも知らないところにきて気を張っていたんだろーし、楽しんでくれてるなら……ん？ フィル、実はティアナが不安なのに気づいててティアナを連れてきた？ ないわ。あり得ないわ。あいつにそんな気づかいは存在しない。そんな事があつたら季節が反転するわ」

ティアナは慌ててフィリアに謝るが、フィリアは故郷を出て知り合いがいなくて生活が始めたティアナのなかにある不安が解消できれば良いと思つたようだがフィルがティアナを依頼のメンバーに入れたのは彼女を元気づけるためと言つ考えが頭をよぎるが直ぐにその考えはあり得ないと首を振り、

「フィアさん、どうかしたんですか？」

「何でもない。それより、これくらいにしない？ あまり放れるとフィルからの魔法の援護もなくなるだろうし、日も高くなってきたからそろそろお昼も近いしね」

「そうですね。戻りましょうか。お昼ご飯の準備もありますし……えーと、フィアさん、そんなに遠くまでは来てないですよね？」

「何、どうかしたの？ ……あれ？ テントは？」

ティアナはフィリアが首を振っている様子に首を傾げると彼女は

何もないと言い、2人はテントに戻ろうとするがティアナが振り返ると先ほどまであったはずのテントがなくなっており、2人は状況が理解できないように顔を引きつらせる。

「フィ、フィアさん、どう言う事ですか？」

「わ、私だってわからないわよ。だってさっきまで、テントは見えてたでしょ。それなのに少し話をしている間に無くなる？ そんなわけがないでしょ？ ……そ、そうよ。あの2人がいたずらを」

「ジオさんはまだしも、フィルさんがそんな事をすると思いますか？」

「……絶対にあり得ないわね」

ティアナはフィリアに何があったのかと聞くが、当然、フィリアもわかるわけはなく、残っていたフィルとジオの2人が何か悪戯をしていると思ったようだがティアナはフィルがそんな事はしないと、言うところフィリアも彼女と同じ答えに行きついたように頷くと、

「だとしたら、これはどう言う状況なの？ フィルの魔法？ だとしてもなんの意味があつて？」

「あれ？ ちょっと待ってください。昨日、何か聞いたような？」

……あ？ フィルさんが使っている結界は同時に幻術で視界から認識できなくするって？ あの狼さんが私達に襲い掛かってこなかったのもそのためだと思います」

「えーと、それって、幻術を破れなければテントにたどり着けないって意味？」

「た、たぶんですけど」

フィリアはフィルの魔法に原因があるのではないかと言うとティアナは昨日の夜に現れたフードの男がフィルの魔法について話していた事を思い出し、フィリアはティアナの言葉に顔を引きつらせ、ティアナは苦笑いを浮かべる。

第38話

「じよ、冗談じゃないわよ。すぐそこに2人がいるかも知れないのに私達はフィルとジオに気付かないって事？ それってかなり間抜けじゃないの？」

「で、ですよ。でも、2人からは見えるなら、フィルさんとジオさんが気づいてくれれば……ジオさんって何をしてましたっけ？」

「襲撃の後から私達が起きるまで見張りをしていたんだし……寝てるかも」

フィリアは今の状況がかなり恥ずかしい状況であり、大きく肩を落とすとティアナははぐれたわけではないため、テントのそばにいる2人が気づいてくれればと考えるがフィルは研究をしている限りは気付かないと思い、フィリアにジオがどうしていたかと聞くフィリアは眉間にしわを寄せて寝ているかも知れないと言う。

「そうですね……あ、あの。そう言えば、これってなんだと思います？」

「フィルがくれた首飾り？ ……あのバカ、渡すだけ渡して、使い方とか何1つも言わなかったわよね？」

ティアナは困ったように笑うとフィルから渡された首飾りは魔法の品だと言う事を思い出してフィリアに聞くとフィリアは首飾りを覗き込むが、フィルからはこれと言った事を言われなかったため、使い方がわからないと言うと、

「他に何かなかったかな？ 後はフィルさんから習った呪歌だけどあれは精霊力に反応するだけだし、歌ってみますか？」

「……フィルの話を聞いていたら、それをする状況は悪くなりそうなのがするんだけど」

ティアナは幻術がかけられていると言う事で何かできないかと考えるが彼女にできる事は限られており、呪歌を使ってみるかと言うとフィリアはフィルから聞いた話を思い出してティアナを止め、

「とりあえずは戻ろうか。近くまで行けばいくらなんでも気づくだろうし」

「そうですね」

「ちよつと、ティアナ、どっちに行くのよ。私達がきたのはあつちでしょ」

「何を言ってるんですか。私達はこつちからきたんですよ」

「……」

フィリアはきた方向に戻ろうかと言うが2人はお互いに違う方向を指差し、2人は考えたくない事がよぎったようで顔を見合わせる。

「……迷った？ 直ぐそばにフィルもジオもいるはずなのに」

「ど、どうしましょうか？」

「待つて。まずは落ち着かないとこの前に居たのはそこでしょ」

「はい。そこに掘った穴がありますし、でも、いくつか前はわかりませんが、途中までしか戻れないですよ」

ティアナは自分達の状況に大きく肩を落とすと2人で植物の採取先でわかる場所をたどって行こうとするがあまり進む事は出来ず、直ぐに行き詰ってしまい、

「……間抜けすぎるわ」

「そ、そうですね」

「……お前らはいったい何をしているんだ？」

2人はテントに戻ることができないため、自分達の姿の間抜けさにため息を吐くと、2人の様子に気づいたようでフィルが2人に声をかけ、

「フィ、フィルさん？ よ、良かったです」

「フィル、私はあんたに文句が言いたい事がたくさんあるんだけど良いかな？」

「……意味がわからないんだが、とりあえずは落ち着け」

ティアナはフィルの姿に安心したような表情をし、対照的にフィリアは眉間にしわを寄せるがフィルは意味がわからないと言う。

第39話

「意味がわからないじゃないわよ！！　こんなわけのわからない魔法を使ってるならちゃんと説明しなさいよ！！」

「説明？　ジオが遠くに行くなど言っただけだ」

「そうじゃないでしょ！！　どんな効果があるからとか説明をなさいつて言ってるのよ！！」

「フィア、何度も言わせるな。お前に魔法の説明をするのは無駄な行為でしかない」

フィルの態度がフィリアは頭にきたようで感情に任せて彼を怒鳴りつけるがフィルは必要な説明は済ませていると言い、その言葉が彼女の怒りに更なる油を注ぐ事になるがフィリアとは正反対でフィルの反応は薄く、

「無駄？　無駄ってどう言う事よ！！」

「……そのままだ。何より、このやり取りが無駄だ。ティアナ、バカは置いて戻るぞ。ジオが昼食の準備を手伝って欲しいと言っているんだ」

「えーと、フィルさん、本当に良いんですか？」

フィリアの怒りは限界にきたようで大声をあげて叫ぶとフィルは相手をする気もないようでティアナについて来いと言い、歩き始めるがティアナはフィリアの様子に苦笑いを浮かべながらフィルに聞く。

「良いも悪いもないだろ。だいたい、このやり取りはこいつが俺の依頼についてくると毎回、行っているやり取りだ。基本的にフィアは魔法に関して学習意欲が欠如している必要でも面白くないから、自分には必要ないからと言って覚えようとしな。言わば、自業自得だ」

「……」

「と言う事だ。ここで無駄な時間を過ごしている気なら、俺は戻る

ぞ」

「待ちなさい。あんた、許さないわ。いくらなんでも、バカにしすぎよ！！ あんたなんか魔法がなければ何もできない。女の私の足元にも及ばない貧弱なモヤシ男のくせに！！」

「……」

フィルはフィリアに怒鳴りつけられる覚えはないと言い、1人で先を進もうとすると、

フィリアはフィルを挑発し、その一言で先ほどまで冷静だったフィルの眉間が小さく歪み、

「フィアさん、落ち着いてください！？ それは今は関係ありません」

「ティアナ、止めないで、こいつが私をバカにしたのが悪いのよ。そうよ。そうにきまつて」

「るか」

「いだ！？ ジオ、あんた、何をするのよ！！」

ティアナはフィリアを押さえて落ち着くように言うがフィリアの気は治まらないようでフィルを悪者にして自分を正当化しようとした時、結界の中にもフィリアの無様な声が響いていたようで呆れ顔したジオがフィリアの言葉を遮るように彼女の頭に拳骨を落とすとフィリアの怒りはジオに向けられる。

「何をするじゃないだろ。言い方に問題はあるがフィルの言い分は確かだろ。どの種類の魔法が使えるかは得手不得手があるが基礎を知れば一般的な魔法の対処方は考えられるそれを疎かにしているのはお前自身だろ。だいたい、文句があるなら、俺とフィルの依頼に付いてくるな」

「……」

「……お前は子供^{ガキ}か」

ジオはフィリアの様子に何度も同じ事を言わせるなと言うがフィリアは自分は悪くないと言いたげにジオから目を逸らし、ジオはフィリアの様子に大きく肩を落とすと、

「えーと」

「……なんだ？」

「何でもないです。気にしないでください。ジオさん、それくらいにしましょう。フィアさんも戻りましょう」

ティアナは今のフィリアの様子が体力のなさをバカにされてフィリアに向かって言ったフィルの姿と重なったように苦笑いを浮かべながらフィルに視線を向けるがフィルは彼女の視線の意味がわからないように聞き返すとティアナはくすりと笑うとジオとフィリアに間に割って入る。

第40話

「うーん。美味しいわ」

「……甘い」

ティアナの説得で一先ず、フィリアは落ち着き、ティアナが集めた材料で作ったデザートをフィリアは食べて機嫌が良くなっているようだがフィルはあまり甘い物が得意ではないのか眉間にしわを寄せている。

「フィルさん、美味しくないですか？」

「……いや、そう言うわけではないんだが、あまり甘いものはな」

「そうなんですか」

ティアナはフィルの様子に不安そうな表情で聞くとフィルはデザートを作ってくれたティアナに申し訳ないとは思っているようではあり、少しだけ見えたフィルの優しさにティアナは表情を緩ませると、

「そうか。フィアは気にしないで良いがティアナの事を考えるとこう言うのも必要だな」

「ジオ、私は気にしなくても良いって言うのはどう言う事よ？」

「そのままだ。だいたい、料理の1つできない人間に文句を言う資格はない」

ジオはあまり女性と依頼はしないように料理のバランスなどは気にしていなかったと言うとフィリアはジオの言葉に眉間にしわを寄せるがジオは悔しかったら料理の1つでもしてみろと言い、フィリアの眉間のしわはより深くくつきりと現れ、

「あ、あの。ケンカは止めましょうよ」

「……ほっておけ。ジオの言う事が正しい。依頼でキャンプを張る事もあるんだ。今回のように料理のできる人間を入れる事は長期の依頼を受ける上で必要な事だ。フィアはできない事を疎かにしすぎだ」

今にもジオにつかみかかりそうなフィリアの様子にティアナは2人の間に割って入ろうとするがフィルはティアナを止めてジオが正しいと言う。

「フィル、あんたもなんなのよ。あんた達、私に対して口が悪すぎよ!!」

「……何度も言わせるな。依頼を受ける上で必要な事だと言っているだろ。長期の依頼になって料理のできるメンバーがいらない依頼は最悪だ」

「確かに。フィル以外と初めて組んだ時が誰もできなかったから酷かったよな。保存食のみ。味気も何もない。そこから、覚えたわけだしな」

ティアナはフィルの言葉に怒りの矛先はフィルに向かうがフィルは長期の依頼で料理ができないメンバーばかりの事を思い出したように大きなため息を吐くとジオも経験済みのようで大きく頷き、

「あ、あの。今の会話の流れだとフィルさんはお料理ができるんですか?」

「ああ。1人暮らしも長いからな。何の問題もなくできるが俺は基本的に調査依頼がメインになる事が多いからな。調査に時間を割くため、依頼中は最悪の事態でしかない」

ティアナは会話からフィルは料理ができるとわかったようだがあまり料理をするように見えないため、驚きの表情を隠せないようだがフィルは依頼中には料理をする事はないと言うとティアナが作ったデザート最後の1口を口の中に放り込み、

「俺は作業に戻るから、片づけは任せるぞ。フィア、やる事がないならティアナに料理でもならっている。ここには時間を潰すものがないからな。逃げられないだろ」

「……」

立ち上がるとフィリアにティアナに料理を習うように言う彼女が悔しそうにフィルを睨みつけるがフィルは気にする事はない。

第41話

「……これは食えるのか？」

「ジオ、うつさいわよ!!」

「フィ、フィアさん!? ダ、ダメです!? 包丁は人に向けちゃダメです!？」

日が落ち始め、辺りが暗くなってきた頃、フィリアはフィルとジオにバカにされたのが面白くなかったようでティアナに頼んで夕飯の準備を行っているとジオはフィリアが切った食材を見て眉間にしわを寄せるとティアナは包丁の先をジオの鼻先に向けて吠え、ティアナはフィリアの行動を慌てて止める。

「ジオさんも、邪魔をしないでください。それに味付けは問題ないです。美味しくてきている……はずです」

「ティアナ、大丈夫なら、どうして目を逸らすのよ!？」

「まあ、あまり使うのが難しい調味料は持ってきてないから、おかしな味付けにはならないと思うけどな。それより、料理って言うのは目でも楽しむ部分もあってな」

ティアナはジオがいるとフィリアがキレてジオに包丁で斬りかかりそうなので、ジオに離れていて欲しいと言うが彼女自身もフィリアの料理が酷く不安なようで言葉の途中でフィリアから視線を逸らし、フィリアは彼女の行動に声をあげるがジオは当然の結果だと言いたげに大きく頷いた時、

「えっ!? な、何? 何ですか!？」

「……フィルが何かしたみたいだな。何かわかったみたいだな」

暗くなりかけていたはずの辺りが一瞬だけ、昼間のように明るくなり、ティアナは何があったかわからないようで驚きの声をあげるとジオは冷静に明るくなった方向にはフィルがいたため、フィルが魔光石について解決の手がかりが見つかったのではないかと言い、「行ってみる?」

「そうですね。わかったなら、協力できる事もあるでしょうし。ジオさん、行きましょう」

「ティアナはね。基本的に魔法的なものだ俺もファイアも役立たずだからね」

フィリアは料理でジオにからかわれるよりはフィルの方が面白いかと思ったようであり、直ぐに飛び出しに行き出しそうであり、ティアナはそんな彼女の様子に苦笑いを浮かべるが彼女自身も魔光石が引き起こしている事件には考える事があるため、火にかけていた鍋を下ろして、ジオにフィルのところに行こうと言うとジオは2人の考えている事が理解できているため苦笑いを浮かべると、

「行こうか」

「賛成なら、直ぐに答えなさいよ。めんどくさいわね」

「……別にファイアはフィルの邪魔になる可能性の方が圧倒的に高いからここで料理をしても良いんだぞ。さつきも言った通り、魔法関係は俺もお前も役立たずなんだからな」

「ジオ、ティアナ、何、ゆっくりしているのよ。私は先に行くわよ」

ジオは2人にフィルのところまで行こうと確認するとフィリアはジオを面倒くさいと言い、その言葉にジオは彼女にここに残れと言うとフィリアは1人、全力で駆け出しに行き、

「ファイアさん、そんなにお料理が嫌なんですかね？」

「そうなんだろ。それより、行こうか」

「あれ？ 剣ですか？」

「まあ、何かわかった時つて油断する事があるからね。警戒くらいはしておかないとフィルは油断なんかしないだろうけど」

「……そうですね」

ティアナはフィリアの様子に苦笑いを浮かべる隣りでジオはすぐそばに置いておいた自分の剣とファイアが置いて行った彼女の太剣を持つとティアナは意外そうな表情をするがジオは注意する事は必要だと苦笑いを浮かべ、ティアナは昨晚の事もあるため大きく頷く。

第42話

「……なるほど、やはりトラップはかけてあったか。となると3つの複合系の魔法か。2つを解除すると3つ目が起動するわけか？」

精霊を解放する前に幻術を潰さなければ解放はできないし、それを行うと3つ目の魔法が起動する厄介だな。トラップの魔法に関しては全てが同じとは限らないわけだしな」

フィルは魔光石に閉じ込められていた精霊達を解放したがその瞬間に強烈な光とともに魔光石は爆発を起こしたようでフィルは爆発に巻き込まれて血まみれになった右手を眺めながら厄介だとつぶやくと、

「ちょ、ちょっと、フィル、あんた、右手をどうしたのよ!？」

「ん？ 気にするな。魔光石の精霊を解放してみたんだが、トラップの魔法式が組み込まれていたみたいでな。爆発しただけだ。反応が少し遅れたから、防御魔法が右手まで間に合わなかったただけだ。この威力だと……」

先にフィルの方に向かって駆け出したフィリアは血まみれになったフィルの右手を見て驚きの声を上げてフィルに駆け寄るが当の本人のフィルは冷静に右手の損傷具合を確認しており、爆発に対処するための防御魔法について考え始め出し、

「あんたは何をしているのよ!？ 先にやるべきは治療でしょ!!」

ティアナ、急いで!」

「フィアさん、どうかしたんで……フィ、フィルさん、手、手が」

「……うるさい」

フィリアは治癒魔法を使えないため、後ろからジオとともに歩いてきているティアナに急ぐように言っているとフィリアの様子にティアナとジオは駆け足で2人に駆け寄ってくるとティアナはフィルの腕のケガを見て顔を青くするがフィルは気にする様子はなく、

「フィル、お前はもう少し気にしろ。ティアナ、一先ずは治癒を頼

むよ」

「は、はい……」

ジオはフィルの様子になれているようで、落ち着いた様子でティアナに呪歌で治療して欲しいと言い、ティアナは呪歌を歌い出そうとするがフィルの腕の状況に落ち着いて呪歌を歌えないようであり、治癒の効果は表れる気配すら見えない上に彼女の顔色は青白くなっている。

「フィル、とりあえず、治癒魔法で腕を回復させる。このままだとティアナが倒れる」

「ん？ どうせ、傷は癒すんだ。せつだから、後、2、3個、試してみたい事があるんだが」

「良いわけがないでしょ！！」

「……まったくだ」

ジオはこのままではティアナの方が参ってしまうと思ったようにフィルに治療を先に済ませるように言うがフィルは他にも魔光石にかかっているトラップの魔法について分析をしたいと言い、血まみれの右手を他の魔光石へと伸ばそうとするがフィリアはフィルの右腕をつかみ、ジオはフィルの行動に呆れたようなため息を吐くと、

「……まったく、どうせ、治療はするんだ。非効率だ」

「お前はそうかも知れないが、周りはそう思えないんだ。爆発が起きた事は理解したが、この状況で対処できるとは思えないぞ。せめて、何があつてこうなつたかくらいは説明しろ」

「……面倒だな」

「面倒でもよ」

フィルはどうせ、またケガをするならこのままでも問題ないと言うがジオとフィリアがそれを許すわけもなくフィルは本当に面倒だとは思っていないようであり、眉間にしわを寄せる。

第43話（前書き）

総合評価が200ポイントになりました。

ありがとうございます。

引き続き、がんばりますのでよろしくお願いします。

第43話

「で、何があっただ？」

「ん？ 魔光石には複数の魔法式が組み込まれていたんだが、1つ、幻術の類で形のない魔光石を認識させる魔法式、2つ、精霊達を呼び寄せてその場に固定する魔法式、3つ、それを解除した時に解除した人間への攻撃を行う攻撃系の魔法式」

フィルは治癒魔法を使用し、右腕の治療を行うとジオはフィルの腕が血まみれになっていた理由を聞くとフィルは右腕の状況を確認しているのか軽く右腕を動かしながら、簡単に魔光石の中にあつた3種類の魔法式の話をする、

「……ねえ。それを全部解除して行かないといけないわけ？ 全部、解除したらこの辺、ただの荒野よ」

「確かに。爆発が起きた場所はこれだしな。フィル、お前、よく無事だったな」

「無事？ 何を言っている。右腕が使い物にならなくなっていただろ」

「……使い物にならないって割にはずいぶん冷静だったわよね？」
フィリアは爆発の規模を考えると被害は尋常ではないと言い、ジオも右腕のケガだけで他は無事そうなフィルを見て苦笑いを浮かべるとフィルは無事ではなかったと言うがフィリアは先ほどのフィルの様子に大きく肩を落とし、

「慌てても仕方ないだろ。右腕が爆発に巻き込まれたのは事実なんだから。それより、ティアナ、お前はいつまで、呆けているつもりだ？ 最初から何でもないと言っているだろう。そこで真っ青になっているなら、テントに戻っている」

「で、ですけど、あんなに血がたくさん出て……」

「何を言っている？ 骨まで……」

フィルはジオとフィリアからティアナをどうにかしないと研究を

先に進ませないと言われたようでティアナに顔をあげると言うがティアナは血まみれになっていたフィルの右腕の様子が頭から離れないようであり、顔を真つ青にしたまま何かを言おうとするがフィルは冷静な口調で筋肉がえぐられ骨も出ていた事を言おうとするがフィルはフィルの口を塞ぐ。

「……なんだ？」

「何だ？　じゃないわよ。さらに追い打ちをかけてどうするのよ？」

「……あのな。これは起きない事ではない。依頼を受ければ魔物や山賊等との戦闘になる事だつてある。その時にケガ1つ、負わずに勝てると思うのか？　戦う力がないにしてもやらなければいけない事もある。依頼だけではないだろ。誰かが何かで大けがをした時に対処できる人間がティアナだけの時に顔を真つ青にしていればその後は決まっているんだ。せつかく、運命に抗える能力があるのに何もしないでいるつもりか？」

「だとしても、言い方つてもんがあるでしょ？」

フィルはフィリアの行動に首を傾げるとフィリアはフィルヘティアナに優しい言葉の1つでもかけてやるように言うが、フィルは表情を変える事なく、ティアナはやるべき事を放棄したと言い、フィリアはフィルの言葉に彼の胸倉をつかむが、

「……口先だけの言葉を吐いている内に命は失われるぞ。フィア、お前も見ただ事があるはずだ。ティアナも村で見ているはずだ。命が奪われて行く瞬間を、助けを求める声から、耳を塞いでいるだけでは結果は何も変わらない。学園で学ぶ強さは所詮は付け焼刃の紛い物だ。それも身につけるには1つ1つ、現実を受け入れて行かないといけない時もある。すぐに覚えれるとは思われないが覚えておけ」

「……は、はい」

フィルはフィリアの腕を外すと現実のみを見続けて生きている彼の経験からくる話をするティアナはフィルとジオと会った時の村の状況を思い出したようで顔青くしながらも目をそらしてはいけな
いと思つたようでフィルの顔を見据えて頷き、彼女の様子にフィル

は小さく表情を緩ませる。

第44話

「さてと、一先ずは爆発系のトラップが組み込まれている魔光石くらは解除するか」

「……フィル、最初に聞いておくけど、全部、爆発させるとか言わないわよね？ それ以前に、その口ぶりとかさっきの後、2、3個、確認したいって事はトラップは複数の種類があるって事？」

「……バカのくせに気づいたか」

「フィル、今、私をバカって言ったわね！！」

フィルは立ち上がり、魔光石の精霊達を解放すると言うがフィリアはフィルが爆発を起こして精霊達を解放するのかと疑いながらも先ほどのフィルの言葉が気になっていたようでトラップの魔法式は複数あるのかと聞き、フィルはフィリアの言葉に少しだけ感心したように頷くが明らかにフィリアの事をバカにしており、彼女はフィルにつかみかかるうとするが、

「フィリアも落ち着け。それで、フィル、トラップは何種類あるんだ？」

「……2つの魔法式に隠れていてな。判別はしづらいが、たぶん、2つ。1つは爆発系だったがもう1つは確認してみないとわからん。まあ、予想はできている」

ジオはフィリアの首をつかむとフィルにトラップの魔法式は何種類あるかと聞くとフィルは現状では推測でしかないと言いながらも2つあると言い、

「あ、あの。それじゃあ、爆発系は解除するとは言ってましたけど、どうするんですか？ 全部、爆発させたら、大変な事になるんじゃないですか？」

「……当たり前だ。そんな事をするほど俺はヒマじゃない。さっき、トラップにかかったのはトラップの威力と種類、魔法式の確認だ。魔法式の確認ができれば、その魔法式を無力化できる魔法式が作れ

るだろ」

「そうなんですか？ それなら、安心ですね」

「……普通、魔法式って簡単にはできないから」

ティアナはフィルがまた、ケガをしながら魔光石から精霊達を解放して行くと思ったようで不安そうな表情で聞くとフィルは爆発を誘発させる以外に考えが浮かばないティアナの様子に眉間にしわを寄せながら答えるとティアナは安心したようで表情をほころばせるがフィリアはフィルが改めて魔法に関しては天才的な才能を持っていると思い知ったようで苦笑いを浮かべる。

「フィル、とりあえずは爆発系を解除するのに、俺達は手伝える事はあるのか？」

「ジオとフィアはない。ティアナ、手伝ってくれ」

「わ、私ですか！？ 私は特に手伝えるような事はないですよ！？」

ジオは解決の糸口が見えてきた調査依頼に何か手伝える事はないかと聞くとフィルはティアナに手伝って欲しい事があると言うとティアナは自分は役に立てる事はないと思っているようで声を裏返し、
「……できる事があるから、協力を仰いでいるんだろ」

「そ、そうですね？」

「そう言うなら、何をするか説明しなさいよ。あんたは言葉が足りないって言ってるでしょ」

「それをこれから説明するんだろ。俺は説明する前に無理と言われたんだ。言葉が足りてない以前の問題だ」

フィルはティアナの返事にため息を吐くとティアナは確かにそうだと思ったようできょとした表情をし、フィリアはフィルの説明の仕方が悪いと言うとフィルはこれから行う魔光石から精霊達を解放する手順の説明をと言う。

第45話

「……それで、始めて良いのか？」

「は、はい。お願いします」

「……なんか、納得がいかないわ」

「まあ、そう言うな」

フィルは不機嫌そうな表情のまま、魔光石から精霊達を解放する手順の説明に移って良いかと聞くとティアナは自分が必要とされているために気合いを入れていいのか拳を握り締めて返事をする隣でフィリアは納得がいかなさそうな表情をしており、ジオは彼女の様子に苦笑いを浮かべると、

「まず、最初にやらなければいけないのは魔光石の選別、爆発をする魔法式が組み込まれたものとそれ以外のものに分ける」

「……それって、膨大な量でしょ？ この人数でできるの？」

「……誰が1つずつやると言った。それなら、俺1人でやる」

「……」

「ティアナ、昨日の夜に使って見せた呪歌はわかるな？」

フィルが話し始めると直ぐにフィリアは膨大すぎると言い、大きなため息を吐くが直ぐにフィルは説明の邪魔をするなどといったげにため息を吐き、フィリアはフィルの様子にこめかみに浮かんだ青筋がぴくぴくと動くがフィルは気にする事なく、ティアナに呪歌の事を聞く。

「えーと、確か……魔光石の魔力を活性化させた呪歌ですよね？」

あの光景は凄く素敵でした」

「……素敵かどうかは一先ず、置いておいてくれ。それに特定の魔法式を乗せて爆発の魔法式が組み込まれたものにマーキングする」

ティアナはフィルと一緒に呪歌を使い、夜空の下で魔光石が輝きだした幻想的な光景を思い出したようで目を輝かせるがフィルはその言葉を斬り捨てると呪歌を使用して魔光石の選別を行うと言い、

「ずいぶん和大掛かりだな」

「ああ、俺の呪歌だけではたいした範囲では使えないがティアナの呪歌と併せればかなりの範囲を1度で済ませられる。一先ずはそれで選別ができるかを試す。ダメだった場合は次の手を考える」

ジオは規模の大きい魔法を使う事になったため、大変そうだとため息を吐くがフィルはまだ実験段階でしかないと言い切ると、

「わ、わかりました。わ、私、頑張ります。フィルさんの迷惑にならないように」

「……頑張るのはかまわないが気負いすぎだ。落ち着くと言う事を覚えろ。呪歌も魔法も魔術師の精神状態に大きく作用するんだ。魔術師にとって必要なのは冷静でいる事、どんな状況になっても平静を保ち、冷静に状況の分析をする事、冷静な分析のできない魔術師が居れば、仲間の足を引っ張る事になる。1人でできないと思ったら、仲間に助けを求めろ」

ティアナは先ほどフィルのケガの治療で役に立たなかった事で気負いがあるようであり、やけに気合いが入っているように見え、フィルはそんな彼女に魔術師としての心構えを教え、

「……フィルが気を使っているわ。珍しい」

「……フィア、茶化すな。ティアナ、フィルの言う通りだ。俺とフィアはフィルを信頼してここにいる」

「まあ、口と性格は悪いけど、実力は認めてるわよ」

フィリアはフィルの言葉に驚いたような表情をするとジオはため息を吐いて彼女を止めると真つすぐとティアナを見て、自分とフィリアはフィルを信頼していると言うとフィリアは照れ臭いのか悪態を吐くが、

「同じようにティアナにも俺達を信じて欲しい。呪歌の使用中は無防備になると思う。その間は何があっても俺とフィアが必ず、ティアナとフィルを守るから」

「は、はい。お願いします」

ジオは魔術師2人を守るのは戦士である自分とフィリアの仕事だ

と言い、ティアナはジオの言葉に大きく頷き、

「俺とティアナの魔力量から考えると今日は選別だけで終わりにな
らと思うがこっちの動きは見られている可能性もあるからな」

「わかってるわよ。これを企んだ本人が出てきてくれるなら、そっ
ちの方が都合がいいでしょ。フルぼっこにして解決方法を吐かせて
やれば良いんだから」

「……男らしいな」

「そうだな」

「えーと？」

フィルはこの事件を起こしている人間が現れる可能性を示唆する
とフィリアはそっちの方が都合が良いと言い、彼女の言葉にフィル
とジオはため息を吐き、ティアナは苦笑いを浮かべる。

第46話

「……始めるぞ」

「はい」

フィルはティアナに声をかけるとティアナは大きく頷いた後に深呼吸をすると、2人は呪歌の詠唱を始め、魔光石が輝きだし、暗くなったグラン大平原は魔光石の輝きで幻想的な光景を映し出し始める。

「へえ、キレイね……ねえ、ジオ、昨日はこの光景をあの2人で見たわけよね？ 何か進展とかなかったわけ？」

「……あると思うか？ 今までだって研究室で2人の時間があつたのに何も変わらないんだぞ」

「それもそうね」

フィリアは幻想的の光景に昨日の夜のフィルとティアナの姿を思い浮かべたようで何か進展があつたのかとジオを突くがジオはそんな事はないと言い切り、フィリアは納得したようで大きく頷いた時、

「あれ？ フィルの呪歌が変わった？」

「そうだな」

フィルは呪歌に込めている魔法式を変更したようであり、光輝いていた魔光石の光が様々な色に輝き始める。

「2種類じゃないじゃない。何か、いろんな色の光を放ってるわよ」

「大きく分けてと言ってただろ。少なからず、俺達にはわからない何かがあるんだろ」

「そうなの？ あんな事を言っというて何もわかってないんじゃないの？」

様々に光輝く魔光石にフィリアはフィルがトラップの魔法式は2種類と言っていたはずなのに様々な色に輝いている魔光石にため息を吐くとジオはフィルにだけわかるものがあると言うとフィリアは首を傾げるが、

「ん？ 次の段階に移ったみたいだぞ」

「ホントみたいね」

魔光石の輝きを遮るような球体が現れ、次々と魔光石を飲み込んで行き、フィルが選別している条件は理解できないようだ。だがジオとフィリアはその様子に苦笑いを浮かべ、魔光石の輝きの数が半分に減った時、

「……ティアナ、ここまでだ」

「は、はい」

「フィル、これはどうやって分けたの？ 色で分けたわけ？ でも、同じ色はなかったけど」

フィルは今日はここまでだと言って呪歌を遮り、ティアナは大きく返事をする。フィリアはフィルが何を基準に魔光石を集めたかと聞く。

「何？ 何と言われるとトラップの魔法式としか言う事はないぞ。」

「だいたい、何度も同じ事を言わせるな」

「……それをわかるように言いなさいって言うてるのよ」

「このやり取りもなれてきましたね？」

「いつもの事だからな」

フィルはフィリアの言葉に何故、何度も同じ事を説明しなければいけないと言いたげに眉間にしわを寄せるとフィリアはフィルの説明はわかりにくいと言いたげに睨み返し、その姿にティアナとジオは苦笑いを浮かべて、

「フィル、今日はここまでなんだろ。それなら、休まないといけな
いだろ。休まないと魔力は回復しないわけだし」

「そうですね。昨日もほとんど眠ってないんですから」

「いや、せつかくだから……」

昨日からあまり眠っていないフィルの体調を心配しているようで、フィルに休むように言うがフィルはもう少しやる事があると言うと目をつぶり、自分の中に残っている魔力の現存量を確認すると魔法の詠唱を始め出し、その詠唱に反応するように魔光石を飲み込んだ

球体がはじけ飛んで行く。

第47話

「フィルさん、何をしたんですか？」

「トラップを誘爆させたただけだ」

「……あんた、どうして、何も言わずに簡単に終わらせるのよ」

魔光石を飲み込んだ球体がはじけ飛んで行く様子にティアナは首を傾げるとフィルは表情を変える事なく球体で飲み込んだ魔光石の精霊達だけでも解放していると言い、フィリアは説明もしないで次の過程に進んで行くフィルの様子にため息を吐くが、

「使える魔力分は使わないと時間の無駄だろ」

「……そうよね。あんたはそう言う奴よね」

「……フィル、確かにそれもあるけど、あれだな。この状況で寝れるのか？」

フィルは効率の問題だと言うとフィリアは眉間にしわを寄せてると球体がはじけ飛んでいる音もそれなりに響いているためジオは苦笑いを浮かべると、

「しばらくすれば落ち着くだろ。それより、飯は食わなくて良いのか？」

「……いろいろ有ってすっかり忘れてたわ」

「ホ、ホントですね」

「準備の途中だったな」

フィルは呆れたようにいつまでも爆発しているわけがないだろと言うと夕飯にしないのかと聞き、フィル以外の3人は爆発から始まってフィルの右腕の大けが、精霊達の解放と一気に駆け抜けたためすっかり忘れていたようであり、

「一先ずは、飯を作るか？」

「そうだな。フィア、ティアナ、戻るよ」

「はい。フィアさん、急いで準備をしましょう」

「……わかってるわよ」

フィルは3人の様子に小さくため息を吐くとジオは苦笑いを浮かべて頷き、ティアナとフィリアに声をかけるとティアナはフィリアに料理を教えている途中だったため、フィリアに続きをしようと言うがフィリアはすでに料理が面倒になっていてるようでティアナから視線を逸らす。

「……フィア、食べるものを作れよ」

「文句が言いたいなら、自分で作りなさい……やっぱり、良いわ。」

あんたが作るとプライドを引き裂かれそうな気がするわ」

「引き裂かれるほどのプライドを持てるものは作れないだろ」

「……その通りだけど、言われるとムカつくわ」

フィルはティアナに料理を教えて貰っていながらも進歩がなさそうなフィリアの様子にため息を吐くとフィリアはフィルを威嚇しようとするがフィルの料理の腕は自分よりはるかに上だと理解しているため悔しそうな表情をするとフィルは表情を変える事なく、そのレベルにも達していないだと事実のみを言い、フィリアの額にはびくびくと青筋が浮かべるが、

「フィル、待て。聞いてくれ。ティアナは凄いで。フィアが包丁を使って切ったもので形があるんだからな」

「……ティアナ、フィリアの事は任せるぞ」

「え、えーと？ それは言い過ぎじゃないかと」

「フィル、ジオ、あんた達ね！！」

ジオはフィリアを小バカにするがフィルはジオの言葉に本当に關したようにティアナを誉めるとティアナは苦笑いを浮かべるとフィリアは限界がきたようで2人を怒鳴りつけると、

「フィル、逃げるぞ」

「いや、逃げるなら勝手に行け。俺は別にそこまでは言っていない」

「……ジオ、覚悟は良い？」

「いや、逃げる」

ジオはフィリアから逃げようとするがフィルは自分はそこまで言っていないと言い、フィリアは会話の流れから確かにフィルはティア

ナに自分の事を頼んだだけであり、フィリアはジオをターゲットに決め、ジオはフィリアから逃げ出して行き、

「……一先ずは飯を作るか？」

「そ、そうですね」

フィリアは逃げたジオを追いかけて行ってしまい、フィルは小さくため息を吐くとティアナに夕飯の続きを作ると言い、ティアナはフィルの言葉に頷く。

第48話

「あの。フィルさん」

「ん？　どうかしたか？」

「そう言えば、フィアさんがジオさんを追いかけて行きましたけど、結界から出てしまったら、戻ってこれるんですか？」

フィルとティアナが並んで夕飯の続きを作っているとティアナは昼間に結界外に出た時にテントの位置を確認できなくなった事を思い出したようでフィルに聞くと、

「とりあえず、ジオは問題ないから飽きたら帰ってくるだろ」

「フィアさんは放置ですか？」

「しばらくは放って置けばいい」

フィルはジオは結界の中に戻ってくる方法は知っているようで問題ないようだが、フィリアはジオに撒かれたら戻ってこれないかも知れない言い、ティアナはフィルの様子に苦笑いを浮かべる。

「まあ、ジオの事だ。きちんと引きずってくるだろ」

「引きずってくる？」

「ああ……見てみる」

フィルはジオならフィリアを置いてくる事はないと言っがその言葉は少しおかしくティアナは何か引つかかったようで首を傾げるとフィルは完全に真っ暗になっている場所を指差し、

「……今更ですけど、この中で良く追いかけてくれますね」

「まあ、一応は闇夜でもある程度の視界は維持できるようなマジックアイテムは渡してあるからな。ん？　そう言えば、ティアナには渡していないか？　帰ってからだな」

「そ、そんな悪いですよ！？　さつきも首飾りをいただきました…

…あ、フィルさん、これってどんな効果があるんですか？」

ティアナは闇の中でジオとフィリアの声だけが聞こえるため、感心したように言うとフィルは闇夜でも視界が維持できるマジックア

アイテムがあると言い、学園に帰った後にティアナの分も用意すると言うとティアナは慌てて遠慮した時、昼間にフィルから渡された首飾りにどんな魔法式が込められているのかと聞く。

「ん？ 別にたいしたものじゃないが、攻撃の魔法式を自動で感知して魔法障壁を張るだけだ」

「……あ、あの。もの凄く凄いものだと思うんですけど」

「ん？ そうだな。売れば4、5年は遊んで暮らせるかも知れないな」

「お、お、お、お返します！？」

フィルは首飾りの説明をするとティアナは予想以上に凄いマジックアイテムだったため、顔を引きつらせるがフィルはそうでもないと言い、首飾りが市場に出た時の相場を話すとティアナはこんな高価なものを受け取るわけにはいかないと慌てて首飾りを外して返そうとすると、

「気にするな。遊ばせておくよりは誰かが使っていた方が良いだろう。それに現状では依頼に出る時の装備を整えるまでの余裕がないんだ。持っている。要らなくなったら売れば良い」

「そ、そうじゃなくて、こんな高価なものなら、フィルさんが使えば良いじゃないですか？」

「……ティアナ、考えろよ。そのアイテムは女物だ。俺にそれを付けて歩けと言うのか？」

フィルは自分には必要ないから、ティアナに使えと言うがティアナは首飾りの相場を聞いてすでに浮足立っており、フィルに押し付けるように返そうするがフィルは首飾りは女ものであるため、自分には装備しづらいと言う。

第49話

「で、ですけど」

「前にも言っただろ。生きる可能性が高くなる方を選べ、お前は国のために死ぬ必要はないんだからな」

ティアナはフィルの言葉にどうして良いかわからないようで、少し泣きそうな表情になるがフィルが気にする事はなく、

「それで、あいつらに渡してあるマジックアイテムの事だが……」

「あ！？ …… フィアさん、完全に遊ばれていますね」

魔法の詠唱を始め出すとティアナの目には闇が広がっていたはずの場所でフィリアが大剣を振りまわしてジオを追いかけている姿が見えるがジオは平然とフィリアの攻撃を交わしており、1撃をジオに当てられない事でさらに頭に血が昇って行くようである。

「あ、あの。ジオさんって強いんですか？」

「ん？ ああ。俺達の年度で学園に入った人間で剣技と回避能力は敵う奴はいない」

「……す、凄い人だったんですね」

ティアナはジオがまともに動いている姿を始めて見るため、目を白黒させているとフィルは表情を変える事なく、ジオの能力の高さを彼女に伝えると、

「そう言えば、昨日、現れた人もジオさんの事は知っていましたよね？ フィルさんの相棒とか言っていましたけど」

「ん？ 幼なじみだからな。それに俺と組んで依頼を受けようとする人間はいなかったからな。あいつはそんな事を気にしなかったし、自然とあいつと組むようになったただけだ」

「フィルさんとジオさんは親友なんですね？」

「さあな。そんな事は考えた事もない」

ティアナは昨日の襲撃犯がジオの事をフィルの相棒だと言っていた事を思い出すとフィルは特に考えた事はなく、自然にジオと組む

依頼が多くなつたと言い、ティアナはフィルの様子に表情を和らげ、「羨ましいです。私は村にお友達って言える子もいませんでしたから」

「……まずは同年代がいなかったからな」

「小さな村ですからね。仕事もないのでみなさん、大きな街へ行っ
てしまいますから、特に今回みたいな事があるとわずかな収入もな
くなってしまいますし、生活ができなくなりますから」

「世知辛いな」

「そうですね」

ティアナはフィルとジオの関係が羨ましいと言つとフィルはティ
アナの村の様子を思い出して言つとティアナは村の状況を思い出し
て心配そうな表情をすると、

「おかしい事を考えているヒマがあつたら手を動かせ、少なくとも
今はお前は村を救える可能性のある事をしているんだ」

「そ、そうなんですけど、あまり、役に立っていないですし」

「いやいや、少なくともフィアよりは役に立っているって」

フィルはティアナの考えている事が手に取るようにわかるようで
言葉は足りないが彼女を励まそうとするがティアナはほとんどをフ
イルがやっているため、自分は役に立っていないと言つがジオが戻
ってきたようでティアナは役に立っていると言ひ、

「ジ、ジオさん、な、何をしているんですか!？」

「意識を保っている」と結界内に連れてこれないから、剣の鞘の先を
こうやって」

「ほ、方法を聞いているわけじゃありません!？」

ティアナはジオの声に彼の方を向くとジオの手は白目をむいたフ
イリアが引きずられており、ティアナは慌てるがジオはその場でど
うやってフィリアを撃退したか説明をしようとするがティアナはジ
オの行動に声を張り上げる。

第50話

「なら、何かな？」

「何じゃないですよ！？ お、女の子、フィアさんは女の子ですよ。みぞおちに1撃とかダメですよ！？」

「いやいや、ティアナ、そんな冗談はいらないから」

ジオはティアナの様子に首を傾げるとティアナは女の子のフィリアへやる事ではないと叫ぶがジオはティアナの言葉を冗談だと言い切り、

「まあ、性別を出すのは良くないな。命をかけたやり取りをしているなかでそんな余裕ないだろ。だいたい、フィアは平然とそれを振りまわすんだからな」

「……」

フィルは学園で依頼で命をかける事が多いため、性別は盾にはできないと言い、フィリアと一緒に引きずられていたフィリアの大剣を指差すと彼女の太剣はフィリアの身長と同じくらいのサイズのため、ティアナは顔を引きつらせ、

「これを喰らったら、流石に危ないだろ。まあ、喰らう気はないけど」

「まあ、ジオがフィアの攻撃を喰らう姿は想像ができないな」

ジオがフィリアの大剣を指差して言うのとティアナも納得が言ったようで大きく頷き、フィルはあまり興味がなさそうにジオがフィリアの攻撃を喰らうわけがないと言うと料理が完成したようで盛りつけに入っており、

「おい。フィア、寝てないで起きろ……先に食うか？」

「そうだな」

「その反応はおかしいですからね！？」

フィルは準備ができたため、フィリアに起きろと言うが彼女は反応する事はなく、フィルは料理をテーブルに並べながら、フィリア

を待つ必要はないかと言うとジオは頷き、2人の様子にティアナは声をあげる。

「仕方ないな……ジオ」

「そうだな。ティアナ、下がっていて」

「な、何ですか？ 何があるんですか？」

「まあ、気にしない。危ないから下がって欲しいだけだから」

フィルがティアナがフィリアの事を心配しているため、面倒だと言いたげだが何かを始めるようでジオに声をかけるとジオはフィルのやる事がわかったようでフィリアの大剣を運び、ティアナに下がるように言つとティアナは意味がわからないようであるがジオはティアナを引きずって行き、

「それじゃあ、始めるか……」

「……」

「フィルさんの魔法つて凄いですよね」

「本番はこれからかな」

フィルは魔法の詠唱を始め出すとフィリアは気が付いたようで立ち上がるとティアナはフィルの魔法を誉めるがジオはこの後が大変だと言いたげにため息を吐くと、

「どう言つ事ですか！？ フィ、フィアさん、落ちついてください！？」

「はい。ティアナ、近付かない。危ないから」

フィリアは怒りが収まっていけないようで近くにいたフィルを殴りつけるがフィルの魔法障壁で阻まれ、それがまた気に入らないようで何発もフィルに向かい拳を叩きこむがすべてフィルの魔法障壁に阻まれるがティアナはフィリアに落ち着くように言うがジオは慣れているようでまるで猛獣からティアナを引き離すように彼女を引きずって行き、

「モヤシ男、防ぐな！！ 私の怒りを収めるために1発、殴られなさい！！」

「……わけのわからない事を言うな。俺がお前に殴られてやる理由

はない」

「あ、あの」

「こうなるから、気絶させようと思ったわけだ」

フィリアは自分の怒りを抑えるためだけにフィルに殴らせろと言うがフィルの体まで彼女の拳が届くわけもなく、ティアナは顔を引きつらせているがジオは疲れたようなため息を吐く。

第51話

「当たれ!!」

「……いい加減に諦めろ」

ティアナは自分の攻撃がフィルに当たるまで殴り続けようとしており、フィルは彼女の行動に呆れたようなため息を吐く。

「あ、あの。フィルさんはこの間、ティアナさんに思いっきり吹っ飛ばされてしまったけど、あの時はどうして魔法を使わなかったんですか？」

「ん？ フィルの意地かな？ 基本的に学園の練習場では魔法は使わないよ。練習にならないからね。あの時は剣士としてのフィルであつて、今は魔術師のフィルだから」

「で、でも、それって意味があるんですか？」

「ないかもね。でも、フィル自身が魔術師って事を嫌っているから、学園の練習場にいる時はどんなに弱くて惨めでも剣士としてその場所に立つ。あいつのこだわりみたいなものだよ」

ティアナはフィルの行動が理解できないようだがジオはフィルには彼の考えがあると苦笑いを浮かべる。

「まあ、向上心があると言う事で納得してくれたら良いなあ」

「良いなあつて、フィルさん、魔術師ですよ？ そんな必要性がないじゃないですか？ ……あれ？ でも、私の村にきた時って双剣を持ってた気も」

「双剣で戦ってたね。魔術師として戦うほどの数でも強さでもない魔物だったし」

ティアナはジオの説明では納得ができないと言うがその途中で自分の村が魔物に襲われていた時に現れたフィルとジオの様子を思い出したようで首を傾げる。

「ま、待ってください。その言い方だとあの魔物の大群と魔術師のフィルさんが戦ったら、どうなるんですか？」

「どうなるって瞬殺？　と言うか、あの村まま蒸発？」

「ど、どんな魔法を使うんですか！？」

「えーと、俺もあんまり難しい事はわからないんだけど、魔物や草木にある水分の温度を一気に上げて」

「そ、そんな話は聞きたくないです！？」

ジオは平然と魔術師として本気を出したフィルの魔法を説明するとあまりの破壊力にティアナは顔を真っ青にする。

「まあ、村の人の命もかかっていたから、その分を身体にスピードを上げたりする補助魔法をいくつもかけて、魔法障壁で攻撃を防ぎながら戦ってたんだ」

「補助魔法ですか？」

「ああ。あいつ自身が1番、力を入れている魔法かな。戦場に出るために……死に場所を求めるために」

ジオは村を助けた時にフィルの使っていた魔法を説明にティアナはフィルに視線を向けるとジオはフィルの心境を理解しているためかティアナに聞こえないように小さな声でつぶやいた時、

「……もう付き合うのも疲れたな」

「は？　何、大物気取ってるのよ！！」

フィルはため息を吐くがそれがフィリアの怒りにさらに油を注ぎ、彼女の拳は大気の渦をまとい始め、強力な1撃がフィルの顔面に向かい放たれ、

「フィ、フィルさん！？」

「心配ないって」

ティアナはフィリアの攻撃の様子に驚きの声をあげるが対称的にジオは落ち着いており、

「まったく、攻撃が単調すぎるんだ」

「な、何で避けるのよ！？」

「……普通は避けるだろ」

「き、汚いわよ」

フィルはフィリアの渾身の1撃を交わすと彼女に向かい眠りの魔

法を使い、フィリアは膝から崩れ落ちて行く。

第52話

「さてと、とりあえず、縛りつけておくか？」

「あ、あの。それはあんまりじゃないでしょうか？」

フィルはどこからか縄を取り出してフィリアを縛りつけようとするとその姿を見たティアナは慌ててフィルを止める。

「いや、ティアナ、目が覚めて暴れ回ってもなんだし、これで良いんじゃないか？」

「で、ですけど…… フィ、フィルさん、あれを使いましょう。昨日、私が呪歌を使う時に私を落ち着かせてくれた呪歌です。あれを使えばフィアさんも落ち着くはずですよ」

「…… 無理だな。さっきの行動を見ただろ。目を覚ました瞬間に襲いかかってくるような奴だぞ」

ティアナはフィリアを縛りつけておく事に反対して、呪歌で彼女の精神を落ち着かせようと提案するがフィルは眉間にしわを寄せて無駄な行為でしかないと言い切り、その言葉にティアナは納得してしまったようで顔を引きつらせる。

「そ、それなら、一時的に縛って、呪歌で落ち着かせてから、縄を解くとか」

「縄で縛られている事に怒り狂って仕掛けてくるな」

「それじゃあ、どうしたら良いんですか！？」

「…… あれだ。最初に魔光石を掘った穴に埋めとくとか？」

「それって、さらに怒りに油を注いでますよね！？」

ティアナは何とかしてフィリアを落ち着かせたいようだがジオはティアナの反応を見るのが面白いようで彼女をからかい始め、

「…… まったく、ジオもあまりティアナをからかうな」

「いや、何か、楽しいだろ。表情がこころ変わるから」

「私でも遊んでたんですか！？」

「悪い、悪い」

フィルはジオの様子にため息を吐くとフィリアを一先ず抱きかかえてテントの中に運ぼうとするとティアナはジオにからかわれている事に気づき声をあげる。

「で、実際はどうするつもりだ？ このままだとエンドレスだろ？」

「まあ、それは否定できない」

「……あ、あの。私がお話をしてみたいんですけど、男の子のフィルさんやジオさん相手だとフィアさんは意地になっているだけだと思います。で、ですから、私にお話しさせてください」

「……」

フィルとジオは幼なじみゆえにフィリアの性格を熟知しているため、既に諦めが入っているがティアナは彼女を説得してみると言うがフィルとジオから見るとその言葉は無謀であり、顔を見合せてため息を吐く。

「ど、どうして、そんな反応なんですか！？」

「……ティアナ、やるのはかまわないが首飾りを必ず装備するんだ」

「フィル、他にもティアナに補助魔法をかけておけ」

「そうだな。効果の拡大は必須だな」

ティアナは2人の反応に驚きの声をあげるがフィルとジオはティアナを守るためにいろいろと準備を始め出し、

「あ、あの。そんな事をされるともの凄く不安になるんですけど」

「大丈夫だ。死ななければ治療は完璧にしてやる」

「キズが残ったらフィルが責任とってくれるらしいから安心しな」

「ふえっ！？ な、何を言ってるんですか！？ ジオさん！！！！」

ティアナは自分の言いだした事に凄く不安になってきているようだがフィルは後の事は任せろと言い切り、ジオはティアナをからかうように笑うと彼女の顔は真っ赤に染まって行く。

第53話

「それじゃあ、任せたぞ」

「ちょ、ちよっと、フィルさん、ジオさん、本当に私1人ですか！？」

ティアナが落ち着くとフィルとジオはティアナを置いてフィリアと距離を取ろうとするとティアナは冗談だと思っていたようで驚きの声をあげる。

「俺は殴られる義理はない。それより、やるなら、早くしろ。飯が覚める」

「ティアナが自分から言った事だし、意見は尊重しないといけないだろ」

「あ、あの。元と言えばジオさんがフィアさんをからかったからじゃないですか？」

フィルは関係ないと夕飯の準備に戻りだし、ジオもそれに続くようにティアナがフィリアが怒っている原因を思い出してジオの手をつかむ。

「……思い出したか」

「ジオさん！？」

「……結局、お前達は何をしたいんだ？」

ティアナは舌打ちをするジオを見て声をあげるとフィルは2人の様子にため息を吐いた時、

「……それは私が聞きたいわ」

「フィ、フィリアさん！？」

眠れる獅子が怒りの形相で目を覚まし、フィリアの様子にティアナは顔を引きつらせてフィルの後ろに隠れる。

「ジオ、覚悟は良いわね」

「できれば遠慮したいかな？」

「フィア、死なない程度で殺^やれ」

「……自信はないから、フィル、ティアナ、治癒魔法は任せるわ」
フィリアはジオの肩をつかむとフィルはすでにどうでも良いようであり、準備をした夕飯を口に運ぶとティアナは目はすでに獲物をつかまえた捕食者の目である。

「……フィル、補助魔法は？ 魔法障壁でも可だ」
「そうか。ファイア、ジオがお前に攻撃補助をかけて欲しいと言っているが」

「もちろん、飛ばして」

「おい！？ 逆だ！？」

フィルはすでにジオを助ける気はないようでフィリアに補助魔法をかけると言い始め、ジオは声をあげるが、

「死ね！！」

「ごふっ！？」

「少し、気分が晴れたわ」

「最初から、こうすれば早かったんだな」

フィリアの拳はジオの腹に奇麗にねじ込まれ、ジオは前のめりに倒れ込み、フィリアは爽やかな笑顔を見せるとフィルはこれで終わりだと言い、

「あ、あの。ジオさん？ だ、大丈夫ですか？」

「……む、無理かも知れない」

ティアナは目の前で起きた惨劇に顔を引きつらせて、声をかけるとジオの声は力はなく、声が出ないようでかすれている。

「フィ、フィルさん、ファイアさん、な、何をしているんですか！？」

「ティアナ、気にしないの。自業自得よ。こいつが私をからかわなければ最初から何もなく、平和だったんだから」

「……どっちもどっちだろ。ジオの言い分も正しい部分もあるからな。ティアナ、この流れはいつもの事だから気にするな。それより、飯を食え。俺はそろそろ寝るぞ」

ティアナは慌てて、ジオを1撃で沈めたフィリアと補助魔法を使ったフィルを責めるように言うが2人は気にする事はなく、フィリ

アはフィルが用意した夕飯の前に座ると、

「い、いつもの事なんですか？」

「ああ。いつもの事だ。死ぬほどの1撃でもないしな」

「そうよ。打撃の基本は生かさず、殺さずよ」

「そ、それは違う気がします」

ティアナは昔から続いている幼なじみのやり取りについて行けないようにで呆然とする。

第54話

食事を終えて、ジオとフィリアが交代で警戒をずっとしていたため、フィルとティアナは先に休んでいたのだがティアナは喉が渴いたようで目を覚ますとフィルの姿はない。

（……フィルさんがいない？ フィアさんは寝ているから、ジオさんと話しているのかな？）

ティアナは水を飲み場に移動しようとテントの入口を開けるとフィルはやはり、ジオと一緒にいたようでこちらを見た後、眉間にしわを寄せる。

「ど、どうかしたんですか？ ……まさか！？ ふ、2人つきりで依頼を受ける時も多いと言ってたし、そ、そうだったんですか！？」

「……何を言いたいのかは理解できるがおかしな勘違いをするな」

「……その反応は考えてなかったな」

ティアナはフィルとジオの関係を幼なじみではなく男同士のただれた関係と勘違いしたようで顔を赤くしてテントの中に戻ろうとするとフィルは眉間にしわを寄せたまま、彼女の首をつかみ、ジオは苦笑いを浮かべると、

「ちよつと、明日の事でね。隠しても仕方ないんだけど、大きい一発と細かい何百発、どっちが良い？」

「魔力の量と他の場所へ行く事も考えると一発で終わらせるのが良いと思うんだが」

「俺は無理に一発で終わらせる必要はないと思うんだ。連戦はしんどいけど一発にするとどんなものが出てくるかわからないし」

「えーと、まったく、何が言いたいのかわからないんですけど、最初から説明していただきたいんですけど」

フィルとジオは真剣に話をしているがティアナはまったく話の内容について行けないようで詳しく話を聞きたいようでゆっくりと右

手をあげる。

「ん？ 察しが悪いな」

「……多分、ここから話を聞いた人は私と同じ事を言うと思いますよ」

「そうか？」

フィルはティアナに説明を始めようとするがその姿は面倒なのか少し不機嫌そうであり、

「あ、あの。私ができるようにお願いしますね」

「ああ。わかってる。俺とジオが話していたのは明日のもう1種類のトラップの事だ」

「何があるのかわかったんですか？」

「……確認はしていないがな。予想は付いている」

「何なんですか？」

「こんなものは常識だ。爆発ともう1種類と言ったら、魔獣召喚に決ってるだろ」

「そうなんですか？ ……魔獣召喚？」

フィルは表情を変える事なく、魔光石に組み込まれているトラップの内容を説明するとティアナは頷いた後にフィルの口からおかしな言葉が出た事に気づき、顔を真っ青にするが、

「それで、細かい召喚を何度か繰り返して魔獣をぶちのめして行くのとフィルに魔法式を合わせて貰ってでかいのを一発で終わらせるかって話をしていたんだ」

「面倒だから戦闘は一回で良いだろ。強力な魔法、一発で終わるかな」

「俺は前衛だからあまりでかいのはな。攻撃を引きつけるのは大変だしな」

フィルとジオの中では些細な事でしかないようだがため息交じりで軽い口調で話をしている。

「ま、待ってください！！？ 魔獣ですよ！！ ま・じゅ・う。その反応はおかしいですよ！？」

「何だ？ 魔獣がイヤなら悪魔でも呼び出すか？ 知能が高いから厄介だぞ」

「そう言う意味じゃありません！！」

ティアナは2人の反応はおかしいと声をあげる。

第55話

「ならなんだ？」

「どうして戦う事が前提なんですか？ 魔法式を合わせられるんなら解除はできないんですか！！」

「効率が悪いからパスだ」

ティアナは戦わない方法はないのかとフィルとジオに詰め寄るがフィルは効率が悪いと一言で済ませようとする。

「多少、効率が悪くても安全な方法を選ぶべきです！？」

「ま、まあ、ティアナも落ち着いて、一応は戦う意味もあるわけだし」

「戦う意味？ どんな理由ですか？」

ジオは自分達にも考えがあるため、ティアナに落ち着くように言うがティアナは戦闘自体に反対のためかジト目で2人を見る。

「フィル、説明」

「……面倒だな。戦闘を行う理由は簡単だ。今回の依頼で集めたデータは各地の同じ被害に遭っている場所に送られる。もしくはうちの学生が王都の騎士団が対処に動く。ここはわかるな？」

「はい。今回の依頼は調査ですから、それはわかります」

「それなら、その時に召喚の魔法式を書き換えて無効化できる人間がどれだけいる？ それなりの魔術師が2人いればトラップの発動条件である2つの魔法式の解除はできる」

「魔法式の書き換えってかなり上位の魔術師にしかできないんだ。なら、その依頼を受けた人間達は召喚された魔獣を力で排除しなければいけない。召喚の魔法式からわかる事を調べ上げて次に繋ぐ。それが俺達が受けた依頼だよ」

フィルとジオはティアナが思っている以上に先の事を考えており、2人の依頼を受ける姿勢にティアナは息を飲む。

「魔法式から召喚される魔獣のレベル。魔法式を重ねる事で起きる

魔法式の変化、調べる事はいくつもあるんだ」

「それをこいつは一発で終わらせるとか言つて、ティアナ考えろよ。魔法式を重ねた事でレベルの高い魔獣が何十匹も徘徊して、それ以外にもいろんなレベルの魔獣が平原を闊歩する姿を地獄絵図だぞ。ティアナからも考え直すように言つてくれ」

「フィルさん、何回かに分けましょう。絶対に対処できないし、調査をしているヒマもないですから!!」

ジオは苦笑いを浮かべてフィルが無茶な事をしようとしているため、ティアナにも説得を頼むとティアナはジオの言葉で平原を見た事のない魔獣達が歩きまわっている様子を思い浮かべたようでジオの意見に賛成をする。

「そうか？ 面倒だな」

「お前は簡単に言うけどな。今回はティアナもいるんだ。無茶はできないだろ」

「そうですよ。魔獣達が一斉に襲いかかってきたら、考えただけでもゾツとしますよ」

「一斉に襲いかかってくる？ それがわからん。魔獣は所詮、魔獣だ。知能も低いんだ。大量に召喚して魔法で認識をずらしてやれば勝手に同志討ちを始める」

「そ、それでもです!! 多数決です。民主主義です。私とジオさんの2票、フィルさんは1票。私達の勝ちです」

フィルは安全に戦う方法も考えているようであるがティアナは声をあげてフィルの考えを否定すると、

「フィル、今回は引いてくれ。ティアナもだけど、もう1人戦術とか理解できない奴もいるわけだからな」

「……そうだな。勝手に戦闘を始めて勝手に窮地に陥りそうだからな」

ジオはフィリアがいるため、先に立てた戦術は意味がなくなると言うフィルはその言葉に眉間にしわを寄せて頷く。

第56話

「えーと、言い過ぎじゃないでしょうか？」

「その時点で、該当者をフィアと決めつけてるティアナも充分にね」
「そ、そんな事はないですよ!？」

ティアナはフィリアが何も考えずに魔獣に攻撃を仕掛ける姿が目
に浮かんだようで苦笑いを浮かべるとジオはティアナをからかう。

「言い過ぎでもないだろ。ここに来てからも勝手に暴走してるしな」

「それはフィルさんとジオさんにも問題があるような……あ、あの
フィルさんとジオさんはお2人で良く依頼を受けているんですね
？」

「どうかしたか？」

ジオにからかわれて慌てだし始めたティアナをフィルが落ち着か
せようとするとティアナは何かが引かなかったようである。

「だって、あんなに大騒ぎしていたら、他の人たちと依頼を受けた
時は大変な事になるんじゃないですか？」

「……ティアナ、君もかなり酷いよ」

「そ、そんな事はないですよ!？」

ティアナはフィリアが他の人たちと依頼を受けた時は問題ないの
かと聞くとジオはティアナの口から出た言葉にため息を吐く。

「メンバーしだいだ。あんな風に勢いで動く奴らばかりだと気にな
らないらしいが」

「むしろ、先陣をきって駆け出す姿は勇敢だって言う人間もいるく
らいだよ。だけど、連携で戦う人間達のところにヘルプで入ると二
度とくるなと言われているみたいだけだな」

「……あ、あの。それを聞くと酷く不安になるんですけど」

ティアナは2人から聞く、フィリアの依頼状況に顔を引きつらせ
る。

「まあ、あいつと依頼を受ける時は気をつける。巻き添えにならな

いようにしろ」

「そ、そうじゃないです！？　どうにかしてあげたいと思わないんですか！？」

「……ティアナ、俺達が今まで何もしてこなかったと思っているのか？」

「……すみません」

ティアナはフィリアの性格を直してあげないのかと言うが幼なじみであるフィルとジオは既に手を尽くしているようで眉間にしわを寄せ、2人の姿にティアナは本気で謝罪をする。

「……まあ、俺とジオが言ってももう意地になるだけだからな。気が付いたら、フォローしてくれ」

「俺とフィルの手から離れたな。ティアナが責任をとってくれるみたいだな」

「ま、待つてください！？　お、押しつけないでください！？」

「ティアナ、遊んでないでそろそろ戻れ。聞いた通り、明日は戦闘ありだからな」

ティアナは完全にジオにからかわれており、あたふたするとフィルはこれ以上は明日に支障をきたすと思ったようでティアナにテントに戻るように言い、

「は、はい。で、でも、フィルさんとジオさんは？」

「俺は起きてるよ。その分、昼間に寝させて貰ったしね。フィルは結界のほころびを確認してから寝るから先に戻って」

「そう言って、召喚の魔法式を起動させないですよね？」

「……信用ないな。わざわざ、時間を選べる中で視界の悪い時間を選ぶわけがないだろ。心配してないで寝ろ」

フィルとジオはもう少しやる事があるため立ち上がり、フィルは闇の中を歩いて行く。

第57話

「準備は良いか？」

「良いから、始めなさいよ」

「フィア、お前には聞いてないって」

「……」

翌朝、朝食時に昨日の夜に話した事をフィリアに伝えると彼女は朝食後にはすでにやる気を見せているが対照的に戦闘経験のないティアナの顔は真っ青である。

「落ち着け。お前は攻撃魔法を使えるわけでもないんだ。やれる事は1つだけだろ」

「そ、そうなんですけど」

「まあ、おとといは戦闘って感じじゃなかったしな」

「ああ。初日の襲撃ね。そう言えば、あの男ってなんだったの？」

フィルは素気なくだがティアナに落ち着かせようとするがティアナはそれどころではなく、フィリアは初日の夜に現れた事を思い出したようで首を傾げるが、

「……お前は気にするな」

「今まで、忘れてたんだ。必要ないだろ」

「あんた達の反応は何なのよ!!」

フィルとジオのフィリアへの対応は冷たく、彼女は不満なように声をあげる。

「今はそれより、目の前の事だろ」

「まあ、それもそうね」

「……これで静かになったか。単純は簡単で良いな」

「あ、あの。ジオさん、その言い方はちょっと」

フィルはフィリアの相手をするのが面倒なように目の前の事を考えるように言い、フィリアはその言葉に戦闘を心待ちにしているように目を輝かせ始め、その様子にジオはフィリアに聞こえないように

に彼女を小バカにするとティアナは言い方が酷いと非難するような目をするがその声は未だに震えており、

「どうする？」

「どうするも何もな」

「良いでしょ。フィルが守ってくれるから、ティアナはフィルの背中の中に隠れていれば良いのよ」

フィルとジオは顔を見合せてティアナを落ち着かせる事を諦めかけるとフィリアはフィルにティアナを守れば良いと彼の肩を叩く。

「フィ、フィルさんのせ、背中にですか！？」

「まあ、今回の前線は俺とフィアがいるからな。フィルは後衛でかまわないからな」

「……そうするか。ティアナ、昨日の首飾りは持っているな？」

「は、はい。で、でも、フィアさんが前線に立つんでしたら、これはフィアさんが持っていた方が」

ティアナは顔を赤くして慌てる姿にジオはフィルとティアナの顔を交互に見比べてニヤニヤと笑うがフィルは気にする様子もなく、ティアナに渡してあった首飾りを付けるように言うがティアナは前線で魔獣と戦うフィリアが持っていた方が良いと首から取り外そうとするが、

「良いから、良いから、それはティアナが付けててよ。それに私のガラじゃないしね」

「確かに、フィアは大剣振り回してれば良いからな。女らしさとは無縁だ」

「……ジオ、あんた、何が言いたいわけ？」

フィリアは苦笑いを浮かべるとジオはまた余計な事を言い、フィリアは額にくつきりと青筋を浮かべてジオの胸倉をつかむ。

「あ、あの。2人とも落ち着いて下さい！？」

「……お前らは依頼を成功させる気があるのか？」

ティアナは2人の様子に慌てて2人の間に割って入るとフィルはいつまでも進まない状況に眉間にしわを寄せる。

第58話

「準備は良いな。始めるぞ」

「は、はい」

ジオとフィリアの小競り合いが終わるとフィルは魔獣を呼び出そうと魔法の詠唱を開始する。

「ティアナ、あんまり気を張らなくて良いって、あんまり強いようだったら、フィルも数を調整するとかするでしょ」

「そう言う事だ」

「……失敗したな」

ジオとフィリアはティアナを落ち着かせようと声をかけるがその時にフィルの口から『失敗』と言う不吉な言葉が漏れる。

「フィ、フィルさん、失敗ってなんですか!？」

「ん？ 少しずつ、召喚して行こうと思ったんだが、どうやらいくつか連動していたみたいでな。まあ、直ぐに気づいたから、全部、召喚される事はないがな」

「……いきなりかなりの数が召喚されるわけね」

「そう言う事だ」

ティアナはフィルの言葉に慌てて聞き返すがフィルは落ち着いた様子で自分の失敗を話すと上空には10個の魔法陣が浮かび上がり、
「レベル的にはどんな感じだ？」

「魔法陣を見る限り、上位種2匹、中位種3匹、下位種5匹と言った感じだろう。まあ、上位種は直ぐに出て来れないからな。下位種から駆逐して行けば問題ない」

「面倒だな」

ジオはフィルの失敗を責める事なく、フィルに魔獣の強さを確認するとフィルは浮かび上がっている魔法陣から呼び出される魔獣を予想しているようである。

「まあ、一先ずは下位種から狩って行くか？ フィア、行けるな？」

「当然、フィル、あんた、ティアナをしつかり守りなさいよ」

「別に上位種を言っても大した相手ではないだろ」

ジオとフィリアは魔法陣から小さな魔獣が出始めてきたのを見てフィルにティアナを任せて駆け出して行き、フィアは上位種の魔獣2匹程度では相手でもないと思っっているように表情を変える事は無い。

「あ、あの。フィルさん、2人は大丈夫なんですか？」

「問題ない。下位種や中位種なら、俺達が何かをする必要もないしな。ただ」

「ただ？」

「少しくらいは時間を稼ぐか……」

ティアナは駆け出して行った2人を心配するようにフィルに聞くとフィルは上位種以外は2人が止められる事はないと言い切るが何かやる事があるように目を閉じ、魔法の詠唱を開始し始め、フィルの身体は魔力が集まっているのか身体は青白い光をまとい始める。

「フィルさん？」

「……黙っている。上位種が魔法陣から出てくる時間をずらすだけだ。2匹同時に相手をするのは少し骨が折れるからな」

「そ、そんな事ができるんですか？　って、そんな事が出来るなら、一旦、全部戻してください……」

「何を言ってる。結局、全部、どうにかしないとイケないんだ。戻す意味がないだろ」

「……本当に大丈夫なのかな？」

フィルは召喚の魔法陣の発動を送らせると言い、ティアナは体勢を整えるのに魔獣召喚を止めるように言うがフィルは落ち着いた様子で魔法の詠唱を続けて行き、ティアナは不安なように大きくため息を吐くが、

「ジオ、どっちが多くの魔獣を倒すかで勝負よ……」

「……いや、そう言う事を言っているヒマがあるなら、手を動かせよ」

「……」

前線で戦っているジオとフィリアには緊張感はなく、ティアナは顔を引きつらせる。

第59話

「……あ、あの。ジオさんもフィアさんも強かったんですね」

「ん？ 今回の魔獣とは戦闘経験もあるからな。攻撃パターンもある程度は予想が付くからな」

「だ、だからと言っても、無傷で魔物8匹相手に互角以上に戦っているってのはどうなんですか!？」

ティアナは目の前で繰り広げられているジオ、フィリア対魔獣の戦いが信じられないようであり、顔を引きつらせるがフィルは特に気にした様子もなく、

「……魔法式の連動を切るのは」

「……私って完全に場違いかな？」

フィルは他の人間が依頼を受ける時の事を考えているようで魔法式の考察に入っており、ティアナは明らかにレベルの違う3人の様子にどうしたら良いかわからないようであり、苦笑いを浮かべると

「フィル、ティアナ、片付いたよ」

「フィル、1匹、呼び出してくれ」

魔獣8匹を片付けたジオとフィリアが上位種の魔獣を呼び出して欲しいと言っている。

「ああ。ティアナ、少し下がっている。ここからは少し厄介だ」

「はい」

フィルはティアナを自分の後ろに下がらせると2つの上空に浮かんでいる魔法陣の1つが描かれて行き、鈍い光を発すると同時に、

「……これは予想外だったわ」

「……いくら上位種って言ってもこれはないだろ」

上空には1匹の強大なドラゴンが呼び出され、ジオとフィリアはドラゴンは予想していなかったようで顔を引きつらせる。

「ド、ドラゴンって、あのドラゴンですか？」

「どのドラゴンを言いたいかはわからないが上位種の魔獣である事

は確かだな」

「な、何で、フィルさんはそんなに冷静なんですか!？」

「ん？ ドラゴンの1匹や2匹で慌てるな」

ティアナは上空に飛んでいる今まで見た事のない巨大なドラゴンの姿に顔は蒼白になっているがフィルは落ち着いた様子であり、

「一先ずはブレスを防ぐためにと龍鱗を切り裂かないければ行けないから」

「で、ですから、どうしてそんなに!？」

フィルはドラゴンと戦うためにジオとフィリアに補助の魔法を詠唱を開始した時、ドラゴンは視線をフィルとティアナに向け、ティアナはドラゴンの視線に腰を抜かして地面にへたりこんでしまう。

「ティアナ、立つ。座っていると危ないわよ!!」

「で、でも」

「まあ、フィルもいるし、どうにかなるだろ。だいたい、普通に考えたら逃げようがない」

ティアナの腰が抜けたのを見てフィリアは彼女に声をかけるが対照的にジオはティアナと一緒にいるフィルに全面的な信頼を置いているため、特に気にした様子もなく、

「フィル、補助より、先に地面に落としてくれ。飛ばれていると攻撃のしようがない」

「……そうだな」

ジオはフィルにドラゴンを地面に落とすように言い、フィルはそれまで行っていた魔法の詠唱を取りやめるとフィルの周りには先ほどまで行つて具現化仕掛けていた魔法なのかいくつかの光の球が浮かび上がっており、

「フィ、フィルさん、何をするんですか？」

「何？ 聞いていなかったのか？ ドラゴンを地面に叩き落とす」

「そ、そんな事ができるんですか？」

「無理な事なら、できるとは言わない」

ティアナは動けない事があるのか恐怖を少しでも和らげたいよう

でフィルの足にしがみつくがフィルは彼女の行動を責める事なく、
「……ティアナ、動くなよ。下手に動くと落とす場所の計算がずれる」

「は、はい」

フィルは強力な魔法の詠唱を始め出すようであり、ティアナに動かないように釘を刺すがティアナは腰が抜けているため動けるわけではない。

第60話

「……ストーンシャワー」

「ちょ！？ フィル、それはないだろ！！」

フィルの魔法の詠唱が終わるとジオは今からこの場に起きる事に声を張り上げるが、

「大丈夫だ。そこから動かなければ当たらない」

「そう言う問題か！？」

フィルは表情を変える事なく、ジオとフィリアに動くなと言った時、ドラゴンの頭上の空間が歪み始め、巨大な岩が次々とドラゴンに降り注ぎ、ドラゴンの飛行高度は落ちて行く。

「フィ、フィルさん、あ、あの。この魔法はやり過ぎじゃないですか？」

「何を言ってる。地上に落とさなければ始まらないだろ……」

「ちょ、ちよつと、フィルさん、まだ続くんですか！？」

ティアナは巨大な岩でドラゴンを地面に向かって行く様子が信じられないようで顔を引きつらせるがフィルに気にする様子はみじんも感じられず、新たな魔法の詠唱に入り始め、

「……ジオ、ここから避難した方が良くない？」

「そうしたいけどな。動いた方が危険な気がするんだよな」

ドラゴンに直撃した岩はドラゴンの鱗の堅さに粉々に砕けて地上に降り注ぎだし、フィリアは身の危険を感じて逃げ出そうとするがジオは下手に動くよりはフィルの言葉を信じて動かない方が安全だと判断すると、

「……ウィンドカッター」

「フィルさん、ドラゴンの羽が切れてますけど、落ちちゃったりします？」

「何を言ってる。最初から落とすつもりだと言っているだろ」

フィルの魔法の詠唱が終わり、巨大な風の刃がドラゴンの羽に向

かつて飛んで行きドラゴンの羽を切り裂いて行き、ドラゴンの羽からは赤い血液が飛び散り、ドラゴンは自分の羽が切り裂かれる事に魔法の発動の瞬間を見ていたようで羽を切り裂かれている痛みを吐き出すようにフィルを睨みつけて吠えるがフィルは気にする事はなく、

「あ、あの。フィルさん、ドラゴンの視線がこっちから外れないんですけど」

「だろうな。ティアナ、動くなよ。ブレスがくる」

「ま、待つてください。ブレスが来るじゃないです！？　に、逃げないと死んじゃいますよ！？」

ドラゴンはフィルとティアナに反撃をするつもりのように大きく息を吸い込み、ドラゴン最大の攻撃であるブレス攻撃を行おうとしており、ティアナは腰を抜かしたままだが逃げ出そうとフィルの足を引っ張るが、

「動くなと言っているだろ。アンチマジックシエル」

「い、いやあああつつつ！！！？？？」

フィルは落ち着いた様子で新たな魔法を発動させた時にドラゴンの口からは赤々と燃える炎を吐き出され、その炎はフィルとティアナに向けられ、

「……慌てるなと言っているだろ」

「あ、あれ？　熱くない？」

「ドラゴン相手にブレス攻撃の対処もしないで攻撃を仕掛けるわけがないだろ」

「そ、そうは言ったって、ドラゴンの攻撃なんて防げると思わないじゃないですか！？」

フィルは眉間にしわを寄せてティアナに落ち着くように言うティアナは想像していたダメージがなく首を傾げて自分の周りを見るとフィルとティアナの周りを白い光の球が包み込んでおり、ドラゴンのブレス攻撃を完全に防いでいる。

第61話

「それは勝手な思い込みだろ」

「で、ですけど」

「……しかし、流石にドラゴンの鱗は硬いか？　少しか詠唱時間を長くする必要があるな」

ティアナは自分とフィルの周りを炎が避けている様子に驚きが隠せないようだがフィルは気にする様子もなく、自分の魔法でキズを付ける事はできても切り裂く事が出来なかったドラゴンの羽を見て次の攻撃を仕掛けるために魔法の詠唱を始め出す。

「フィ、フィルさん、あ、あのですね」

「……黙っている」

「で、ですけど、ドラゴンがこっちを睨みつけているんですよ」

しばらくするとドラゴンの吐いた炎は消え去り、それと同時にドラゴンの巨大な瞳はフィルとティアナを睨みつけており、ティアナは震える声でフィルを呼ぶがフィルの周りには魔力が集中し始めているようで青い光をまとっており、

「……アイシクルスピア」

魔法を放つのに十分な魔力が溜まった瞬間、青い光はフィルの右腕に集約されて行き、その光は右腕から放たれると巨大な氷の矢になり、ドラゴンの片翼を撃ち抜き、翼には穴が空き、ドラゴンはバランスを崩して地上に向かって落ち始める。

「……あ、あの。フィルさん、この状況で私やジオさんとフィアさんって必要あります？」

「何を言ってる。必要ないなら、連れてくるわけがないだろ」

ティアナは地上に向かい落下しているドラゴンを見て顔を引きつらせるがフィルは気にする事はなく、

「ジオ、フィア、行くぞ。時間がないからな」

「了解」

「やっと、出番」

補助魔法の詠唱の続きに移ったようでジオとフィリアの名前を呼ぶと先ほどまでフィルの周りに浮かんでいた光の球はジオとフィリアの身体の中に吸い込まれて行き、ジオとフィリアの身体を光が包んで行き、2人はドラゴンに向かって駆け出して行く。

「あ、あの。ドラゴン相手に2人で問題はないんですか？」

「プレスへの攻撃は対処しているからな。後はこっちで対処してやれば良い」

「後は、ジオさん！！ フィアさん！！」

ティアナは腰を抜かしたまま、フィルにドラゴンと2人で戦えるのかと聞くとドラゴンの尾はジオとフィリアを薙ぎ払うように動くが、

「悪いな。その程度の攻撃を当たってやるわけには行かないんだ」

「ジオ、その剣、私にちょうだいよ。フィルも私に魔法式が組み込まれた剣、くれないかな？ ジオだけずるいわよ」

ジオは何もないはずの場所を剣で切り裂くとそこには小さな歪みが生まれ、ジオとフィリアはドラゴンの尾が直撃する瞬間にそのひずみに飛び込むといつの間には2人はドラゴンの背の上に移動しており、

「俺に言わないで、フィルに言えよ。まあ、貰ってもお前は魔法を覚える気がないんだ。魔力の発動も上手く使えないうちは貰っても宝の持ち腐れだけだな」

「う、うっさいわよ。私なら魔剣の1つくらい簡単に使いこなせるわよー！！」

「……今はそれより戦えよ。上位種の魔法陣はもう1つあるんだぞ」
ジオとフィリアはドラゴンを相手にしているにも関わらず、ドラゴンの背の上でくだらない言い争いを始め出し、

「……どうして、ドラゴン相手にこんなに余裕そうに戦ってるんだらう？」

ティアナは常識外のジオとフィリアの様子に顔を引きつらせる。

第62話

「別に余裕ではないだろ。ただ、依頼をこなして行けば不足の事態に遭遇する事もあるからな。その時に慌てて周りが見えなくなれば死の距離が近づいてくる。それに対処するのは強がりでもハツタリでも余裕そうに見せていないといけない」

「ハツタリなんですか？」

「いや、あれに関してはでかくて硬いだけだ」

「……その基準がわからないです。だいたい、ドラゴンが出た時、予想外って」

フィルは敵に弱みを見せてはいけないとティアナはフィル達もドラゴン相手では不安なのだと思つて安心したような表情をするがフィルはドラゴンをザコ扱いしており、ティアナはフィルの基準がわからないようで眉間にしわを寄せる。

「予想外だったぞ。もう少し上のランクが呼び出されると思ったかな。魔法式を量産しているせいかあまり強力すぎる魔獣はよびだせなかったようだな」

「……あの。普通に考えるとドラゴンは強力すぎる魔獣だと思います」

フィルは魔法式のレベルを計算しているようであり、ティアナはすでにドラゴン相手に慌てているのは無意味なんではないかと顔を引きつらせると、

「補助魔法が切れると面倒だから、もう1つの魔法式も発動させるか？」

「な、何を言ってるんですか！？ ドラゴン2匹相手は無理です。だいたい、今はジョさんとフィアさんが少し押し気味ですけど無理に決まってますよ」

フィルは上空に浮かんだままの魔法式を発動させようと魔法式の魔力を解放しようとするがティアナは流石に危ないと思ったようで

フィルの腕に抱きついて彼の行動を制止する。

「まったく、仕方ないな……」

「あ、あの。今度は何をする気ですか？」

フィルはティアナの行動に小さくため息を吐き、魔法式の解放を諦めたようで新たな魔法の詠唱を開始する姿にティアナは首を傾げると、

「黙っている。結構、面倒な魔法なんだ……」

「は、はい」

フィルは集中力がいる魔法のためかティアナに静かにするように言い、ティアナはフィルの言葉に慌てて両手で口を塞ぐ。

ティアナの耳にはフィルの魔法の詠唱が聞こえるがその詠唱は彼女が理解する事の出来ない言葉で構成されており、ティアナは耳を通り抜けて行く言葉の羅列に何が起きているかわからずに上空に浮かんでいた魔法式に視線を移すと先ほどまでは完成に近づいていた魔法式は消え始めて行く。

「魔法式が消えている？」

ティアナは目に映る信じられない光景に唖然とした表情で空を見上げていると、

「……時間を戻したただけだ。慌てる事でもないだろ」

「じ、時間を戻すってそんな事が出来るんですか！？　って、実は時間を戻してるから、同じくらいの年齢に見えるだけで、フィルさんはもつと上？　そ、それなら、あんなに強力な魔法を次から次と使えるのも頷けます」

「……その答えに行きつくのはどうかと思うが」

フィルは空を見上げて呆然としているティアナに声をかけると平然と時間を戻したと話すとティアナはわけのわからない答えに行きつき、彼女の答えにフィルは呆れたようで眉間に深いしわを寄せる。

第63話

「ち、違うんですか？」

「……違う。だいたい、いや、説明は今度だ」

「フィルさん、今、どうせ、私は理解できないと思って止めましたね」

ティアナはフィルの様子に遠慮がちに聞くとフィルは説明を始めようとするが、今日までの流れで説明するだけ無駄と判断したように説明を取りやめる。

「……良いから、黙っている。黙っていないなら、もっと近くで見てくるか？」

「え、遠慮します」

フィルはこの場で待っているのも飽きたようでドラゴンとの戦闘を近くで見てくるかと聞くがティアナは大きく首を横に振り、

「だいたい。ドラゴン相手に私みたいなのが行っても足を引っ張るだけじゃないですか」

「それは行ってみないとわからないだろ」

「わかります。無理なものは無理です！？ ま、待ってください！？」

「引つ張らないでください！？」
「何事も経験だ。行くぞ。ここでなれておけば、ちょっとした事で動じなくなる」

フィルはティアナの経験になると言ってティアナを引きずって歩きだし、ティアナは首を振っているが抵抗むなく引きずられて行く。

「ん？ フィルに……生まれたての小鹿？」

「確かに足が震えてるからな」

ジオがドラゴンの尾をかわして地面に着地するとドラゴンに怯えているティアナの震えように首を傾げ、フィルはジオの例えに納得したように頷くが、

「ちょ、ちよつと、ジオさん、こんなところで遊んで！？」

「大丈夫、大丈夫」

ティアナは続けてジオに向かってドラゴンの尾が襲ってくる様子に顔を蒼白にして死んだと思ったようで顔を伏せるがジオは気にした様子もなく笑った時、ドラゴンの悲鳴とともに何もなかったはずの空間でドラゴンの尾が弾かれる。

「相変わらずの防御魔法だな」

「いや、俺の魔法じゃない。あれの影響だ」

「あれか……効果を知ったら、ファイアがうるさくないか？」

「知らん」

ジオはフィルの防御魔法の効果は絶大だと言うがフィルはティアナが首にかけている首飾りを指差し、首飾りの効果だと話すが、

「な、何があつたんですか？ な、何で、何とも無いんですか？」

「いや、その効果みたいだぞ」

「これ？ …… 本当ですか？ ど、どんなマジックアイテムなんですか！？」

「最初から、言ってるだろ。攻撃を防ぐと」

ティアナはドラゴンの声が響きはしたものの攻撃を受けなかった事を理解できないように遠慮がちに2人に聞くとフィルとジオは彼女の首飾りを指差し、ティアナは想像からかなり吹っ飛んだ防御力に顔を引きつらせる。

「それで、こんな近くまできて、あれか？ ドラゴンへのドキドキを恋愛感情へ替える吊橋効果？ 必要ない。必要ない。すでにティアナは」

「ジ、ジオさん、何を言ってますか！？」

ジオはティアナをからかい始めるとティアナは顔を真っ赤にして慌て、ジオはその様子に苦笑いを浮かべると、

「ティアナ、首飾りの威力もわかったわけだし、安心して見てな。

フィル、援護をよろしく」

「ああ……」

ジオはドラゴンと戦ってくると言い、地面を蹴って駆け出し、フ
イルは魔法の詠唱を始める。

第64話

フィルがジオとフィリアの援護に入ると後は一方的な戦闘であった。フィルがドラゴンの攻撃を魔法で全て塞ぎ、バランスを崩したところをジオとフィリアが攻撃をするの繰り返し、ドラゴンの攻撃は1発は重く強力で有ったが的小さい人間相手では的確に狙う事もできない上に、全て魔法で防がれて行くため、攻撃は乱雑になり、乱雑な攻撃はドラゴンの体力を少しずつ削って行く上に威力は小さくても確実にジオとフィリアはドラゴンにダメージを積み重ねて行く。

「す、凄い。本当にドラゴン相手に…… フィルさん？」

「そうだな。せっかくの機会だ。もう1つだけ、試したい魔法があったんだ。ジオ、フィア、殺さない程度に相手をしていてくれ」

「フィル、あんた、ずいぶんと簡単に言うわね」

ティアナは3人の連携に驚きを隠せないようだが、フィルが何かをしようとしている事に気づいたようであり、フィルの名前を呼ぶと彼はジオとフィリアに時間を稼ぐように言うのと2人の返事を聞く事なく、新たな魔法の詠唱に移り始め、

「まあ、あいつが勝手な事を言うのはいつもの事だろ。だけど、その後に必ず結果を出すんだ。あいつを信じるしかないだろ」

「そうなんだけどさ…… ねえ、ティアナ」

「は、はい!？」

「何か魔法って試さないの？ それなりに魔法の勉強してきたんでしょ」

ジオは苦笑いを浮かべると剣を構え直し、ドラゴンに向かって行くがフィリアはティアナに魔法を使ってみないかと聞く。

「む、無理ですよ。攻撃魔法はセンスがないってフィルさんにも他の先生達にも言われましたし、支援魔法や補助魔法は基礎の基礎しかできないのでフィルさんの魔法に敵いません」

「残念……なら、呪歌は？」

「私の呪歌は対象を決められないからドラゴン相手にも効果がある可能性が」

「そう？ それなら、そこが次の課題ね。なら、フィルに守って貰ってなさい。私も行ってくるから」

ティアナは使える魔法や呪歌では今の戦闘では役に立たないと慌てるとフィリアはニヤニヤと笑った後にドラゴンに向かって駆け出して行き、

「……課題？ 私、本当にやっていけるのかな？」

ティアナは改めて自分が今までとは違う世界に入り込んだのだと思ったように大きく肩を落とした時、

「ジオ、フィア、放れろ」

「ずいぶんと早く終わったな。もっと時間がかかると思ったんだけどな」

「そうね」

フィルの魔法の準備ができたようであり、フィルは矢を放つように構えると光輝く魔法の弓と矢が彼の手の中に現れ、フィルの声にジオとフィリアはドラゴンの攻撃をかわし、大きくドラゴンから放れ、

「……血に眠る獣性を封じよ」

フィルは魔法を決定づける最後の言葉^{ワード}を発すると光の矢はドラゴンを撃ち抜き、ドラゴンは大きな悲鳴とともに巨大なドラゴンの身体は光の球に包まれて行く。

「フィルさん、何をしたんですか？」

「まあ、見ていろ。まだ、実験段階の魔法なんだが成功すれば有効に使えるコマが増えるからな」

ティアナは目の前で何が起きているのかがわからないようでフィルの服の裾をつかんで聞くがフィルの反応は薄く、結果が出るまで待っているように言う。

第65話

「有効に使えるコマ？ ドラゴンを仲間にしようとかおかしい事を言うわけじゃないわよね？」

「流石にそんな事ができるわけがないじゃない……できるんですか？」

フィリアはフィルの言葉に1つの答えを出したようだが、それはあり得ないと思ったようでため息を吐くとティアナはそんな事はあり得ないと言いかけるがフィルの顔を見て首を傾げる。

「実験段階の魔法だが、なかなかドラゴンと遭遇する機会はないからな。せっかくだ。試してみようと思つてな」

「フィル、この時点で魔光石の魔法式の解除はどうでも良くなつてないか？」

フィルは表情を変える事なく、実験段階の魔法を使つてみると言うがジオはフィルが依頼の事を忘れていたと思つたようで苦笑いを浮かべると、

「フィ、フィルさん、ダメですよ。この依頼は多くの人の生活がかつているんですから……！」

「……お前ら、俺が何故、依頼を忘れていたと決めつけているんだ？」

「それは日頃の行いじゃないの？」

「まあ、否定する要素が見当たらないな」

ティアナは自分の村の事もあるためか、フィルに依頼の事を思い出して欲しいと言いだし、フィルはティアナの様子に眉間にしわを寄せ、ジオとフィリアは苦笑いを浮かべる。

「で、忘れてないなら、他の魔法式はどうするんだ？ 実際、このペースじゃ、いつまでかかるかわからないぞ」

「そ、そうですね。また、ドラゴンの相手とかは大変ですよ」

「そうね。戦闘の経験にはなるけど正直、この平原全部を戦つて回

るわけにもいかないでしょ」

フィル以外の3人は魔獣を召喚する魔法式をどうにかしないといけないと思っているようだ、

「そんなものは簡単だ。魔法式の発動条件を書き換えて、無効化してやれば良い」

「……おい。それなら、昨日の夜の話しは何だったんだ？」

「決まってるだろ。ただのヒマつぶしだ」

「……お前はそう言う奴だよな」

フィルはすでに魔法式を解除する方法も考え終わっているようであり、ジオはフィルの行動に大きく肩を落とすと、

「発動条件は魔光石を破壊して精霊達を解放する事、連動系の魔法式とは発動条件を変える。連動系の魔法式を組み込む時は発動条件を他の術師に理解できないように構築するのが基本なのにそれができていない。つめが甘いな」

「いや、わかったとしても簡単にできないだろ」

フィルは簡単にこれから自分がやろうとしている事を説明するがジオはフィルの言う事が出来る人間は多くないと苦笑いを浮かべ、

「知るか。だいたい、これは学園でも指導している事だ。それができてないと言う事は学園では魔法を学んでない人間。もしくは学んでいても連動式の魔法式を組み込む事もできない低レベルの術者だ」
「……あ、あの。これだけの騒ぎを起こしている時点で低レベルと言っのはどうかと思うんですけど」

「ティアナ、言うだけ無駄よ。それじゃあ、精霊達は解放できるのよね？」

フィルはこの事件を起こした魔術師を低レベルと言い切るとティアナは首を振って否定しようとするがフィリアは無駄だと言い切る。

第66話

「ああ、個人的にはいくつか試したい魔法もあるんだが、実りの時期も考えると時間もかけてられないからな」

「ティアナの村の事もあるからな」

フィルは時間をかけていられないと話すと魔法の詠唱を始め出すとフィルの身体の周りには魔力が集まり始める。

「それだけじゃないがな」

「フィル、大がかりな魔法つばいけど、魔力は足りるの？ ティアナの支援はいらないの？」

「そ、そうです。あ、あの。私も歌います」

フィルのまとう魔力の高まりにフィリアはティアナの呪歌を使う必要性を聞き、ティアナは呪歌を歌い出そうとするが、

「…… 必要ない。ティアナの呪歌は対象を決める事ができないからな。魔光石の魔力にも影響が出る」

「そ、そうでした」

「それに必要なら、こいつらに魔力を貸して貰えば良い」

フィルはティアナの行動を静止し、ティアナは慌てて両手で口を押さえる姿にフィルは、くすりと笑うとフィルの声に反応するように空中に小さな光の球が舞う。

「フィルさん、これって」

「解放した精霊達が力を貸してくれてるって事か？」

「…… そう言う事だ、ティアナ、呪歌を歌う必要はない心を落ち着けて精霊達の声を聞け」

魔光石に捕えられていた精霊達は仲間達の解放のために力を貸そうとしているようであり、フィルは精霊達から魔法使いであるティアナに何かを教えようと声をかけ、

「は、はい」

「ねえ。ジオ、精霊の声って聞こえる？」

「少しはな。俺はお前と違って少しは魔法を使えるからな」

「な、何よ。それくらい、私にだって……」

ティアナは大きく頷くとフィルの言う通りに落ち着こうと大きく深呼吸をし、心を落ち着け始めようとする姿にフィリアは精霊の声など聞けるのかとジオの腕を小突くとジオは苦笑いを浮かべ、フィリアは自分だけ精霊の声が聞こえないためか意地になったようでティアナのマネをしようとするが、

「……無理だろうな」

「……フィアに心を落ち着けるなんて無理だろ」

フィルとジオはフィリアには無理だと言い切り、

「あんた達、その言い方は何よ！！ 絶対に精霊の声を聞いてやるわ」

「……この時点でティアナと違うな」

「ああ」

フィリアは2人の言葉が頭にきたようで2人を指差して吠える隣りでティアナは集中し始めてきているのか、フィリアの声は耳に届いていないようであり、

「……やっぱり、魔法の方が才能がありそうだな」

「失われし治癒の呪歌を歌う者か」

「失われし？ お前、ティアナの呪歌の事を知ってるのか？」

ジオはティアナの魔法の才能に感心したように頷いた時、フィルは小さな声でつぶやき、ジオはその言葉が聞こえたようでフィルに声を開ける。

「少しだけだ。呪歌に関する書物は少なくてな。調べきれていない。それより、そろそろ、放れてくれ」

「ああ。フィア、無駄な事をしてないで下がるぞ」

フィルはこれ以上は話す事はないと言いたげにジオに放れるように言々とジオはフィリアに声をかけ、

「無駄って何よ！！」

「良いから、下がるぞ。ティアナも」

「は、はい」

3人はフィルから距離を取るようにならざる。

第67話

「……」

フィルの口からは発せられた言葉には1つ1つに魔力が宿り、フィルの身体を覆っていた魔力は巨大な渦になり、

「す、凄い」

「……流石にここまで魔力が集められたら私でもわかるわ」

その魔力の渦はティアナのような魔法に携わる者だけではなく、フィリアのように魔法が一切使えないような人間にも理解できる強力な魔力は無数の光の球に分かれ始め、

「……魔光石が反応し始めたな」

「はい」

フィルの魔法に反応するようにまだ解放されていないはずの魔光石が宙に浮かびあがると同時にフィルの詠唱により、集められた魔力の球は魔光石を撃ち抜いて行き、魔光石は強力な光を放ちはじめ飛んで行く。

「……これで良いな」

「……何をしたんだ？」

はじけ飛んだ魔光石は光の粒子となり、グラン平原に降り注ぎだすと枯れ果てていた大地は生命を取り戻し始め、

「……キレイです」

「解放された精霊達が枯れた大地に生命を^{いのち}与える」

ティアナは取り戻されて行く、生命の輝きに目を輝かせる姿にフィルは今、この場で起きている事を確認するように呟き、

「……これで一先ずは依頼は完了ってところか？」

「ああ。だけど……まだ、先は長いな」

「たかだか、問題の起きている場所の一画でしかないのよね」

「……言うな。先が長すぎて嫌になるから」

1人この光景に目を輝かせているティアナとは対象的にフィル、

ジオ、フィリアの3人はこの先の事を現実的に考えており、

「まあ、俺達以外にも動く人間がいるんだ。データをまとめて他の奴らでもどうにかできるようにしないとな」

「流石にこんな芸当、あんたくらいにしかできないでしょね」

フィルは大地が枯れている原因である魔法式の研究データをまとめて他の人間が使えるように新しい魔法式や対応を考えないといけないとため息を吐き、フィリアはこれからのフィルがどれだけ大変かは理解出来るようだが魔法の使えない自分には関係ないと言いたげに笑う。

「まあ、とりあえず、片づけるか？ …… フィル、今更だけど、そう言えば、ドラゴンってどうなったんだ？」

「本当に今更ね…… まだ、光の球がドラゴンを包んだままね。あれって時間かかるの？」

「さあな。実際は魔獣から獣性を取り除く魔法だからな。ドラゴン相手だとどれくらいの時間がかかるかはわからない」

ジオはグラン平原での依頼が終了した事とこれからのフィルの作業を考えると早めに学園に戻った方が良くと判断したようで後片付けに移ろうとするがフィルが魔法でドラゴンを捕えていた事を思い出し、フィリアは未だに何も変化のないドラゴンを包んだ光を見上げ、フィルは開発中の魔法でもあるためか、魔法の効果が出るまでにどれだけの時間がかかるかわからないと首を振った時、

「フィ、フィルさん、あ、あれって、な、何が起きるんですか!？」

「ん？ 実験段階だからなどうなるかはわからん。まあ、魔力が弾けて襲って来ても問題はないから慌てるな」

「そ、そんな無責任な事を言わないでください」

ティアナはドラゴンを包んでいたはずの魔力の球が収縮して行く事に気づき、先ほどまで目を輝かせていた時とは表情を変えて慌て出すがフィルは落ち着いており、ティアナはフィルの落ち着きように声をあげるが、

「この光景ももうお約束よね」

「そうだな」

フィルとティアナの様子にジオとフィリアは苦笑いを浮かべる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6578v/>

性悪魔術師と白銀の歌い手

2011年11月13日03時18分発行